女鑑

第拾參年第八號

口繪

堺大濱公園水族館夜景

京都淑女學校職員及第一回卒業生

上野公園の櫻花

京都圓山の夜櫻と御室の櫻景

笠置山の名蹟

重要目次

明治三拾六年四月十五日發行

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

拔毛を止む

キューチキユラ石鹸にて頭髮を洗ひ後ちキューチキユラ塗藥を用ふれば毛の拔けることなくふけを生ずることなし色々手を盡して其効なき人は試に之を用ひらるべし

キューチキユラ石鹸は皮膚病を防ぎ肌のきめを細かにし小兒の浴用婦人の化粧用として最も適當なり



日本全國到る所の小間物屋に販賣せらる獨有名ある北米合衆國ボストン市ボッター製藥會社の製造に係る

東京市日本橋通三丁目 **丸善株式會社洋物店**

女鑑 第拾參年第八號 目次

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金三拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十六年四月十四日印刷
明治三十六年四月十五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊素一

東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 並木頁雄

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話 新橋 特八八番)

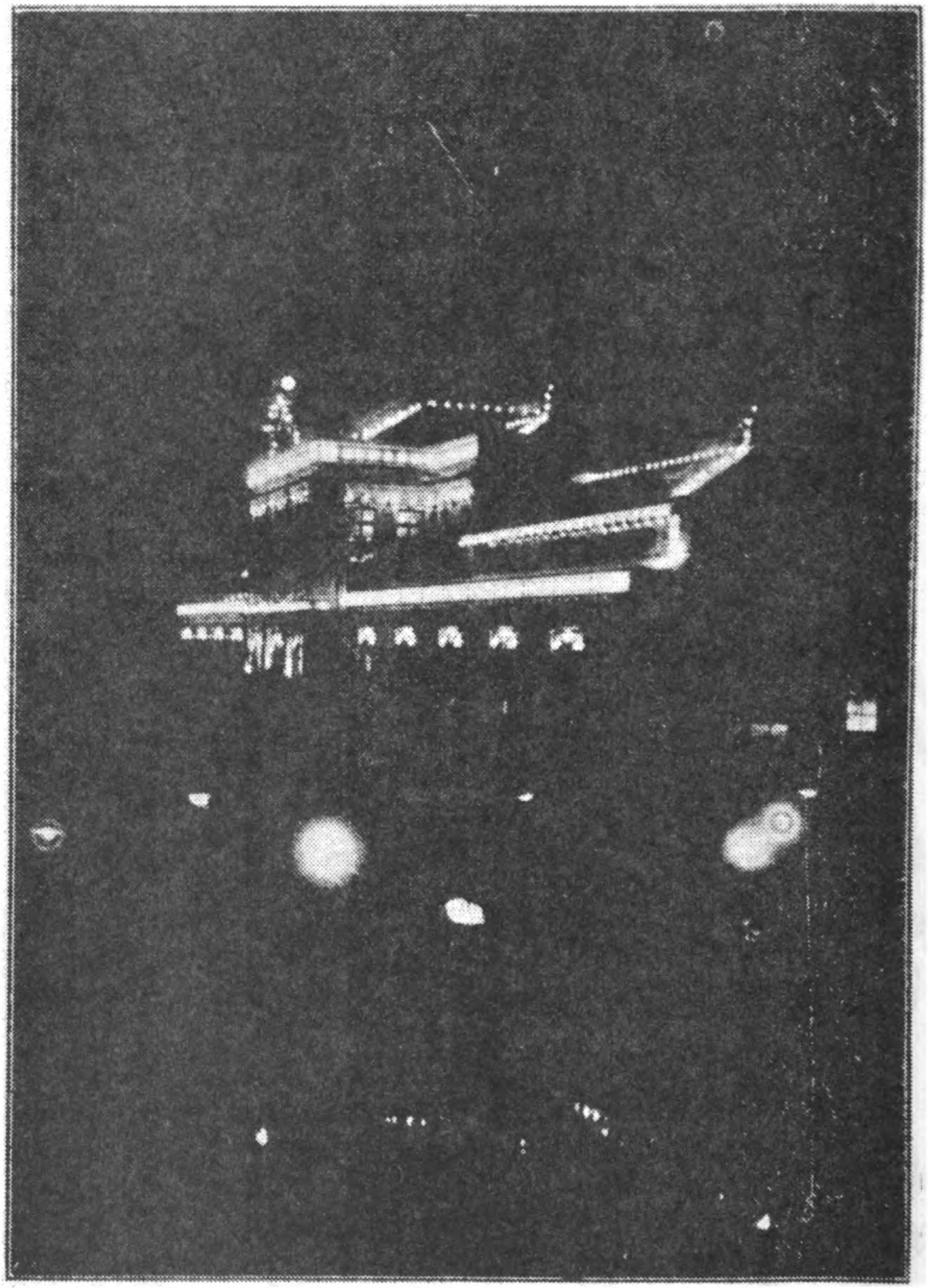
女鑑 第拾參年 第八號 目次

定價
一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓拾錢
廿四冊一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

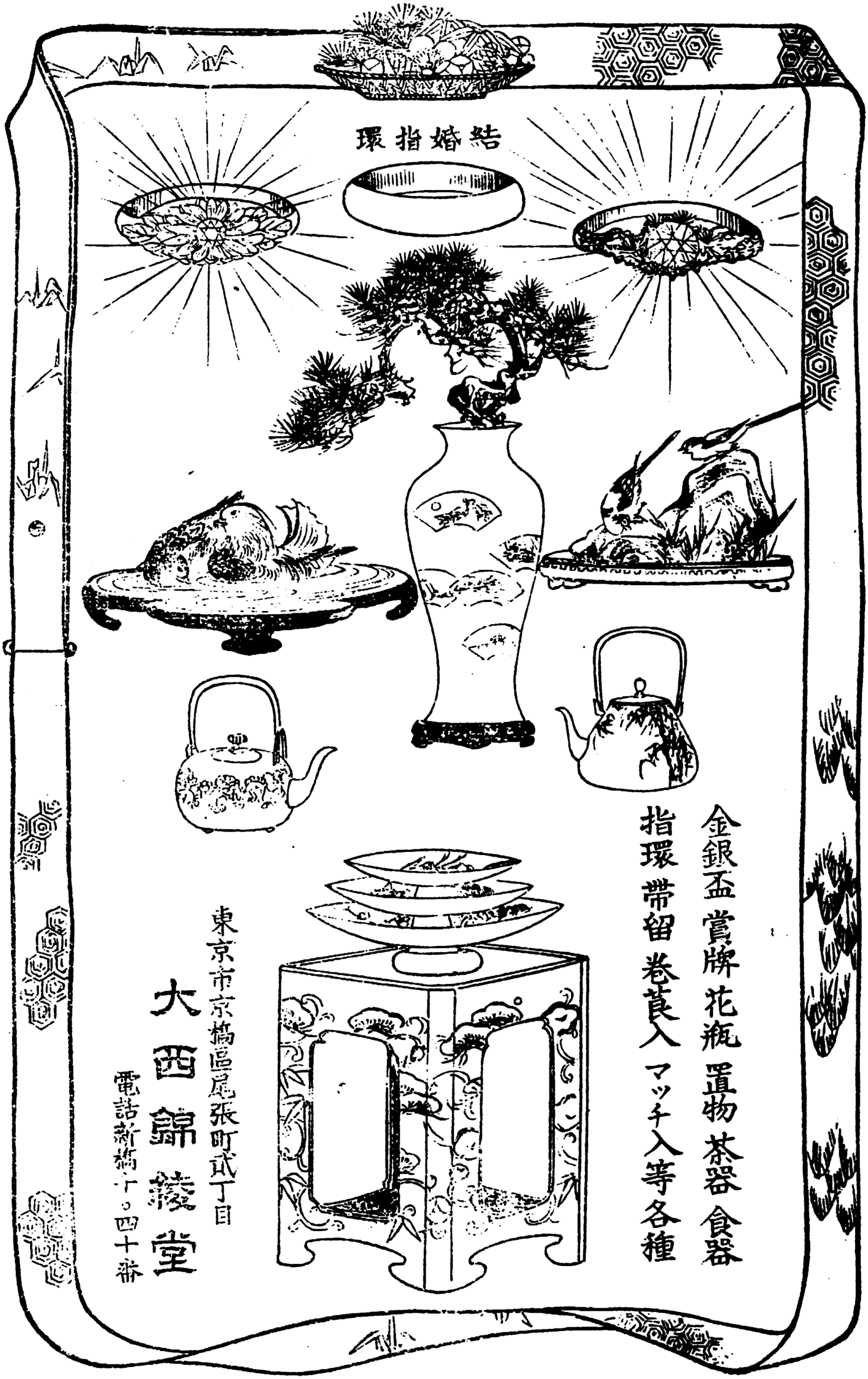
廣告料
五號活字廿三字詰一行 金三拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
（色刷は特に御相談に應ず）

明治三十六年四月十四日印刷
明治三十六年四月十五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊桑一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 並木眞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）



堺大濱公園水族館の夜景


結婚指環
金銀盃 賞牌 花瓶 置物 茶器 食器
指環 帯留 巻莨入 マッチ入等各種
東京市京橋區尾張町貳丁目
大西錦綾堂
電話新橋千〇四十番

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

●新刊廣告●

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

血塊 はやくをとし

藥名ビスマイン此藥は子宮を痛めず腹痛等毫も感ずる事なく如何程長き月經とまりも必ずたやすく下ります又二三ケ月位のは一劑分も用ればすぐ下ります猶又特別製を用れば五六ケ月以上のとまりも**醫師**を要せず**安全**に**流下**せしむる事を誓て保證す殊に惡血毒血古血を掃除し驚べき効驗あり

妊婦は即座に流產す決して服用す可らず但何人服用せらるゝも身體に害なきは勿論少しも危險なし安心して服用せよ

注意〜〜此藥は人に知さず內證で安全にタヤスク〜〜流下せしむ速に服用して安心せられよ

半劑六十錢一劑壹圓廿錢二劑貳圓卅錢特製參圓五十錢

●專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舖

毛はへ藥

原名（べグチス）價貳圓濃厚特製參圓五十錢送料十四錢此藥は日本現今の有觸たる瞞着的無効の藥品と異なり本劑を塗擦すれば皮膚を速に新陣代謝せしむると共に

皮膚を改造し毛根を生せしむるを以て如何なるはげも一瓶にて必す毛髮發生す●近頃流行の禿頭病●やけどできもの●はつぼう等のはげ●まゆ毛●口ひげ●はへ際うすき●婦人こまあたりのはげ●病後の拔毛●男女○○に毛なきに可驚効驗あり且拔毛を止め毛足を速む

●專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舖

林軍醫總監

驚くべき りうまちす根切 梅毒根切

複方克快丸

半劑試み

大効なければ決して**服**す可らず

◉五劑三圓五十錢二劑一圓五十錢送四錢
五年十年長病二劑服し全快す

複方克快丸は其効驚くべし克快丸に三倍す

責任調劑…順天堂合資會社長…植木彌一

本店 東京市淺草區みな木町
支店 大阪市高麗橋松屋町通

順天堂合資會社

全快禮狀時に新聞に揭載す………一劑七十五錢半劑卅五錢

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

木櫛製造卸小賣販賣所





この品は
安くて
とふりが
ようござい升

東京市淺草區諏訪町十番地
石坂兼吉

靴各種



東京市神田區小川町一番地

木戸商店

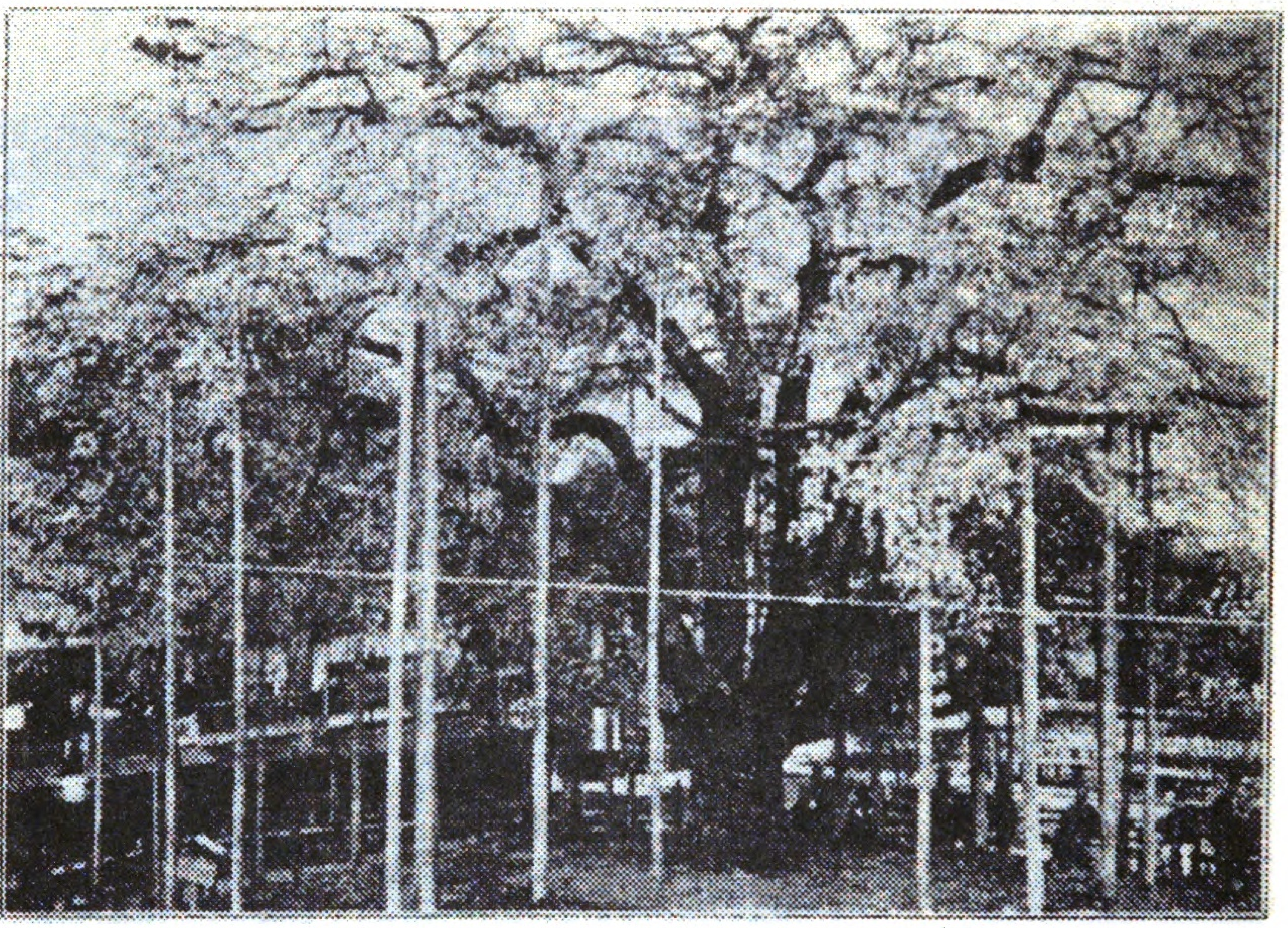
電話本局三〇四二番



京都淑女学校職員及第一回卒業生



上野公園の櫻花

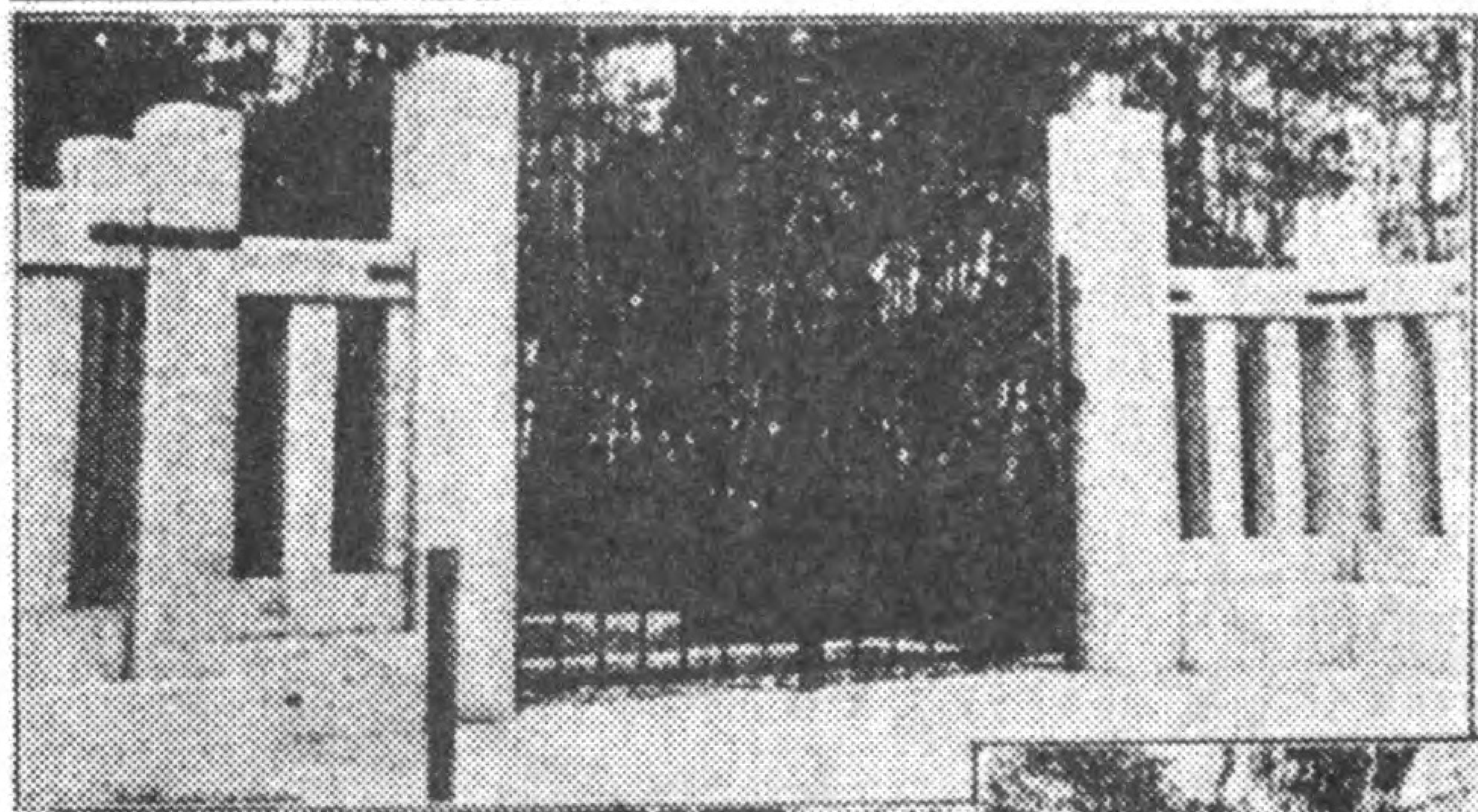


京都圓山夜櫻



同御室の櫻景

笠置山の名跡



行宮趾



名切石



彌勒石



ゆるぎ石

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新奇發明

増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し(即ち貳斗)となる大金儲的醸造化學作用の一大發明新法なり(附錄)腐敗酒直し法、醤油参倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法味啉速造法等以上の醸造家及び請負營業者の大有益案内……右今回披露の爲拾萬部限り

無代進呈

す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**ッの秘訣なり是非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に擬せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……(當館は去廿壹年の創立也)

發明元祖　東京市神田五軒町拾九番地

日本授産館

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元　東京市神田五軒町拾九番地

日新館藥房

血塊月やく

忽ち下る 確證新藥

本劑(調經丸)は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑参劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるに付き**姙婦**の服用を嚴禁すもし姙婦服藥せば**即座に流產**するを以てなり尤も本劑は何人服用するも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢參劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事

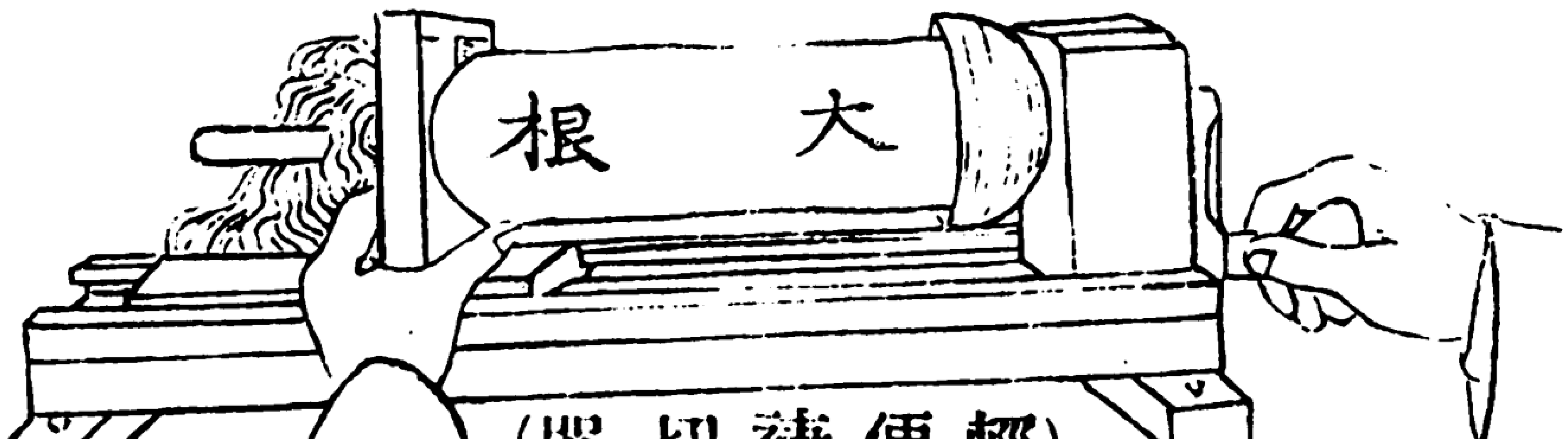
以上貳藥

專賣元　東京市神田五軒町拾九番地

日新館藥房

(電話下谷五四四六番)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



(輕便褄切器)

◎新發明大有益 御料理用 輕便褄切器

●定價金八十錢▲送料拾五錢●輕便手劍卅錢▲送料四錢

本器は男女を問はず小兒と雖も熟練を要せず大根人參胡瓜等其大小を論せず二分間を出でずして自から皮を去り見事糸の如く切る事を得る新發明大有益大輕便の器械なれば苟も褄を使用する營業者にして爾來本器を使用せば實に斯界の一刷新を見るべし尚官吏商家に拘らず自宅調理の塲合に使用すべき方法を探り輕便手劍の分を製しあれば晩酌御手料理には缺く可からざる發明器なり乞ふ兎に角一個を御求の上御試しを願ふ

●但し切干用ナマス用の味噌汁用の荒切器は同製にして同直段に御座候

◎三浦專賣 輕便野菜早そぎ器

定價金 甲一圓二十錢 乙九十錢 送料十五錢

本器は牛蒡人參胡瓜甘諸大根等を細く太く其巾も廣く狹く其他そぎに困難なる牛蒡の如きも極めて薄くそぎ得る器にして使用法至て輕易なれば小兒にても少の熟練を要せず負傷等の憂なく一二分間にして極めて見事に山の如く切り得る輕便有益の器なれば御試用の上御賛與あらん事を偏に希上候

◎三浦專賣 輕便捕鼠器

定價金十七錢 送料十錢

此の捕鼠器は在來の者と異なり一度器械に掛りたるのは決して捕へ損ふことなく如何なる老鼠と雖も容易に捕へ得る完全なる器械なれば必ず備へ置くべき必要具たる事は申までもなし兎も角御試用あらん事を希上候

各府縣下に三ヶ所宛の特約發賣店を設く望の方は至急御申込あれ

東京市淺草區松葉町五十三
合羽橋際諸器械製造所

製造元 三浦商店

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑　第拾參年第八號

看花の感

花を開くの雨は、また花を落すの雨ならざるを得ず。されば一樣の檐聲にも、前後の情同じからずと、古詩人は唱へりき。

今は東風駘蕩として、百花を吹き、櫻花の雲、李花の霧、到る處に簇りて、滿目の春光、洵に樂むに堪へたり。アヽ一年行樂の最好時期は今日に在り。上野の丘、墨田の堤、士女絡繹として、衣傘相望み、冠蓋相顧みて、謂ゆる墮珥遺簪の道途に狼籍たるもの、豈に故なしとせんや。敢て問ふ、多感多恨の紅孃子、此の融々の光景に對し、如何なる感懷をや催ふされたる。

思ひ見よ、人生もまた春秋四季の順序を逐うて、その歷程を經過するものにあらずや。圓滿

に經過の功を了るものは幸福の人なり、此歷程の間に蹉跌して、失敗するものは不幸の人なり。而も不幸の人は常に多くして、幸福の人の甚だ寡きは、何故ぞや。花開いて風雨多し、人生亦た妬雨嫉風なるものある乎。

女子の春は言ふまでもなく妙齡の時にあるなり。而して女子身上の花が、鮮娟として開くべきの時期は、寔に結婚の時ならざるを得ざるべし。結婚は女子をして、その身上の花を開かしむ。而も時としては、その身上の花を落すことなきにあらざるなり。見よ、世間幾多の女子は、結婚に因りて、一身の幸福を買はんことを望み。而して往々之が爲めに一生の不幸を招くものあるにあらずや。同じく是れ雨なり。開花の雨あり。落花の雨あり。同じく是れ結婚なり。幸福の結婚あり、不幸の結婚あり。若し一たび不幸の結婚に遭はんか、女子身上の花は、直に散りて、その春は忽ち去らざるを得ず。花や散り春や去るに及んでは、身心安んぞ愴涼の思なきを得んや。斯の如くにして、女子生涯の眞福は、殆んど復び望むべからざるに至るなり。古人云ふ、女子身上眞可憐と、螓を售り、情を鬻ぎて、昨日は東、今日は西なる絮因萍果の人

ならずとも、つく〴〵顧へば余輩は總ての女子に對して、眞に可憐の涙なきを得ざるなり。
吉士と信して、悦びて一身を許したる其人は、輕薄の人なりき。兩親の勸誘に隨ひて、進んで嫁ぎたる其人は、不德不倫の人なりき。而も一たび百年の苦樂を共にせんと誓ひたる以上は、輕薄の行を蒙むるも、猶は忍ぶべく、不德不倫の行に對しても、猶は堪へざるを得ずと雖も、冷遇酷待の餘、遂に破鏡の歎を見るに至つては、罪無くして、配所の月を見るものと同じく、世は概ねその是非を問はずして、唯、出戻り者なる名稱の下に、冷評し去りて、殆んど顧みざるの狀況あるは何事ぞや。嗟乎是れ不運なる結婚によりて、其花を散らすものにあらずや。不幸なる境遇の爲に其春を亡ふものにあらずや。斯の如き事例は、世間往々にして觀るところ、青春妙齡の身を以て、花姿早く凋謝して、色褪せ光消え、思に沈み、愁に悩める可憐の女性を見る毎に、予輩は覺えず暗涙を催ふさゞるを得ざることあるなり。
三春根に返るの花も、復び翌春の光を待つべきに、女子身上の花は、一回碎けて、また開かず、五更峰に沈むの月も、猶は三五の明を期すべきに、女子心裏の月は、一度消ゆれば、また

圓ならざるを思へば、誰か又た其初に於て、結婚の愼むべきを感せざらむや。

吾が可愛の孃子等よ、卿等花を看んとき、如何の感懐をや起されつる。たゞに香を愛で、色を賞せんは、愚婦凡女もみな能くするところあり。卿等の才と學とを以てして、豈愚婦凡女と撰を同うすべけんや。予輩は卿等に向ひて盛者必衰の理を悟れよと言ふものにあらず。たゞ一片の感懐を起して、身心の計を慮ばかり、輕擧を愼みて、圓滿に人生の歴程に上るべき幸福の人となり、其の身上の花と心裏の月とを全うせんことを望むにあるのみ。

（青　眼　子）



二重橋御門前の所感

興風女學校長　山田倉太郎

さき頃學生墮落の風說一たび新聞紙上に傳るや、遽ち當局者の注意を惹き起し、視學官は徧く公私の學校を巡察し、有志者は俄に風俗改良を唱ふるに至れり、貴下の所見は如何になど來て余に問ふ人ありしかば、余が數年前二重橋御門前にて、感ぜしことゞもを陳べ聞かせしに、屏後の書生之を筆記し、十數紙を累るに至りぬ、さすがに反古函に投ぜんも惜しく、他日閑を得て、點竄せばやと、篋中にすて置きしを、這般女鑑記者の請はるゝまゝに、之を與へつ、固より一場の小話未だ意を盡さず、讀む人幸に心してよ、

山田童翁記

余兩三年前、丸の內を通行せる折から、赤毛布を纏へる老人四五輩が車夫に案內せられて、二重橋御門を感拜せるを見て、當時大に同情の感に堪へざるものありき、そは從來余も丸の內を通行する時は必ず帽子を脫して、一禮するを常とするによりて、あゝこれ余と同情なる地方の老人かなと、懷しく思ひしなり、さてその折しも傍邊を見れば馬車を軋らする人、腕車を驅る人、步して通行す

る人等許多ありしが、其中には男女學生らしき者の笑謔して過ぐるをも、見受けたり、因つて余熟く々想ひ回らするやう、此學生らしき者は果して何處の者なるぞ、想ふに必ず、此の赤毛布を纏へる老人の如き人々の子女ならんと、是に於いてか地方人と東京人とに二樣の精神あるを聯想し、又深く子弟教育の忽諸にすべからざるを感じたり、東京人は固より輦轂の下に居て、親しく皇上の恩澤に浴せるのみならず、文華の中區に住居して、これが空氣を直ちに、呼吸する者なれど、隨て地方人に比して、諸般の見聞も廣く、智識も進み居る者なり、而して彼の赤毛布の如きは、氷店の椽臺に敷かれ數多の人に尻着けらるゝ物なるに、此の老人等は、之を旅行唯一の利器となし、喜で之を使用せり、是乃ち東京人と地方人との知想の懸隔せる所にあらずや、東京の繁榮は地方人の庇蔭によれるにも拘らず、一般に彼等を赤毛布と稱して、車夫に至る迄で、之を輕蔑せるはいかにぞや。然り而して輦轂の下に住して、自ら智識ありと稱する東京人は、却つて己が輕蔑せる赤毛布老人に對し、德義の點に就きて恥づべきこと、數々あるを知らざるなり、抑く其の赤毛布と稱せらるゝ地方人は、比較的御所に緣遠き、數十百里山海僻陬の地に居て、年中筋骨を勞し、謹で租税を納め、尙も勤儉の余財に資りて來りて、東京を見物し、御所を感拜するが如きは余をして、昔の高山彥九郎をも喚回して感想せしめざるを得ざるなり、是等赤毛布は一旦事あるに望みなば、義勇公に奉せんこと必ずしも都人士の後に落つるものにはあらざるなり、豈誠に賴もしき人ならずや。

輦轂の下に居る東京人は、直に皇上の恩澤に浴しながら、御所を一禮して過ぐる者すら稀なるは

是如何なる理勢ぞや、慣れて侮るは人情の常なりとはいへ、抑も禮義てふ國家の締めくゝりは緩びたりとやいはん、忌憚なく言へば、これ實に明治維新以來官位ある人々の德義心輕薄なるが、その素因をなせるものにして、學校教育者の不用意も亦與れりと謂ふべし、

二重橋御門前揚々馬車を軋らせ、腕車を驅る人士及び男女學生の笑謔して過ぐるは、現に德義の敗退と學校教育の不完全なることを證するに足れり、

余は尙進で之を回想せり、今此の德義ある赤毛布老人は、故鄕に歸りて如何にか云はん、必ずやその見聞せる所に眩惑して、東京は文明なり、優美なりといふべからむ、然も亦幾多の學生等が暑中休暇毎に歸省して、地方に東京風を吹かせ、輦轂の下、教育の進歩せる談をなし、其子女を遊學せしめんことを說くもあらん、さなきだに老人等は既に東京の文明を信ずれば、其の子女を遊學せしめて、教育ある人物として、財產を讓らんとす、又能く其の子女を教育せる親と褒められて、面目ある婿に嫁せしめんと欲するならん、其の子女も亦東京に出でゝ立派なる教育を受け、名譽ある世に立たんと欲するなるべし、是に於てか、勤儉の余財は忽ち學資に投ぜられて、玆に東京遊學の擧立所になるに至らんこと必せり。

さて其時に當り、子女の情緒は如何ぞや、一つには東京に上んとの、嬉みあるにも拘らず、一つには日頃恩愛あつき慈親に別れんことの悲情に迫りて、誰か一滴の熱淚を催さゞるものあらんや、家親の情は乃ち

旅人のやどりせん野に霜ふらば
我子はぐゝめ天の田鶴群

父子女の情は所謂

　父母をいはひて待たね筑紫なる
　　みづく白玉とりて來までに

と彼の萬葉集にある天眞爛熳たる性情を歌ひたるに比すべくもあらん、是如何なる薄情の子女といへども、滊車中までは、必ずや此の情緒に堪へざるなるべし。

さて上野新橋と各停車塲に下りては、滿目繁華雜沓耳目を一驚せしむるならん、大道に樂隊あるあり、男女琴笛合奏の乞食のあるあり、況んや其他に於てをや、櫛比せる家並に飲食店あり、鮓、團子、雞、牛肉、殆んど僻地にては、二町三町若くは一里余も行かされば、無き所のもの額前に紛紛たり、衣服其他の粧飾品に至るまで、皆容易に得難き品々自身の目前に雜沓せり、芝居の面白きあり、寄席の可笑しきあり、足をも勞せぬ鐵道馬車あり、坐して走る腕車あり、その千態萬狀極まる所なきは一として、地方人の耳目を驚喜せしめざるなし、是に於いてか、先入學前一週間位の見物を爲し、然る後學校に入りて、受くる所の學科は、皆地方に傲るに足らば、直ちに書して之を父兄に報ず、父兄の喜び知るべきなり、而して日曜日には必ずや、運動遊歩に出で、以て勉學の勞を遣ると稱す、父兄は家鄉にありて、指を屈して子女の名譽の卒業を爲して、早く鄉に歸り、家を繼ぎ良婿に嫁せんことを待つならむ、さるを何ぞ圖らん游學の子女は何時しか遊惰に耽り、淫靡に流れ、終には學生の本分を忘れ、その身心全く墮落して、先に笑つて見聞せし樂隊琴笛合奏の乞食寄席芝居をも自ら之を演するものあるに至らんとは、噫。

若し夫志操確固たる善良なる學生たらば、日曜日

と雖も猥りに光陰を惰過することなく、その行爲は智識を增進する方に向け、又散歩運動には圖書館博物館の觀覽又は善良なる朋友親族の訪問に用ひ、終には首尾よく學業を卒り、名譽ある紳士となるもあるべし、是大いに慶すべきことなり、父兄の喜び果して如何ぞや、思ㇾ先知ニ任重ㇾ有ㇾ子始休ㇾ肩とやいはん、

何所ㇾ謂

九月山村霜露繁。客衣新授有ニ餘恩一。鄕書一讀須ニ三拜一。中認慈親老涙痕。

休ㇾ道他鄕多ニ苦心一。同胞有ㇾ友自相親。柴扉曉出霜如ㇾ雪。君汲ニ泉流ㇾ我拾ㇾ薪。

の如き孝心を抱きて、鋭意苦學する人もあるなるべし、是等は固より善良の學生なり、而して是等の徒もなほ卒業の後直ちに鄕に歸りて、膝下奉歡の人は稀なるべし、必ずや官に野に名譽ある職に就き都下に住居せんと欲するなるべし。女子の見事卒業せるものも、住まば都下に嫁せば名譽ある人にと志し、望蜀の念はいやが上にも良緣を求めて、都下の滯在を長うせんと希ふもの多かるべし。

是現に女子二十四五歲にして、都下に寄留せる者多きを見ればこれを證すべきなり。

斯の如く一旦游學の子女は何時しか都會奢侈遊逸の風に感染し、都下在留のもの益多く、終には其父兄をして、其子女一度遊學に出せる以上は、結果の善惡に拘らず、生涯家庭團欒の樂を享くる事鮮からしむるに至るべし。

其墮落書生の如きに至りては、固より所謂

爺孃夜々寒燈下。萬里風濤勞ニ夢思一。

の情にて或は生涯會見の期無かるべきか、然らば則ち最初子女を上京せしめたる時の情緒に戻

るところなきを得んや、實に氣の毒なる至りと謂ふべし。

余は更に又都人士と赤毛布の老人とにつき、大に感慨を深くするものあり、溯りて歴史を稽ふるに昔王朝の隆なりし頃、今の科學の盛なるが如くはあらざりけめども、文學は大に發達したりしなり、歌文の如き今現に其の糟粕を甞めつゝあるを以つても知るべし、當時田舍人は都人士を歌うて

　百敷の大宮人はいとまあれや
　　櫻かざして今日もくらしつ

と是都人士の文明にして、優美なるを羨稱せしものにあらずや、而して都人士の裏面は如何なりしぞ。

（未完）

女性の心

前田長太

西洋では『法律を作る者は、男子、風俗を作る者は女子』と云ふ格言がある、東洋でも『女子は德風の淵源なり』と云つて居る、然し女子が斯の如く道德的勢力を有つて居るのは何の譯であるか、余は思ふ、全く『其心』に偉大なる力が宿つて居るが爲であると、女子の心は愛の泉である、而して愛は萬物を薫化する力のあるものである、女子の心は親切の宿所である、而して親切は萬事に打克つ勢の有るものである、女子の心は其の凡ての淑德美質の源である、苦を慰むるも其心、樂を供するも其心、性を優美にする者も其心、情を淸むる者も又其心、女子の心には凡ての秘訣が寶藏されて居る、勇氣沮喪せる武士を奮起せしめ

粗暴激烈の蠻人を和らげ、私心横發せる色情漢を制禦する術までも皆其の方寸に在るのである、時に稚兒の守護天使となり、時に老人の慰安者となるも皆是れ其心の然らしむる所、嚴格に過ぐる者には閑雅の風を與へ、粗暴に失する者には優美の性を與ふるも、皆是れ其心の術である、嗚呼女性の心は實に萬能者である。

　赤誠と熱愛は女子の心の特性である、女子の生命は赤誠と熱愛がなければ一日も繼續して往くことの出來ぬものである、何せなれば始終何か愛する者がなければ、一日も生存して居られぬ性質の者である、父でなければ母、母でなければ夫、夫でなければ子、子でなければ兄弟と云ふやうに、何等かの愛すべき者が其の生命の必要條件である、其の熱愛を献ぐべき者、其の赤誠を傾くべき者がないときは、直に病人となる、直に神經病となる直に不幸薄命者となる、故に實際に其の赤心を献ぐべき人がないときには、其の想像の裡に假想の人間を造つて考へて居る、是が爲め時々幻影に欺かれて、不吉な言動に陷る事がある。

　女子のみ己を忘るゝの樂を解して居る、人の爲に世話し、人の爲に親切を盡し、人の爲に身命を犧牲に供してそれを非常の愉快に思ふて居る、子供の手を携へて歩ましむる、ときも貧民を裏棚に見舞ふときも、病人を其の床上に看護するときも、苦める者を慰め、泣ける者の涙を拭ふときも、女子程殺身成仁的心情云爲を有する者はない、男子の考へで理窟を云つて居る所に、女子は感じて働きつゝあるものである、磔上の聖人の下にも婦人があつて共に泣き、赤十字社の内にも婦人があつて大に働き、負傷を癒し、不幸を慰め、

戰場にまで出で、彈丸矢石の間を冒しつゝある仁愛女、看護婦等を見れば、婦人の赤心、婦人の獻身的事業と云ふものは實に感心なものである、男子の心は往々利己主義であるが、女子の心は利己主義を知らない。

世に子供あり、老人あり、病人あり、貧民あり、不幸薄命者ある以上は、婦人の手を假りる所多いのである、婦人は地上に於て天の神を代表して居ると云ふ語は、天德の仁愛を行つて、到る處に恩惠を蒔きつゝあるを意味する言葉である、如何にも婦人は仁慈ある神の恩愛を分給したかのやうに考へられる。

然し婦人の心の美質の最も優美に顯はれ出るのは家庭の内である、家庭の内に於て上は天の祝福を享け、下は世の愛眷を受けるのは、實に女性である、子女の無邪氣、妻の貞操、母の賢明、嗚呼是れ實に家庭の寶である、勿論此の美なる理想は何れの家庭にも現實にせられて居ると云ふ譯ではないが、其の幾分かは何れの家庭にも見受けらるのである、母の賢明がなく、妻の貞操がなくとも、娘子の無邪氣は必ずあるに相違あるまい。

女子が其心に於て如何なる妙術と秘訣とを有つて居るかを知らんと欲せば、其の生活の困難、其家計の不如意、其の子供の厄介、其の亭主の不機嫌などある時に、如何に嬉しく、珍らしく、まめ〳〵しく働きつゝあるかを見ても、一目瞭然である、彼は子供の泣けるをだまし、良人の苦めるをなだめるに於て、其の手術極めて巧妙である、而して是れ皆其心が教へるのである、男子ならば斯る場合には如何程其心に探ねても、中々妙計には見當らない、往々は失望に際會するのであるが、女子の心、即ち彼の母の心、妻の心、姉妹の

心には如何なる妙計が包まれてあるよ、子供の厄介を忍び、夫の心配を讀み得る賢母良妻の心は如何に貴さぞ、賢母の心は子供の避難所である、良妻の心は夫の休憩室である。

若夫れ不良の夫に嫁ぎ、不運の境に陷り、日夜壓制と困苦の下に其生を送れる婦人が、涙を袖に隱し、笑を顏に示し、默して忍び、陰に祈り苦痛の乃で其の命の玉の緖を切らるゝまで辛抱しつゝあるが如き、嗚呼是れ何たる勇氣であらう、一時の致命は忍ぶ可くも、一生の致命は忍んで忍びきれぬものである、女子は實に其心に於て大なる者である、其の大勇の手本は其の苦境に於て見はれるものである。

述べて愛に到れば、女子の心を養成する敎育の如何に必要なるかは、喋々するを待たずして瞭である、今の敎育は女子に對しても其の智育に偏重して其の德育に餘り重きを置かぬやうである、女子に重んずべきは其の精神にあらずして、其の心である、女性の凡ての勢力、凡ての優點、凡ての美質、凡ての德性皆其心より出るものである、良妻賢母として崇めらるゝは必ずしも其の知識の秀越せるが爲ではない、其の品性の優美なるが爲である、利口な婦人は時として人に惡まれることがある、が、心の麗はしき女性はイツモ愛される、世の敎育家たる者は女子の心育に重きを置かなければならぬ。

（完）

春かせに雲のしがらみむらきえて
たかれをあらふはなのしらなみ

吉野かはあさせ白なみいはこえて
おとせぬみづはさくらなりけり

鴨長明



遊女龜菊

文學士　小林雨塔

(一)　白拍子——遊女

唐の一詩人歌うて曰く、人門を出れば皆營あり、と、實にや人生の習として、此の世に生きとし生ける者、誰れか朝暮の營なくして可ならんや、世には父祖の汗血に成りし鉅萬の富を擁して、空しく徒食遊逸に年を經る醉生夢死の輩なきにあらず、彼れ等僅かに祖先の餘澤に憑りて饑餓を免かると雖、此れ僥倖のみ、獨立自營てふ人生の第一義を遺却せること甚だしと謂ふべし、遊食逸居の民これ所謂獅子身中の虫、亡國の分子なり、あゝ境遇何ものぞ、彼等一技一能なくして尚行路難の嘆ある人生を終へ得るはたゞこれあればなり、しかも目を轉じて一方を見よ、此の境遇に制せられて終生險路窮巷さては山野に草木と共に朽つるものもあるにあらずや、其日夕營々として炊爨の資を得んとしつゝ、尚簞瓢屢々空しきは何の故ぞ、人或は曰く境遇は自から作らざるべからずと此れ容易に云ひ得べくして實は行ひ難き言なり、世の實情は此の一言を以て人間批判の標準となすを許さず、況んや人文尙幼稚にして、教化普からず、藝能開けさる時に當り、如何なる偉人傑女も脫し得ざる桎梏——社會の階級、貴賤の差等——の縛する所

となりて「終生土芥と同く他の足下に蹂躙せられ、旋て子々孫々此の困辱を脱し得ざりしものありしは何故ぞ、言ふを休めよ四民平等と、此れ如何なる時代にも通ずる人生の眞相に非ず、社會の實相は寧ろ強者の壓抑にあり、先天的の境遇に制せらるゝは遂に免かれざる所なるべし、人間智能の高下は世態の厚薄を生ずと雖、又學ぶに便なく、聞くに師なく境遇の制する所になりて常に朝夕の業に逐はれて遂に自ら所謂境遇を作り得ざるも比々皆然り、甚だ憐むべきにあらずや。

古今東西を問はず世には遊女の類少なからず、彼等慣るゝ所は燕樂遊蕩の業、好む所は淫奔寵嬖の行のみ、誠に人生の醜汚なり、社會の暗面なりされど試みに形に憑て實を斷せず、唱歌淫樂の事相の反面を覗へば彼等が好んで爲す所の愁眉啼粧、あるは折腰の步、齲齒の笑の中に果して處世の艱苦の影を認め得ざるか「顏に笑うて心に泣く」又慘ならずや、彼等の多くは好んで醜を行ふにあらず、實に社會の人心は之を要求するなり、仙皓西鶴の罵りし如く「神代後來男女のいたづら止む事なき浮世」にありては憐むべき彼等を取て一般社會の犠牲に供せざるを得ず、世相に通ずるものは、誰か此の言を非とするを得ん、余は此の點よりしても徒らに彼等を責むるの酷なるを思ふ。

余を以て徒らに彼等汚女の爲めに辨説するものとなす勿れ、花晨月夕浮世の快樂を擅にするの士女、一度遊里敎坊の中、人知らぬ苦勞に泣くものに想到せよ、徒らに他を批評せんよりは先づ同情せよ、這般博大なる心容ありて、初めて有情の人と云ふべし、元祿時代の大戲詩人近松巣林子は淸盛の妾、常盤の苦境を叙して

敵淸盛に身を任せ、年月の物思ひ、傾城白拍子

の憂勤めも是程にはよもあるまじ、義朝の御年忌御命日にわたつても精進破らせ酒宴の友、未來の八まで迷はずば、そもや如何なる報ぞや……夜は目で泣き晝は胸、涙の絶ゆる隙もなく、十年といふ春秋ゝ暮かねたる歎きの程、誰れにか語り盡すべき、

と云へるは、直ちに世の姿色を以て行とするものに就て云ふを得べく、巣林子は實に彼等に對し大なる同情心を有するものなる歟。

我が國遊女の起源は何時の頃よりのことなりけむ詳ならねど、萬葉集に既に「さぶるこ」と詠めるは此の類ならんと云ふ、若し然らば由來するところ甚だ遠し、中古傀儡子なるものあり、蓋し一種の賤民なり、固より班田にも與からねば、生課役なく、一畝の田をも耕さず、一枝の桑をも採らず、住むに定居なければ、水草を逐うて轉移すとも云ふべく、臥すに家なければ、殆ど山野露宿の民なり、男子は弓馬を使ひ、狩獵を業とす、女子は即ち傀儡とて遊女の類なり、姿容を作り唱歌淫蕩して妖媚を求む父母若しくは夫之を知れども戒めず、行人に逢うて振容嫌はず、一宵の佳會能く生活の資を得るのみならず、多くは美衣美食せりとかや、此の者黨をなし、東國は美濃、參河、遠江等にあるもの豪貴なり、○西は播但諸國に土臺わり、又西海にあるものもあり、平安朝の末後冷泉の比に及では、彼等盛に京師に横行し男は双劒を弄し、或は木偶を舞はして巷路を行き、女子は尚淫蕩を業とせり、夜に入ては即ち百太夫とて道祖神を祭り、（蓋し生殖器崇拜なり）鼓舞喧譁して福助を祈る、皆歌舞を能くし、其美聲殆ど韓娥の塵を動かし、餘音梁を繞ぐると云ふべく、今樣、古川樣、足柄、片下、催馬樂、黑鳥子、田歌、神歌、

棹歌、辻歌、滿固、風俗、呪師、別法士の類は其歌曲より、此に中古に於ける一階級の民なり、恐らくは外國歸化の流民若しくは後世非人の類にして、田畑を有せず、生活の資を得がたきまゝ、男は禽獸を狩て業とし、女は色を鬻ぎて漸く炊爨の勤をなすを得しならん、瓢は即ち醜なりと云へども全く彼等の悲しむべき境遇の然らしむる所、寧ろ哀憐すべき者ならずや、此の傀儡の諸國にあるものも即ち後世驛路の發達と共に東西の宿々にありし遊君遊女の初めなり。

後冷泉帝の末に成りし「更科日記」を見れど、相摸足柄山の麓の宿にあそび兩三人出で來たり、月の前に傘さゝせて居え歌うたひし事見えたり、あそびは即、遊女にて傀儡と同じきものなるべく、美濃の野上の宿にもありし由記せり、王朝の末(天養仁平の比か)美濃青墓になびきなる傀儡あり、その

　はかなくもけさの別のをしきかな
　　いつかは人をながらへて見し

てふ一首の詠「詞花集」に入れり、されば卑賤なりと雖も往々歌詠を能くするものありしこと知らるべし。

王朝の中頃、宇多帝の頃、江口、神崎等の地にうかれめなるものあり、又遊女にて、恐らく傀儡等と同じきものなるべし、當時江口は淀川の分流河内に向ふ所にして、京師より住吉天王寺に赴く途に當る殷賑の河港なり、又河尻の地あり、神崎は攝津にあり、これ西國より入江の者必ず經ざるべからざるの地、又蟹嶋と云ふ所あり、此等の地人家櫛比接續して絶ゆる事なく、又長者なるものゝ家あり、即ち遊女の長にして、此の邊娼女群を成す、蓋を以て標となし扁舟に掉し、航泊の船舶を

逐ふては枕席を薦む、故に此等の地釣翁商客舳艫相連らなり、殆ど水なきが如く、天下第一の樂地と稱せられたり、上王公卿相より下士庶民に至る迄、此の地に遊ぶを憚らず、閑暇の輩、京洛より江口に來り或は長者の家に入て遊宴を事とし、西國より入京の輩先づ神崎に就て盤遊せしと云ふ、遊女の輩南は住吉西は攝津の廣田の神に祈りて微嬖を求め、又百太夫を祀りしこと傀儡と相似たり。右は河海殷賑の地に徘徊せし遊女なり、此の外中國室高砂等の地にも早く此れありしなるべし、後冷泉の比、肥後に檜垣なる遊女あり、筑紫宰府等に往來し、當時に名を得て地方在任の國司等の愛を蒙れり、其歌集一卷檜垣嫗集とて傳はれり、されば此の頃遊女の類西海にも多くありしなるべし。

此の間東國の宿驛には遊女傀儡の類益多く其史に散見するもの鎌倉の初に至るまでのものを數ふるも、近江の海津、鏡、美濃の野上墨俣青墓、三河の矢矧、赤坂、橋本、遠江の池田、駿河の手越、黄瀬川、相模、足柄、大磯、鎌倉の化粧坂等尚此外にもあるべし、當時宿の長者と云ふは即ち東西の行人を送迎する逆旅の主にして、同時に遊女の長なりしに似たり、世々女子を以て家を成し、母子相承けて業を傳へしが、されば必ずしも永年を契りし夫あるに非ず、家には多くの遊女を集め置き、行人の需に應ず、宛然今の宿驛の娼家なり、中國には室高砂、鞆等見ゆ。

あそびの京師に居るもの亦甚だ多し、彼等或は母子姉妹居を京中に求め、上忝くも禁闕よりして月卿雲客下は士庶の招聘に應じて、姿を賣り藝を鬻ぐ、或は豪貴の家に推參して、歌舞を賣るも彼等の習なりしとかや、其出入後には車に乘りしも

あるが如し。

あそびの好む歌には今樣と朗詠あり之を總稱して郢曲と云ふ、今樣とは今俗に云ふ當世風の義にて、當時流行の俗謠とも見るべし、されば初めは文字の數も定まらざりしを、後には七五の調を四句拍子に謠ふ又六句なるものあり、華山、一條の朝より熾なり、之に四季の今樣、只の今樣あり、又後白拍子の輩之を謠ふよりして、今樣の事を一に白拍子と云ふ、之に佛祝の白拍子、契の白拍子など云ふ、稱見ゆ、今樣は佛法の興隆につれて多く神佛の本緣を謠ふ、佛祝とは此の故ならん、契の白拍子と云ふも同く佛との契緣を歌ひしなり、こは扇拍子をとりて謠ひしが、朗詠とは詞章の佳句を取りて諷誦するものにして、今の詩吟の類なるべし、此等當時世に流行せしものにして女子も品よきは此等を歌はざりしが如く、專ら遊女の類のみ之を謠ひしが、今樣は鳥羽崇德の比より最も熾にして、通憲入道信西監物淸經等之に名を得たり高倉帝承安の比には宮中に今樣合などいふ事あり、後白河上皇親ら今樣を歌はれたり、下遊女の輩に至りては四三、目井、乙前、大進、小大進、かね、はつ聲、さいのあこまろ等聞えしものありしと云ふ。

鳥羽の朝の比よりして白拍子なる遊女の一種あり、初め按察大納言宗俊の孫京極大臣宗輔の女あり、水干に立烏帽子を被り白鞘卷をさし、男子の裝をなして舞ふ、之を男舞と云ふ、帝若御前と云ふ名を賜れり、又箏曲の名手にして若御前の流と云ふあり遊君白拍子等の彈くものなれば知らぬ耳には面白けれど、知る耳にはあらぬものにて箏の正流には背けりとぞ、又同時島の千歲なるものあり、又男舞をなす、これ遊女なるべし、此の舞

專ら行はれしが、其男裝餘りに荒々しとて、鳥帽子と鞘卷とを廢し、水干ばかり用ひたり、之を稱して白拍子と云ふ、されば舞の名にも用ひ、又其謠ふ今樣をも白拍子と稱し、遂には專ら此の歌舞をなせる遊女の一類を白拍子と稱せり、彼等は鼓、銅拍子打たせ其曲節に合せて舞ひしなり、夫の祇王、佛の聲を始め、靜、龜菊に至るまで皆此の類にして同く遊女の一類なれば、姿色を賣には固よりなれども、こは歌舞の藝を主とせしに似たり、されば後世の藝奴にも比すべきか、始めは諸國より京師に來りて白拍子となりしが、鎌倉幕府の開かれしよりは、此の地にも白拍子あり、又諸國にも居りしならん、妙音院相國師長白拍子の舞を評して云へる樣「其曲をきけば五音の中にはこれ商の音也、此音は亡國の音也、舞の姿をみれば、たちまはりてそらをあふぎてたてり、その姿甚だ物思ふ姿なり、詠曲舞體ともに不快の舞なり」とされば所謂鄭衛の聲に類せしが如し。

（つゞく）

松平夫人比佐子の貞操

大林善方

世はかり菰と亂れたる德川氏の末世に方りてや、列藩諸侯おほくは三百年來の太平に馴れて、文弱の弊に陷ゐりしかば、風聲鶴唳にも、夢を驚かし、魂を消せし者少からざりき。一藩に君臨する侯伯すら斯の如き有樣なれば、況てその夫人、侍女等は花顏柳腰にも得堪へぬ許りにて、物の用に立つべくもあらざりしもの多かりしかど、なほ古封建時代の餘勇を承け繼ぎて、節操凛烈殆んと冒すべからず。謂ゆる強弩の末、魯縞を穿つともい

きなきにはあらざりき。石州濱田の城主、松平聰の夫人比佐子の如きは、則ちその人にして、貞操洵に節婦にも恥ぢずといふべし。

夫人は下總佐倉の城主堀田正睦の三女にして、天質敏慧にして、書を讀み、歌を善くし、幼きより淑徳の譽れ高かりしが、出でゝ松平氏に嫁するに及び、その家先代より久しく奢侈に流れて、財政甚だ困迫の際なりしかば、夫人常に綿衣を纏ひ、假りにも絹綢を着けずして、質素を以て、庶民を率ゐしかば、數年の後には、府庫やうやく充實して、闔藩初て生色を呈せりといふ。慶應元年夫人一男を擧げ、之を熊若丸と名づけ、寵愛淺からざりしが、翌二年六月長州征伐の事起りて、先鋒總督紀伊中納言幕府の命を奉じて、老職安藤飛彈守を監察となし、鳥取、津山、松江等諸藩の兵を指揮して、石州口より長州に進擊せしめしに、長州の兵之を境外に逆へ擊ちて、連戰みな勝を獲しかば、勢に乘じて直に濱田城に迫り、一擧にして之を拔かんとせり。此時城主武聰病蓐にありて、事を見ること能はざりしかば、家中の武士等城の守るべからざるを察し、夫人に勸め、熊若丸と共に、難を松江に避けしめむことを謀れり。之より先き夫人豫め事體の迫れるを見て、侍女等に諭して云へらく、長軍わが城下に迫りて、城遂に危うからむには、吾夫は此城の御主にておはしませば、國と共に存亡せらるべきは勿論なるべし。妾もまた婦女にはあれど、爭でか後れ奉るべき。生死を共にせんことをこそ望むなれ。されど熊若丸は幼年の身の上なれば、倶に亡びんは洵に不便の至りなり。いかにもして、老女等抱き守りて、出雲の國まで落行きなば、松江の姫君は、佐倉の藩主なる君弟に嫁し給ふべき御約束もあれば、決

して疎畧にはし給ふまじ。我身に從ふべきものは一兩輩の志あらんものにて事足るべければ、其餘の輩はみな身を全うして、熊若が供せよと泣々語られき。かくて七月十七日の朝に至り、家老尾關長門といふもの、あはたゞしく殿中に馳せ來り、夫人に謁して申すべき事の候ふといふ。夫人面色自若として如何なる事にやと問はる。尾關答へて、長州勢いよ〳〵城に迫りぬるに、殿には御病氣重らせ給へば、戰に臨ませ給ふべくもあらず。依りて已むを得ず、御城を開かせ給ふべければ、御前にも御用意ありて、一時も早く城を打立たせ給ふべしと申しけり。夫人聞きあへず、そは汝等の僞りなるべし。城亡びなんに、爭でさる卑怯なることのあるべきか。かくあるべしとは、豫ても覺悟せしところなるに、何の面目ありて、今更ら城を逃れ出づべきぞ。わが身のことに拘はらず、汝等迅く防戰の用意せよとて、打立たんともせられざりしかば、長門復び口を開かん樣もなく、悄然として退出せり。かくて夫人は少しも驚き騒がず、後の事など細々と文に認めて、心靜かに用意しける程に、夕刻に至り、長門又た走り參じて、敵軍いよ〳〵盛んにして防ぎ止むべきにあらざれば、殿にも思ひ切らせ給ひて、一先づ城を開かせ給ふべき旨仰せ出でられぬ。されど夫人と共に立退き給はんは、世に對し憚りなきにあらねば、夫人のみ先きに御出城あるべしとの御事なり。早とくとく立退せ給へと勸めけれども、夫人は容易に動く景色なく、城落ちて後、生きながらえて何にかせん。斯くいふは、欺きて落さんとの汝等の謀ならめとて、立退かるべしとも見へざれば、長門大に憂ひて、今は早や御城に火をかけて候ぞや、御側の女中達、早く御供申すべしと促がせしかば、

女中等みな〳〵集りて、夫人の手を取り、腰を押して、熊若丸とも〴〵やうやくの事に城を逃れ出で、海邊に至りて、一艘の小船に乘せしめぬ。此時從ひ行きしもの老女瀧野といふもの、及び乳母一人、奧附の老ひたる侍一人のみにて、はか〴〵しきものとては、一人もなかりしに、日は早や暮れて、行先きの程も見へ分けず。心細さと言はん方なかりしかど、夫人少しも沮喪の色なく、たゞ城守の成行如何をのみ氣遣はれて、如何に〳〵と問ひて止まざりき。夜方に明け放れんとする頃、一艘の小舟來りて追ひ付きぬ。これ城守武聰の侍臣一兩輩を隨へて、來れるなりければ、夫人始めて心を安んじけれども、かゝる小舟にて出雲の國に至るべきにあらざれば、一同如何にせんと憂ひける程に、折りしも大船の沖合より顯はるゝを見しかば、手を揚げて、指まねき、其船に乘り、辛うして雲州に到着しぬ。その言行の雄々しきこと、男子と雖も三舍を避くべきにあらずや。夫人の如きは洵に維新の際に於ける類ひ稀なる烈婦といふべきなり。

夫人に隨ひて、共に辛苦を甞めたる老女瀧野の或人に寄せたる手簡は當時の狀況を寫して恰も見るが如くなれば、追て揭記して、夫人の節操と、當時の形勢とを、讀者諸孃に紹介せん。





學藝

通俗土佐日記（第十三回）

北海道廳師範學校教諭　兒玉彌三郎

斯く言ひつゝ行くに、舟君なる人、波を見て、國より始めて、海賊報いせむといふなることを思ふが上に、海の又恐ろしければ、頭も皆白けぬ、七十、八十は海に有る物なりけり、

我が髪の雪と磯邊の白波と孰れ勝れり沖つ島守、

と揖取言へり、

○舟君なる人　とは紀氏を指せるなり、

○波を見て　は國より始めてに續くにあらず、頭も皆白けぬに續くにて、國より以下恐らしければまでは挿入文あり、而して此の詞を斯く首に置きたるは、海賊のことを主にいふにあらずして、歌にも白髪を主として讀めるが如く、專ら年老いたるを歎くことを主としたるが爲めなり、

○國より始めて　とは土佐に居りし時より聞きたる山をいふなり、今此處にて海賊のことを言ひ出したれど、其の實、聞きたるは土佐よりの事なるを始めてといふなり、

○海賊　のこと、三代實錄貞觀四年五月の條、同九年十一月の條及び同十一年七月の條、並び

に續世繼物語巻九かしこき道々の條、源氏物語玉髪巻等に出でたる如く、當時内海南海に多かりしものと見ゆ、賊のことを白波ともいへば、土佐に在りし時より聞き知り居たりし海賊のことを今此の波を見て聯想したるなるべし、紀氏たるもの、海賊を恐るべき筈なし、然るを斯く言ひ甲斐なく恐るゝは臆病の人かなと、女記者の蔑視せる體に書き爲して、全く紀氏ならぬ樣に思はせんが爲めなり、

○報いせむ　とは紀氏土佐國守たりし間に、海賊を追討せしことなどもありて、其れに報いせんとて來るといふなるべし、

○といふなることを　とは嘗て聞きたる風説のことなり、

○思ふが上に　とは此の一事のみにてすらの意なり、

學藝

○七十八十は云々　當時紀氏は五十歳餘なれば、是れも紀氏にあらざる樣に書き爲せるなり、扨て此の文意は、人の七十、八十といふ高齢は海上にあるものとは思ひも寄らざりしに斯かることも有るものかなと、女記者の幼なげに思ひたる樣に書けるなり、

○我が髪の雪　は無論白髪のことなり、

○孰れ勝れり　とは其の白さ孰れか勝れりやとの心なり、孰れといふ疑問の係詞あるが故に勝れると結ぶべき語勢なれど、此の方が勝りてありといふことを知らんとする心なるが故にりとせるなり、我や何なり、何に似たりなどの類其例多し、

○沖つ島守　と呼び掛けて、之れに其の判定を求めたるは、舟中の人誰にても之れを判せよといふべきを、態と外らしたるなり、

○一首、白髪の多きを示さんとしたるにて、上來の詞に依り、海賊の恐れより白髪と爲りたるが如く見ゆれど、所詮土佐の任の憤りに加へて愛女を亡ひたる悲みの餘り、形體までも衰へたるを思はせんが爲めなり、

○と揖取言へ　とは此の判定を沖つ島守に求むることを揖取傳へよといふ心なり、

廿二日、昨夜の泊りより異泊りを追ひて行く、

○昨夜の泊り　とのみありて、何といふ泊りとも書かざりしは名もなき處なればなるべし、異泊りは行く先きの泊りをいふ、是れ亦、名の知れざる故なるべし、凡そ土佐の海の中は、泊りは勿論、羽根、御崎の類まで地名を委しく記したるを、此の邊りは阿波の海にて、泊りの名だに知られざる故斯く書けるなるべし、此の間に、例の難處なる御崎をも過ぎたるものと思はる、

遙かに山見ゆ、九年つばかりなる男童、年よりは幼なくぞある、此の童、舟を漕ぐまに〳〵山も行くと見ゆるを見て、怪しきこと、歌をぞ讀める、其の歌、

漕ぎて行く舟にて見れば足引の山さへ行くを松は知らずや、

幼なき童の言にては似つかはし

○遙かに山見ゆ　とあるにて、是れまでは山も見えざりしてと思ふべし、是れ紀伊國の山なるべし、

○年九つばかりなる云々　童といへども九歳十歳に及べば、多少物の辨別もあるべきに、舟と共に山も行くと見たる幼なさをいはんとて、斯く年齡を書けるなり、

○怪しきことと歌をぞ讀める　の怪しきことの一句は挿入文にて、怪しきことには歌をぞ讀めるといふ心に見るべし、

○足引の山さへ行くを云々　あしびきは山の枕詞にして、あ繫木の轉じたるなり、山さへ舟に從ひて行くに、其の山に立つる松は山の行くとも知らずやと、覺束なく思へる心を讀めるなり、

○此の歌も、紀氏の感慨を漏らして讀みしものなるべし、

例を卑近なる事に求めば、かの、口車に乘せられて己れは其の乘れることを知らざるが如く、松も山と共に行きながら、自らは行くとも知らぬをいへるにて、廟堂に立てる人、時に便變の徒に瞞着せらるゝ如きを憤慨せるならん、

○似つかはしとは年相應の出來といふ意なれど、實は褒めたるなり、斯く年を記し作を評せるなど、例の紀氏の歌ならざる樣思はしめんが爲めなり、

今日、海荒らげにて、磯に雪降り、波の花咲けり、或る人の讀める、

波とのみ一方に聞けど色見れば雪と花とに紛ひけるかな、

○荒らげにて　とは甚だ荒るゝにはあらざるをいふ、少し風吹けば、磯にては波騷ぐものなり、故に磯を見て海の荒らげなるを知りし程なり、沖には、さまで波立たぬを知るべし、

○磯に雪降り云々　雪も花も共に磯を打つ波の白きをいふなり、

○波とのみ云々　耳に聞く上にていふにて、三、四、五の句は目にて見る方をいふなり、のみといふ詞は波にかけていふにはあらで、聞くこと

にかけていふなり、即ち耳に聞く所にては波より外は聞えぬ由をいふなり、

○紛ひけるかな　のまがふは、目眩ふの義なれば、何にても目に確かと見定められず、ちらちらするをいふなり、

○一首、見ると聞くとは違へることあるを讀めるにて、人にも風聞に聞きたるには違ひて、善しと思へる人の善からぬことなどあるを慨けるなるべし、是れ亦、外見外聞を飾りて時めける人も、實際は其れ程にもなきを、明白に言はば廟堂舉用の濫りなるを誹りたる如きを以て、斯く、波のことに讀み爲したるなり、

○此の段、二首の歌共に、世の不當の舉用、分外の榮達あるを歎きたるにて、前には童の山も行くといひし幼言に託し、後には波に託したり、着想の自在なることと思ふべし、

廿三日、日照りて、曇りぬ、

○是は、徒らに晴曇のみをいへるにはあらで、照りし日の又曇れるは、風の速きをいへるにて、海の荒るゝを思はせたるなり、廿四日、廿五日も、尚ほ此の同じ處に舟を止めたるにて知るべし、

此の邊、海賊、恐れありといへば、神佛を祈る、

○此の、舟を止めたる邊は名もなき泊りなれば、人家も少なく泊舟も稀なるべければ、特に海賊の人を劫かすに便利なりしなるべし、

○といへば　とは從者若しくは舟子等のいへるなるべし、

○神佛を祈る　とは態と女々しく書けるなり、

廿四日、昨日の同じ處なり、

○今日、風荒しとも波高しともいはで、唯斯く

書きたるは、殊更にいふに及ばざればなり、

廿五日、楫取等の、北風悪しといへば、舟出ださず、

○今日は空も好く海も少しは凪ぎし方なれば、楫取に舟出せと命じたるに、楫取等の答へたるものと見るべし、命じたる方は省きたるなり、

海賊追ひ來といふこと、絶えず聞ゆ、

○絶えず聞ゆ　是れ女の聞きたるに書き爲せるなり、

○此の段、舟の復た數日滯泊せるさへあるに、海賊の追ひ來るといふことまで、絶えず聞えて、詫しき限りなるを思はせたるなり、海賊のことへ前段にも緒言にも言へる如く女の所記としたる故に、斯く女々しく書き爲して、只管、任の歎きといへる正體を現はさゞらんが爲めなり、

和歌評釋　小倉の色紙（つゞき）

神田中學校講師　中川愛氷

貞信公

諱は忠平、藤原基經の第四子也、寛平年中正五位下に叙せられ、左大臣に轉じ、同八年攝政となり、承平六年太政大臣に拜せられ、天慶二年准三宮として輦車を許され、天暦三年齡七十にて薨ず、正一位を贈られ、追つて信濃公に封せられ、貞信公と謚を賜ふ、在世の時、兄時平仲平とゝもに袞職にありしかば、時人之を三平と謂ふ、

小倉山峰のもみぢ葉こゝろあらば
　いま一たびの御幸またなむ

○小倉山　山城國葛野郡にあり、紅葉を以て其名高し○峰のもみぢ葉もみぢ葉よと物いひかけ

たるこゝろばへなり○こゝろあらば　俗に「おもひやり」といふものにて、情があるならばといふ意○今一たびの「もう一度」といふ意○みゆきまたなむ　みゆきは天子には行幸、上皇には御幸と書く、同じく御他行のことを云ふ、なむは願の意を顯はす詞にて、何々してくれゝばよいといふ義、この歌、亭子院大井河に御幸ありて、行幸もありぬべき所なりと仰せ給ふに、事の由奏せむと申して」とあり、

○一首の意　この小倉山の紅葉よ、汝も人の如く思ひやりのあるものならば、今宇多上皇の御幸ありて、今上天皇にも行幸ありぬべき所との仰せなればやがて、今上天皇にも見におはしますべきほどに、今一度みゆきのあるを待奉つて、散らぬやうにせよとなり、

在原業平朝臣

中納言行平の弟にて、阿保親王の第五子、母は桓武天皇の皇女阿登内親王なり、天長三年兄行平と共に、姓を賜はりて人臣に列せられ、世に在五中將と曰ふ、容貌閑麗にして放縱拘はらず、善く和歌を作る、又書に巧にして、好んで時鳥を描く、貞觀年中左近衛權中將となり、元慶年中、藏人頭に補し、相模、美濃權守を兼ね、同四年五月年五十六にて卒す、六歌仙又三十六歌仙に列す、

ちはやふる神代もきかず立田川
　　からくれなゐに水くゝるとは

○ちはやぶる　逸速ぶるの約にして威光強き意神の枕詞なり○神代もきかず　神代にもこのためしを聞ぬ意、神代とは神武天皇御治世以前を云ふ○立田川　大和國平群郡に在り○からくれなゐに　世にめづらしき紅色になり、もとは

唐より渡りしものなれど、後には今の舶來といへる如く、唐衣、唐匣など丶、めづらしきものに唐を冠せる例多し〇水くゝるとは、水をくゝり染にすとなり、くゝり染とは、絹を糸もて處處をくゝり、いろ〳〵に染るなり、今のしぼり染におなじ、

この歌　古今集秋下に「二條の后の春宮のみやすどころと申しける時、御屏風に立田川にもみぢ流れたるかたをかけりけるを、題にてよめる」とあり、

〇一首の意、立田川を流れゆく水の、斯く紅のくゝり染になるといふ事は、奇異の事のみ多かりし神代にも、其例を聞かぬめづらしき事であるとなり、

大江千里

參議從三位大江音人の子なり、大江氏もと大枝と書きたりしを、父音人卿に至り大江と改められたり、父の業を續ぎて文學の聞え高く、殊に和歌をよくせり、天慶二年備中權大掾たり、延喜元年中務丞に任じ、同三年兵部大丞となる、中古三十六歌仙に列す、

月見ればちゞに物こそ悲しけれ
　我身ひとつの秋にはあらねど

〇月見れば、大空の月を見れば〇ちゞに物こそ、ちゞには「よそぢ」また「いそぢ」の如く、すなはち千箇にて、數多きことをいふ、いろ〳〵にといふに同じ、物は物事にて、こそは強めたる詞〇悲しけれ、悲しく感ずるとの意、けれはこその掛りを結ぶ詞なり〇我身ひとつの我一身だけの丶意〇秋にはあらねど、秋ではないけれどの意、この歌、古今集秋上に「是貞のみこの家の歌合のうた」とあり、

學藝

○一首の意　月を見れば心が千にもくだけて、我身ひとつに悲しみをとりあつめたる如く、物悲しう思はるゝが、これは世間一帶の秋にて、我身ひとりに限つた秋ではないとの意なり、

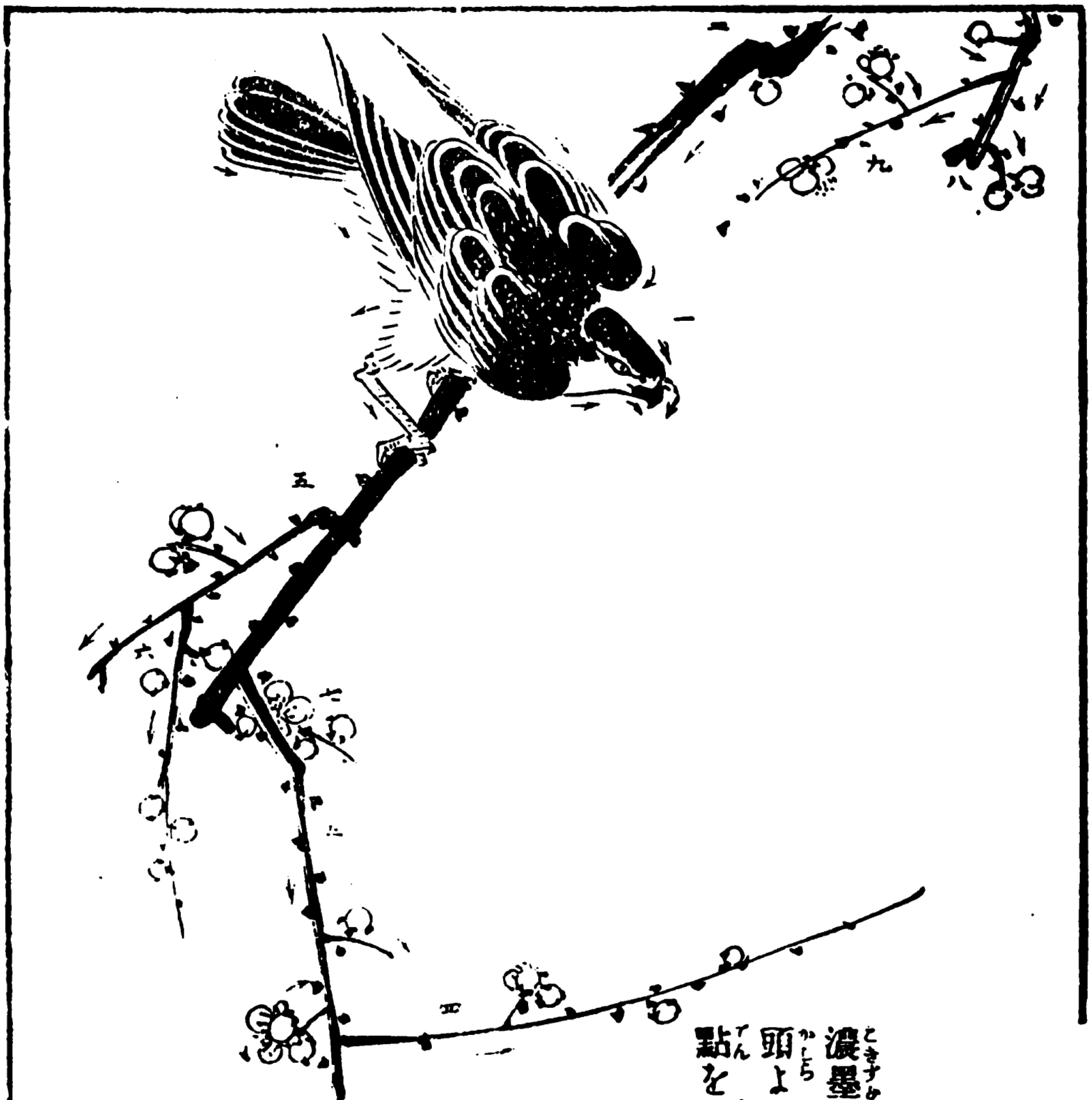
中納言家持

家持は姓を大伴といひ、大納言旅人の子也、孝謙天皇天平十七年從五位に叙せられ、寶龜十一年參議に任じ、光仁天皇天應元年從三位に叙せらる、越へて延暦元年氷上川繼の事に度して官を奪はれ京師に徙され、後寃解けて東宮太夫に任せらる、三年を經て中納言に拜せられ、其年薨去したり、しかるに薨去の後二十日いまだ葬儀も終らざるに、中納言種繼殺害の事より、また寃をうけて其名籍を削らる、家持和歌を善くし、萬葉二十卷を撰す、上は雄略天皇より下は廢帝に迨る、收むる所四百餘種、後世和歌を作るもの取りて模範となす、

鵲の渡せる橋におく霜の
　　しろきを見れば夜ぞ更にける

○かゝさぎの　鳥の名形鴉に似て小さく尾の長きもの○渡せる橋かさゝぎの架け　わたしたる橋なり、こは淮南子「烏鵲塡レ河成レ橋以渡二織女一」の故事をとりたる形容詞にして、更に禁中の事を天上にたとへる例により、こゝにかさゝぎの橋とあるは、禁中の御殿へ上る御階をいふなり○おく霜の　俗に霜のふるといふを歌にては、おくと云ふ○白きを見れば、眞白くなるのを見ればの意○夜ぞふけにける　夜が更けたわいといふ意味、ぞとけるのかゝり結び大に力あり、この歌、新古今集冬の部に「題しらず」とあり、

○一首の意　御殿の御階に、降おける霜のましろるを見ば、夜はゝやいたくふけたわいとなり、



和畫通信講義

山崎彩峨

濃墨にて、嘴より眼廓を畫き、淡墨にて、頭より漸々尾腹を畫き、更に濃墨にて斑點を打ち、靑色に墨を和したるものにて、嘴根を畫き、その端は足同しく黃色を塗布す。眼廓内は、赭墨にて細線を入れ、乾きて、黃色を塗り、濃墨にて、眼球を入るべし。木幹は、赭墨にて畫く。花は、紅白何れにてもよし。たゞ、鳥との比例に注意し小形なるべし。



家庭と動物（下）

獸醫學士　四走浪人

動物の趣味と云ふことに就き、今少しくお話を續けたいと思ひますが、餘まり長くなりますから簡短に申上ぐることに致します、前にも申しまするが如く、我國の庭園は兎角植物的に流れて居りますから、動物の趣味と云ふことに就ては、未だ多くの例がありませぬが、西洋などにては、家庭の遊戯に於て、朝夕動物を相手に種々の行樂を催ふして居ります、殊に安息日などの半日は殆ど其終日を動物相手に暮らすと云ふことは上流の家庭に於て、左まで珍らしきことではありませぬ、而して此の遊戯の方法には種々ありますが、何れも博物學的であります、一例を擧ぐれば動物の智惠の試驗の如き、動物速力試驗の如き、食物、躰重試驗の如き、訓錬の如き、即ち其一つであります。

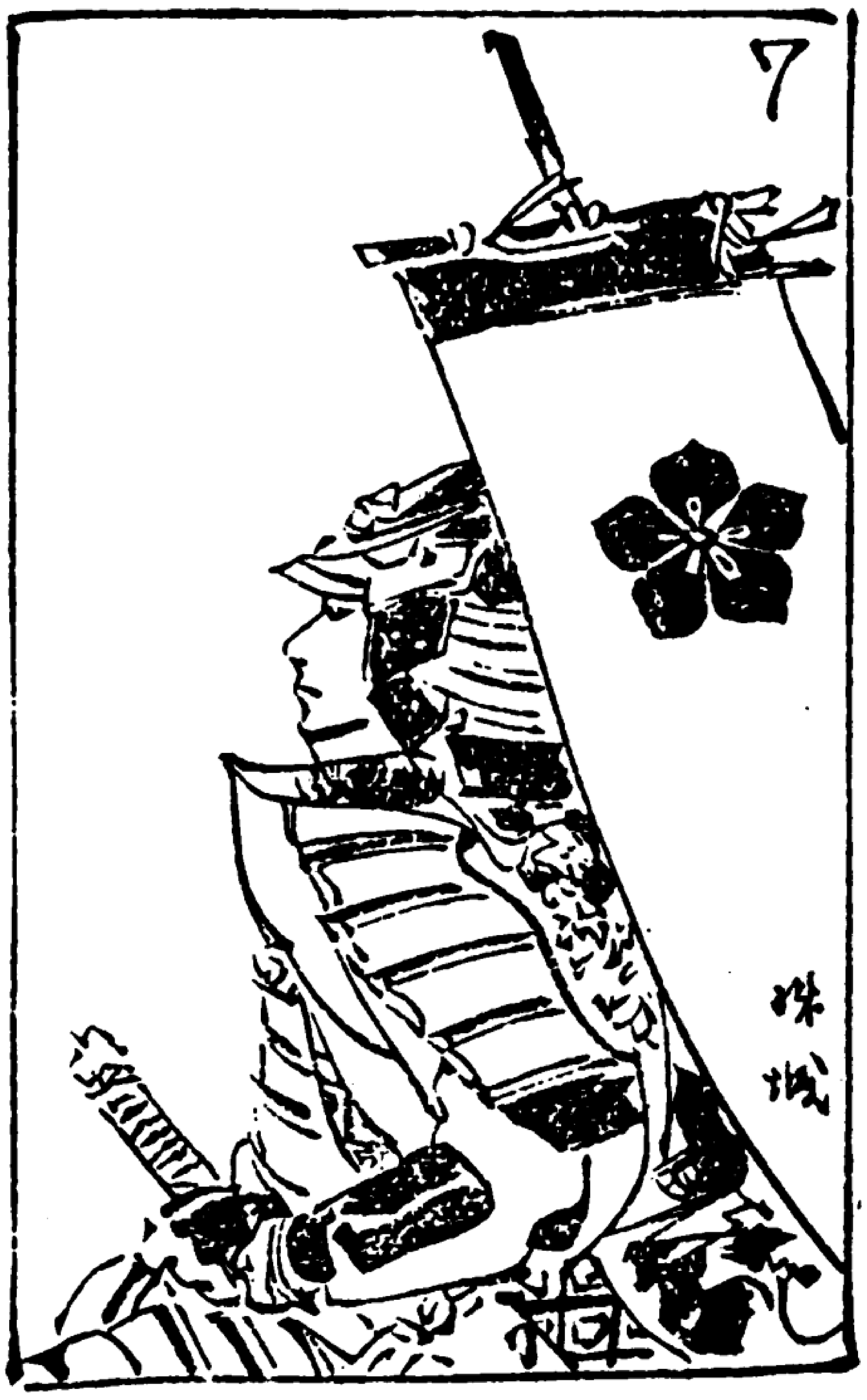
倫敦の或る家庭で、例の令孃達が一日犬の智惠を試み樣ではないかと云ふて、下庭に遊んで居ますエス（犬の名）を呼び手眞似もて二階に在る座布團（西洋に座布團のあると云ふのは少しく變であるが）を持ち來るべき旨を命じました、するとエスはトン／＼と二階に上ばり、炯眼を放つて四方を見廻はしましたが、更にアタリに座布團と云ふも

のが見當りませぬ……頓がて心附きたるは、一人の令孃が片隅に居り座布團の上にて、針仕事をして居ります、此の人の座はりて居る座布團を持ち來れとは、物を言はぬ動物にはチト苛酷の命令でありますから、流石に怜悧なる犬も暫らくは思案に暮れたと見へますが……間もなく彼れは、決心したる態にてツカ〳〵と其針仕事をして居る、令孃の傍らに進み寄り、取散らしたる一ツの布片を啣へて之をストーブの前に運ばんとした、すると令孃は周章てゝ座布團を離れて、其布片を取戻さんとしましたが、此の時遲く、彼の時早く犬は其令孃の離れたるを好機として、座布團を啣へてトン〳〵と二階を下り、最初命令を下したる令孃達の前に持ちて參りましたと云ふ話があります、斯樣なる試驗の例はナカ〳〵に趣味の多いものであります、殊に一方には思慮を費やし、一方には快樂を遣る家庭遊戯の最も妙なるものであります。

又た傳書鳩の事に就ても、多くの趣味があります、之は近時專ら伊太利に流行して居るもので、貴族の令孃達が、都を離れて旅行し、若くは遠き地に在る、母君の病狀を見舞ひたる時などに、其消息、容體を記して、家を出づる時に携へたる鳩の足に結び附けて、放すのであります、斯くて鳩は其儘飛び去り、遠く我家を指して歸る、左樣しますると其家人は鳩の足に結び附けたる書附（一書信）を取り放し此れにて其消息なり、將た病人の容體なりを知ると云ふのであります、鳩の速力は御承知の通り甚だ速かなものでありますから、百マイル乃至二百マイルの巨離に在る通信は僅かに三四時間內外に於て達することが出來ます、傳書鳩の事は軍事通信の進歩したる國々にては、既に軍人の試驗研究したるものが澤山ありますが、之

を家庭に應用し、學校と家庭との通信、家庭と行旅との通信に應用する例は殆んど我邦にては皆無

時はいま天が下知るさつきかな



でありますから、斯かる趣味の考案を試驗したる人がありませぬ、併しながら此の傳書鳩の使用は左まで六かしきものではありませぬから、少しく餘暇ある家庭にては道樂半分に之を硏究せらるゝも、又た一ッの趣味であらうかと存じて居ります、

伊太利の例に仍れば、傳書鳩の使用などは特に婦人の手に仍りて容易に行ひ得べきものにて、婦人の手に仍るもの又た頗ぶる良好の成蹟であると云ふとであります。

斯の如く其例を擧げますれば、面白き趣味は猶ほ足らずでありますが、餘り長くなりますから先づ此の邊にて止めに致します、而して吾々が家庭に動物の飼養を勸告する譯は、強ちに趣味の關係にはあらずして、他に又た幾多の必要と利益とを有して居ります、左りながら順序に於て、先づ趣味の一班を申上げたのであります、既に前にも申上げた通り、人類としては其何種の階級に在るを論せず、動物に接する感慨と、植物に接する觀念とは、全く別種の趣であります、隨て其性情に誘起せらるゝ處の感化力も日を同ふして語るべきではありませぬ、容色の優美は夫れ或は植物に多から

ん、然ども能く人の感情を刺劇し、能く人をして奮起皷動せしめ、或は悲み、或は嬉ぶが如き彼我人情の相愛は植物の力を以て容易に制裁すべきものではなからうと思はれます、斯樣の關係を助長する爲めに、家庭に動物を飼養する必要が生じて參りますのであります、殊に多くの子供衆を育てまする向には、必ず此の動物が必要であります、

御承知の通り兒童の性情は、甚だ淡白氣味でありますから、常に彼等は活動的に諳かれたる、千變萬化の遊戯を好みます、而かも之が嗜好の高進は、一ツは兒童の德性を涵養し、一ツは體軀を健康にすると云ふ利益があります、以上の外動物と家庭の關係に於て、更に一個の必要なるものは博愛慈仁と謂ふことであります。

御承知の通り、我れ〳〵が今日家畜と申しまする動物を詮索しますれば、何れも太古は野生のものでありまして、多くの年數と、多くの人工とに依り、漸くに馴致愛養せられました結果、遂に今日の如く人類の利用厚生上に偉大なる効用を及ぼす樣になつたのであります、牛馬犬猫を飼ふの大より、鷄鴨を養ふの微に至るまで我々人類が彼等



年増にはなべかぶらする祭かな

家庭

家庭

に及ばしたる恩惠と云ふものは、甚だ大なるものであります、猶ほ此の上、人類生活の需用に適當なる彼等の天禀と特性とを觀察して、善は益々善に、大は益々大に、誘導開發し、彼等をして愉快に且つ勇壯に、其生を致さしめ、聊かにても怯懦、頑癖の痕跡を存せしめざるに至らば、此に初めて我々人類の家畜に對する任務を終るのであります、又た之と同時に其動物に及ぼす人類の德は愈々以て發揮する譯になつて參ります、德の禽獸に及ぶと云ふことは、博愛慈仁の進歩にして、人類行爲の至善至美の極を申すのであります、故に予は此の行爲の伸張を常に慈愛を尊崇する、婦人の方面に望むのであります。

（完）

米國に於ける美しき家庭

井口アグリ女史談

◎家庭の模範　米國は豫てより女權論の本元であると聞き居たれば、其の家庭の狀況も日本とは違つて居ることであらうと想像しましたが、さて渡航して見ると日本と少差なきのみならず、夫婦親子の情誼圓滿にして家庭のうるはしさは、到底我邦などに見るを得ない位のものでした、尤も私が下宿せし家の主人が學校敎師であつたからでもあらうから、一般がみなさうであらうとは思はねど一臠を喰つて、全鼎の味を知るといふことは決して無道理なことではないと思ひます。

◎敎授の家　私が先づ最初下宿しましたのはノーサンプトンのスミス大學に入學せし時、同大學の敎授をして居た人の家で、この家は御夫婦に十四

と十になる娘さんと四つになる男の子と下女一人の家内にて妾の外二人の下宿人があり、生活は中流以下なれど其の家庭の睦じさは上流のものにても及ばぬほどと感嘆いたしました。

◎家事の分擔　其の奥さんといふは能く氣の注く御方にて、勝手元より家事萬端の事物皆悉く親ら手を下し仕舞を付けるのです、下女等は其の分擔の職務より外は、決して他に手出しすることなく木曜と日曜の晝後は下女の安息日で、朝は働けど午後よりは外出するとも何をするとも勝手自由、又家に居ても午前の外は働く樣子もない全く我が邦の下女とは趣を異にして居ります、されば其の日は十四になる娘さんが甲斐〳〵しく裝して阿母の手傳をして忠實に活潑に立働くのである。

◎母の威權　御夫婦間は矢張女は男の下に服從し決して威權を張るとはないが、子供には阿母の勢力阿父よりも強く、惡戯をしてしからるゝ時も、阿父御免なさいとは云はず、必ず、阿母に謝罪り、外出するにも悉く母に斷はつて行きます。

◎家内の規律　家内の規律正しきは感心の外はありません人手少なきことなれば、娘にも夫れ〳〵役目がチャンと極まり居り、學校より歸り來るとも、徒に遊ぶことはなく朝といへども起さずに、八時には屹度床を出で擧家團欒食卓を樂しく圍む、のであります。

◎少女の役目　十歳の娘も夜は四つになる弟を寢かす役目があるので、定刻の時間に及べば、如何に樂しき遊をして睡くない時でも、必ず二階の臥床に行き、弟の衣服を脱がせ、湯で身體を拭ひやり、寢衣に着替させ、小聲に唱歌など歌ひ居ると頃合を見て、母は上り來り、十分斗り神の話を聞かすのであります。此れぞ毎夜〳〵の定規にて、

此の憲法は一日たりとも緩がせにすることはありません



なしき筆とめ候かしく



お七ふりそでしほらしく

◎小供の躾　されば小供も時間を以つて寢食をして母の手數は少しもかゝらないから、日本の子供の如く、夜更しゝて母を困らせ、外出するときには泣付いて後追ひする等の心配はなく、自由自在に子供を置きなりにして用事を足すことも出來、外出することも出來るが、決して子供は跡追などはせず、夫れ〳〵樂しく嬉戲し居るは實に感心します、どうか主婦たるものは用事多端なれば小供の躾方に能く注意して貰ひ度きものであります。

◎小供の仕置　子供の躾は隨分厳しく放任主義の米國の家庭とは思はれざる程なるが、最も嘘をつく事を嚴しく叱りつけて、時には仕置に行ふので、其の仕置は部屋の外へ出し五六分間も室に入れざることゝ、寢室へ入れ置き半日もそ知らぬ顔にする位のやさ

しい方でありますが、其の納まりは、矢張下女等が仲に入りて詫言するので、過ありし時は、必ず母の前に、お詫をして許を得るのであります。

◎父子相信ず　其の次に下宿せしは中學校の校長の家で此の家庭の美しさには又々感心しました、二人の子息、總領は二十二で大學に通ひ、弟は十七で中學生であるが、其放任主義は甚だしく縱令夜一時二時に歸り來るとも、一言たりとも小言いふことなく、我が子は決して親の爲にならざる樣の行はせずと信じ切つて居るのである、又其の次男の孝心の深きには感嘆するより外はなく孝子の鑑であると思ひました、曾て他所に居し祖母の一週間計り遊に來りし時等は、斷えず傍に侍し、撫慰到らざるなく、其の中風氣味にて不自由なる身體をば毎日一度宛、乳母車の如きものに乘せ野外を散歩して其の憂鬱を慰さめ、心を養ふに勤めたのは如何にもやさしい心懸であると感服しました。

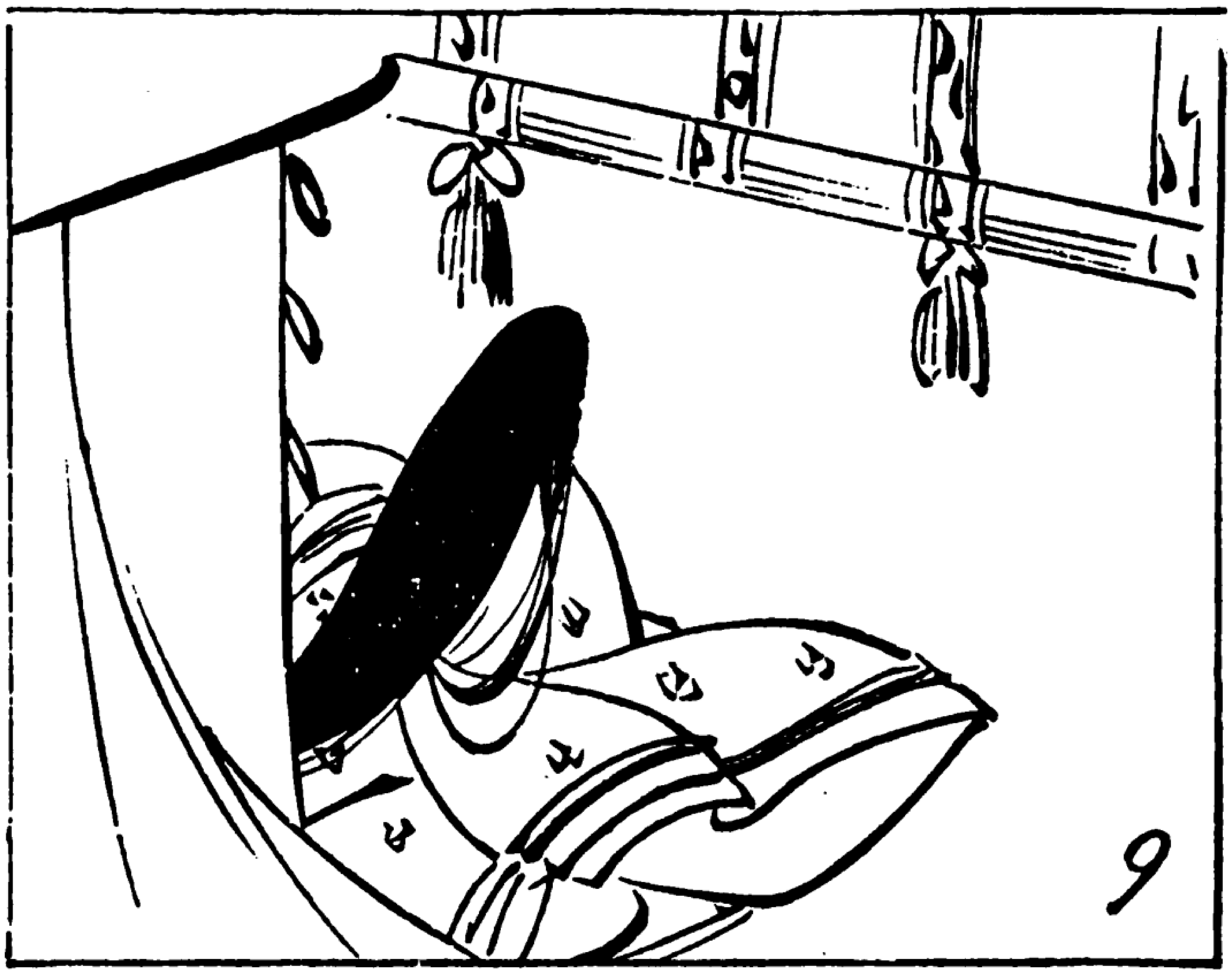
何方も好い家庭ばかり見たのですから、一概に米國の家庭は斯うだとは申されませんが、妾に取つては非常の幸福でありました。

行厨

岡野知十

西京にては櫻狩紅葉狩四季折々の野遊には各行厨の用意してゆく慣習今にすたれず。古瓢の尤物の西京に多く價貴きに反し、東京にては瓢を愛づるもの少し、一は文人の清玩、煎茶席飾等に用ゐらるゝよりとするも、一は行厨に副へて需用に供さるゝにあり。東京人の到るところ割烹店にのぼりて飲食をなすとそのこのみを異にす。

見し玉しだれの内ぞゆかしき



いづれが費用すくなかるべしと問ふはあまりに殺風景の事なり。行厨を用意すといふ事はたゞ安あがりに遊樂をなさんとする事ばかりにはあらず。行樂の飲食はたゞ空腹を充せば足るといふとにはあらざらん。まづいづれか趣味多きやを問ふべきなり。左なきだにこみ合がちの小割烹店の疊には酒に飯にちりこぼれ、布團は垢づき、食器はむさくるしき、殊に花時の雜沓して心落つかぬ間に食事をなす事の樂しき事あるなし。或はそは小割烹店へのぼればなり。もし大割烹店にてあらば、室清く、肴美に、雜沓の事なかるべしと。しかもこれ中以下に望みがたき事なり。殊に一家をこぞりての花見にさる奢侈は益なき事なり。これをのぞきて花見の清雅なる食事は各自行厨を用意し、花下の花棚等に坐してこれを開くよりよきはなかるべし。或は小割烹店につくよりもその用意煩はしきやも知らず、しかも花見の清賞はそれよりも多かるべきなり。行厨といふ事東京にても今よりはむかしの方よくゆきとゞきたるが如し。一例をあげても芝居茶屋にて作れる切飯の人の喜ぶところなりしに、今は切飯といふ事は殆どいづれの方面にも見ず、辨當は皆ちらしとなれり。切飯を火とりしはある方

から見れは麵麭の燒されしと趣味を同くす。その切めしの中に梅ぼしなど入れしは、サンドイッチと趣きと同ふす。趣味のうへよりすれば平生ちらしを食しつゝあるもの、偶の花見の辨當等に握を食すことの佳なるべきに今のこれを用ゐざるはあまりに輕便とのみにはしり、到るところの小割烹店に飲食するをよしとし、この趣味ある行厨を廢するに至りしならん、佳味といふよりも世話がなしとの點に出しならん。主婦がたゞ世話なしといふ事を主にして趣味を沒するとせば、むしろ花見その事もやめにするがさらに世話なき事なるべし、家庭の清樂は世話なしとばかりが眼目にあらず、野遊といふ事は英佛その他文明の國々にも盛に行はれ、これ等みな行厨を用ゐぬはなし。ちかごろ勸工場などにまで見ゆる籐にてつくりし、大方の角の籠あり、その何の用なるやを知るものはいかに外國人の行厨を用ゆるかを知るに足らん、この籠は『ピクニック、バスケット』とて野遊の辨當用なりとす、行厨をつくる事を知らぬ主婦は家庭の清福、家庭の健康、家庭の文雅を知らぬものとして差支へなかるべし。

時は春季の花見、汐干、摘草、いづれも戸外の興多き季節とす。左に手輕き行厨の献立をしるすべし。

獅子さまざまの曲ぞなびしき



花見の重詰

（日本食）

（一重）　卷燒玉

子、小板蒲鉾、慈姑キントン、（二重）比目魚
及ツケギ酢味噌合、花薑に防風を添ふ（三重）
孫芋、賽形燒豆腐、白魚、小椎茸、莢豌豆甘煮、
（四重）火取り切飯、香物奈良づけ瓜、澤庵、
これは赤堀氏の立案なるが、出來うれば當季のものゆへこれがよろしけれど、かく四重そろへる事むづかしとせば、火取切飯に香物のほかは取捨はいづれにしてもよろし。酢味噌あへ等の乾かぬものは野遊の箸にむづかしと思はゞ、テリ燒の如き一は指にてつまめるものにてもよろしからん。或は切飯にかへるに海苔卷を用ゐるなども便益なるべし。

（同洋食）

（一）ゆで玉子
（二）サンドイッチ
（三）燒鷄肉（ローストチッキン）
（四）鰯の罐づめ（サデン）
（五）果物
（六）菓子
（七）紅茶

これは外相邸庖廚主任宇野氏の立案なり、このかに飲用をよくすればシャンパン酒葡萄酒等を用ゐる普通にはウイスキー、平野水、紅茶を煮て瓶づめとす（もし山にて煎るならばアルコールランプ付の器具を携ふべし）
（一）茹玉子はそのまゝ、鹽、胡椒を用意す、（二）サンドイッチはハム又は冷肉とパンへはさみしもの、（三）燒鳥は丸やきにしたるもの、豫じめ切りてゆくも便なり、（四）サデンは罐のまゝ、（五）果物は何にてもありあはせたるもの、（六）菓子はシュ ーなどよろし、シユーの作り方は製菓法を說く時にゆづるべし。

これは宇野氏が西洋風にしたがひての立案なれどこれも一々かくせよとにあらず、便宜にてよろし、たゞこの案の紅茶を瓶づめにしてゆく事は面白き注意なり、余が信州より歸途汽車中にて偶々西洋人の一行と共になりしが、この一行が例の行厨籠を用意しつゝありて　われにもわかち與へられしのち、瓶より一椀の茶をわかたれしはチヨコレートの冷せしものなりき。用意よき事と思へり。花見には到るところ茶を賣あればいらぬ事なれど、もし上茶を欲せば茶を用意しゆきて、素湯をもらひ、自ら煎じなばよろしからん、世話の事といふなかれ、主婦のたしなみはこれ等のうへにもあらはれるものといふべし。

もし又赤堀氏と宇野氏との和洋を合併して一の行厨をつくるも面白かるべし。燒飯の上にサデンをのせてかぢるのも風味なかなか妙なるべし、あるひは別に支那料理に用ゐる小菜の如きものを加へるもよろしからん。

要するに行厨は濕ひあるものよりは乾きたるものを便利となす。

このピクニックバスケットを携へ、一家をあげて、二三驛ぐらゐの短距離の汽車にのり、菜花、麥浪、櫻花、桃花、春色の上下する芝生のあたり一日を消さんこといかに清樂の事ならん。

裁縫に就て

あや子

近年大に世人が女子教育に注目してくれるやうになりましたは、實に悦ばしき事であります、殊に此頃は、美術、工藝などをも大に奬勵致しまして諸所に其專門の學校などの設立を見るに至りました

は最女子適當の事とられしく思はれますが、現時ではまだ至てそれらも幼稚のやうに思はれます、然し追々と進歩する事でありませう、凡て教育と申者は、容易ならぬものであります、殊に女子の教育に至りましては、其衡に當るとあたらぬとに關せず、大に研究をこらしつゝある今日でありますから、漸々完全の域に至ることでもありませうが、現今では實に其研究時代であります。

日本では古來の習慣として貴賤の別なく、女子には裁縫といふ必脩の學科がありまして、殆ど女子の本職のやうになりて居ります、又實際日本の家庭では、着々必要を感じるものでありますから、人も大に此點には重を置きまして、小學時代より此科には多くの時間を費てあります、又此裁縫の專門學校といふものは非常に夥しきものでありまする、其いづれの學校も悉く滿員して月に日に校舍の増築を致しますが、猶其志望者を悉皆收容する事が出來ぬと申す有様であります、實にこれは結構なる事であります。

扨利害得失の相伴ふは數のまぬかれぬ處でありまして、此多數の生徒を僅々たる教員で教授するのでありますから到底個人的の授業は出來ませぬ、そこで種々教授法なども研究されました結果、現今では一室に三十人五十人乃至百人以上の生徒を集めまして、一人して之を教へる事が出來るやうになりました、小學校以上專門の學校に至るまで多少の差はありますが、つまり皆此法に隨て教授して居るのであります、それ故昔時ならば肩揚の落ちた補ひすら出來ぬ年齡の即ち十二三の少女でも早く一通りの裁方と縫道は心得て居ります、然しながら是が前申す通り個人的實物の教授でなく單に挿圖雛形などに依りまして習得したのであり

ますから、實際實物を手にしては大に勝手が違ひまして、さし當り困難するものであります、それ故裁縫學校の卒業者にして猶其縫裝の衣服は必ず仕立屋の手をまたねばならぬ、などの冷評を受る事がまゝあります。

然し女子は男子と異りまして學生時代が至て短き爲め、此限りもなき多くの學科を誠に此短日月に修めねばならぬので有ますから、實際むりなので其女子の罪のみではありませむ、學制にもよります、早婚の弊にもよるので、それらを考へず、只一概に女子のみを攻擊するのは、餘りに酷なのであります、そこで申迄もなき事で有ますが、若き嫁人達に注意を促したいのは、女子自の心掛が肝要であります、先づ學校を終りて後猶一二年も獨身で居る人は勿論の事假令婚嫁したる者と雖も、はや是れにて足れりとせず、それより先きの長日月が即ち學校内にて修めた理論を實地に演習し、學生時代の理想を實行する最も樂しき時代なのであります。

兎角人は若き時は自ら世の中の經驗に乏しき爲め、誰しも大きな考ばかりをする者であります、尤も抱負は大きくなければならぬものゝ、扨大なる事を考へますには、少細なる事まで意を用ひねばなりませぬ、高きを欲すれば必ず最下級より漸々登らんければならぬやうなもので、さもなき時は所謂、駄螺になりてしまいます、そこで學生時代には或は外交官の妻とならばかく〳〵、政治家ならば云々、軍人ならば何々と只世に時めく事ばかりを考へて、家庭の整調に付きては餘り深く考へて居りませぬ、故に裁縫などは人にさせてもすむ事、それよりは交際場裡に必要な事を修めねばといふ考の人が、妙齢の女子の内にはまゝ見受るもので

あります。

扨世の中と申すものは、中々少壯の理想通りには行かぬものでありまして、異りたる家庭に移り、嫁となり、主婦となり、母となるに及びますと、實に今更の感じが致します、これ迄くだらないと心ひそかに笑ひて居りました老人達の所爲が、とても擬似も出來ませぬ、つぎ一つ當てましても立派な眼は持ちながら、眼鏡ごしの怪しき手元に及びませず、張り物しても、積りものなどに至りましても到底敵手にはなれませぬ、そこで俄く困りますが、猶一際の研究をすれば、其時はじめて學校内の理論を活用する事が出來ますのでありますが、ともすれば其儘に放棄して仕舞ふ人がありますから、初めに申た如き惡評を受る事にもなるものでありまして、實に殘念な事であります。

是迄裁縫の事につきましては、大抵いづれの雜誌或は其種の書などにも千篇一律の裁ち方などの圖を示して説明してありますから、多くはそれらに讓り置きまして、玆に私は只從來の實物經驗上によりて心付きたる事を述べ、未定考のものは汎く尋ねて教へを受け、互に此誌上に於て敎習し合ひ、研究し合ひたいと思ふのであります。

書籍は吾人の最良教師にして、而して吾人に鞭韃を加へず、吾人を怒罵せず、吾人に金錢衣服を要せざるなり、試に書籍に接近して其容貌を窺へ其常に孜々として、疑問に答へんと準備しつゝあるを知らん、故に汝若し之に問はゞ、毫も隠蔽する所なかるべく、汝若し之を誤解するとも、毫も不平を唱ふることなかるべく、汝若し無識なりとも、毫も汝を笑ふことなかるべきなり

リチアヤード、デ、ビウリー

御注文の節は女紙廣告に據りたる旨御附記被下度候

第二回卒業生姓名幷當所の推擧に據り就職場所左の如し

東京市神田區裏猿樂町四番地
私立女子計算員養成所

本所教員に　淺野仙

印刷局に　榊原アキ

押田柳

皮膚病専門醫坂本李堂著

[illegible]

（再版）

一名美貌之秘訣

正價金四拾錢
郵稅金六錢

右ハ著者ガ多年ノ實驗ニ照シ何人ニテモ行ヒ得可キ美貌ノ秘訣ヲ詳說セル珍書ナレバ冀クハ本書ヲ繙ヒテ其容貌ヲ艶麗ナラシメン事ヲ

本書非常ノ好評ニテ夥シキ注文數ナレバ可成早々御注文被下度希候

發兌　東京京橋區弓町　松村三松堂


大日本圖按協會編輯
圖按
第拾貳號三月十日發行
每月壹回十日發行
定價壹册金貳拾錢
郵税壹册ニ付金壹錢
東京築地二ノ廿一
發行所 株式會社 國光社
電話新橋 特八八番 二六九三番



雜錄

當世一言芳談

幸田露伴

◎年老いたる媼の申しける、いづれの家にても慶び事ありたる當座ほど勤めよきはなし。まづ嫁君を新に迎へ玉へる當坐は、其嫁君の優しく美しく御心を持ちたまふ事は云ふまでもなく、聟君姑君も皆平素とは聊か心だしなみをも仕玉へばにや、鬼々しき叱などは、多く宣はで、たとへ何事かの過失仕出でたるをも、過失なれば深くは咎めじ、たゞ此後は能く心を付けよなどと、諭したまふに過ぎねば、遂には身にもおのずとたしなみの出で來て、拙き事は爲じものをと思ふなり。また初の姫君若君などの生れさせたまへる時は、その父君母君は申すにおよばず祖母君祖父君まで打擧りて悦び喜びたまへば、喜悅に御心の隈も無く晴れ渡りて、おのずと照る月の光り長閑く濟み徹るやうに、御胸の底より湧き出づる愛情の優しさの充ち滿つればにや、下々を見たまふ御眼差も慈悲深く、御言葉つきも角々しからずなりたまふなり。されどかゝる慶び事も無き打から、主人の君、商業の上の手違ひにて損耗など仕玉ふか、または嫁君の何事かにて姑君の御心を取り失ひなんど仕玉へるか、または姑君の何事かにて嫁君の上を惡

敷思ひなし居たまへる折節などは、下に使はるゝ身の心苦しさは兎角申すも愚なれど、人々の御眼の中も鋭く愛情無く、何事を問ひまゐらせてもはかぐ\しくは答へだに仕たまはず、些少の過失などあれば聲荒らげて、口ぎたなく愚物\/と罵り辱しめたまふ。されば、こなたも心歪み行きて、愚物なればこそ人に使はれて月日を送るなれ、我が賢くて卿等を使はぬこそ卿等の爲には幸福なるべけれ、と口には出さね腹の内には嘲笑ひて、叱言は臂に聞かせ、障子は足もて開くるやうにもなるなり。我等若し常に慶び事ある時の如き、優しき心を有てる主人を得ば、身を終るまで忠實に仕へて毫も恨なからん。

◎或る人相見の申しける。女の相は美しきより好きは無き道理なり。されど人相の道にては美しきを必ずしも芽出度しとはせず。その所以を如何にといふに、美しきに二タ通りあり、人の玩弄品となるに適するやうの美しさと、おのづから人の玩弄品となるには適せぬやうの美しさとあり。藝妓娼妓などには人の玩弄品となるに適する美しさを具へたるもの多し、また氏貴く位高き際の姫君などには、然ならぬ美しさを具へたまへるが多し。此の美しさの二タ通りを能く見おぼえ置きて、玩弄品となるに適するやうの美しさを具へたるものを幸福薄しと判じ知るべきなり。また一度は身を賤しき境に落したるものにても、力ある人に援け出されて遂に富貴を全うするものあり。それは必ず玩弄品となるに適せぬやうなる美しさを具へたるものなり。我が此の言中らずんば一切の相の道の書は燒き亡ぼすべきなり。

◎ある男甚だしく遊びあるくことを好みて、吾が家に寢る日は一月に幾度も無きほどに浮れ騷ぐを

常としければ、其妻心を苦め思を焦して抑へ止めんとしけれど更に其甲斐なくて痛く歎き悲めるを、其近隣に住める老媼の世故に熟れたるが、見兼ねて敎へけるやう、卿の夫の遊び行きたまふ樣子を聞きおよぶに、これといふ定まりたる女の許へ通ひたまふといふにもあらず、また名ある家にて遊びたまふといふにもあらねば、今の間に其の惡しき外出の癖を矯めでは、後に至りて心を留めたまふほどの女なんどを得たまひたらん時、如何ともする事叶はざるべし。先づ卿は煮炊の道に拙からぬやう心掛けたまふべし。次に家の中を美しく取り片付けて、床の間には價高きを厭はず美しき花など活け置きたまふべし。その次には卿日々に浴し、日々に髪を結ひて、磨り琢きを怠らず、光り輝くやうにしたまふべし。次には卿趣ある語を使ひならひたまふべし。すべて家の内樂しければ男は留めずして留まり、家の內樂しからねば留めても留まらぬものと知りたまふべし。世の中に夫に棄てられたりとて徒に歎き悲む人甚多し、其の人々は皆おのが爲す事だに正しくて道に叶ひさへすれば宜からんと思ふ心掛の過誤より夫の愛を失ふに至るものにて、正しくさへあらば宜からんと思ふはいと淺墓なる事なり、正しくて加之美しからんと心掛けでは夫の愛を失ふは當然の事のみ。男の女に求むるものは正しきことのみにはあらず、むしろ美しき事を求むるものなりと心得たまへ、と云ひければ、女その敎の如くにして試みけるに、果して男は外遊びを廢めけるとなり。

なれ〱てみしはなごりのはるぞとも
などしらかはのはなのしたかげ
藤原雅經

雜錄

櫻の話

橘村生

櫻は凡そ立春より七十日を以て花候とす、即ち本年四月十六日は開花の期あり、是れ本話のある所以。されど寒暖によりて遅速同じからざること勿論なり。

春風駘蕩、柳枝を吹き、遠霞靉靆、山腰に懸り、春光花彩、燦爛たるの日、南郊草みどりなる邊りにいで。

見渡せばやなぎ櫻をこきまぜで
都ぞはるのにしきなりけり

乃ち知る揺々たるの雲、曳々たるの雪、滿山滿地處として花ならざるは無し、櫻花國の大美觀は、我眼前に開かれましたから、白雲の中には蜂蝶飛び、緑草の上には昆虫遊ぶ、櫻樹の花の幔幕より我等親しく天然のふところに入り、自然の胸に立よつて、愛しかつ愛さるゝ者に成らうと思ひまして。

君が代は大宮人にあらぬ身も
さくらかざして春をくらさむ

此時子を持てる父母、弟妹をもてる兄姉、あるは學びの窓の教へ主など、こぼれむとする童女童男を率ひ携へ、野外に親しく理科を教へ、歌を唱ませ、かつ兒童が自然の發育に就て心掛られあば、觀るものもみせるものも、共に、高尚優美なる精神を養ひ、勇壯健全の身體を鍛錬するによき機會となりまする。

さま〳〵の花はあれとも日の本の
はるの光はさくらなりけり

櫻は佐久良、作樂につくる、此花咲耶姫（此花は木之花なり古事紀神代卷邇邇藝能命の條參照）は

櫻の神なるより、その、名をとりてさくらと云ふ説もあり、又さく(咲)うら(麗)の義ともいひ、夢見草(藏玉集)あだな草(古今集)かざし草、吉野草(夫木集)曙草(和品)などの異名を持て居まする。

(植物學の某)先生などは、櫻は日本特種の名花で外國には無いやうに書かれましたが、支那、朝鮮、滿州地方へ參りますと、八重こそ無けれ、我山櫻と同じきものがありまする。山櫻抱レ石映二松枝一(王荊公)。紅樹零落杏花開(司馬温公)などは、以て證左とするに足ると思ひますが、我日本の櫻の如く美麗なる花は他國になく、實に櫻は日本特種の名花でありまして、その内重立ちたる種類は、(一)彼岸



櫻、春の彼岸に咲く花は普通のものよりも小さく開花の節は葉未だ生ぜず(二)寒緋櫻。(大隅の大島邊にある緋櫻は支那邊のと同種だらう)花一重にして、紅し寒氣に堪へて開く(三)絲櫻、枝長し花は彼岸に似たり(四)にほひ櫻、花に芳香あるもの(五)あさぎ櫻、花青みを帶ぶ今云ふあさぎ櫻は淺黃の謂にして花黃色を含めり(六)樺櫻(七)しだり櫻(八)赤絲櫻(九)八重櫻(十)熊谷櫻、花は彼岸に似て小木なり重葉花皆上に向つて開く早咲きなるを以て一の谷魁けの意をもじりしもの(十一)うば櫻花は八重開花の時葉なき故姥櫻に齒なしの意。その外の種類を擧ぐれば、三百にも餘ります。然し彼岸、シダ

り、カンザクラの外は皆山櫻の變種です、彼の清洒なる梅は秀潔な處と芳香高きとを以て勝れて居れば、優美なる櫻は爛熳と高雅な處とを以て現はれて居りまするが、然し其花の構造に至りますと、二者同一原型で、萼は五片より成り、下部結合し、五花瓣と多雄蕊とは、萼の中途に着生して居りまして、雄蕊の葯には黄色の花粉を包み雌蕊は一本眞中に出て居りまする、梅の節義を重んじ、櫻の廉恥を尙ぶところ、邦人の性格を相代表して、櫻では。

敷島の大和こゝろを人とはゞ
　朝日にゝほふ山ざくら花

の男性となり梅ではまア

玉だれの誰か手折りてかさすらむ
　花もおくある庭のうめが枝

の女性となつて居りまする、即ち日本武士道は、邦人が櫻花に對する權化でありまして、女德には梅花に對する婦人の權化ゝ共に敬愛すべき處のもの、古來よりの櫻、梅に關する詩歌は、皆這般の說明を試みたものでありまして、彼の藤田東湖先生は。

天地正大氣。粹然鍾㆓神州㆒。
發爲㆓萬朶櫻㆒。衆芳難㆓共儔㆒。

と申されました、夫から。

櫻は活ける歷史家の如く、吾等の思想に語るものがある、譬へば落花の中に佇立した時は。

吹く風をなこその關とおもへとも
　路もせにちるやまさくら花

の一邊將が風神を思ひ。

小波や志賀の都はあれにしを
　むかしながらの山さくらかな

の歌を唱した時は、一門西海の波に漂ふ沒落の途

上より、遠く舊都の夢を驚かし、馬上ながらに秀
吟を致したる、平忠度卿が高情を偲ばれるので。

久方のひさかりのどけき春の日に
しづこゝろなく花のちるらむ

を讀みましては、一片天地の微機得て説くべからず。偉大なる花の勢力が人類を感化することは。

花より明くる三吉野の、
春のあけぼの見渡せば、
もろこし人もこま人も、
やまと心になりぬべし。

櫻が吾等の眼に見える自然の風致を現はした時、曙色に映じては。

名もしるし峰のあらしもゆきとふる
山さくら戸のあけぼのゝそら



となり、夕暉の前に立ちては。

夕風のすだれうごかすひまとめて
乙女が袖にちるさくらかな

水に臨んでは。

風吹けば雪の白波岩越て
わたりわづらふ山川の水

落花にさへ。

またや見むかた野のみのゝ
櫻がり花のゆきちる春のあ
けぼの

と歌ひましたやうに、如何なる村家の籬落、山間の空谷に咲きましても、夫れ夫れ特殊の風致を以て居りまするから、忽ち人の目に觸れて、美はしき錦みるがのうたとなるので御座います。

雜録

花の優美なのは八重咲を以て最とす、(八重は葉の變化せるもの)皇室に於せらる、觀櫻の御宴には八重をこそめでさせ給ふなれ。

櫻の名所は何處。大和の吉野山、日本無雙の名所で、又歷史上著名の古蹟吉野櫻は簇生したる大花。隅田川の堤は、享保二年徳川吉宗公が植えしめられし處、飛鳥山。小金井は元文年間和州吉野山、常州櫻川の種を植ゆ、其他北海道、本州、九州、四國等凡そ名所のない處はない、尤も是等は皆自生の山櫻などで。

又西洋にも同じ櫻はありますけれど、そは重に果櫻で、實を食用するが爲め尙とばれ、日本の如く花の美くしいのを賞するのではありません、實と云へば、櫻の實は梅の果の構造と等しく、核ありて種子を保護し、幼時には梅同樣の青酸を含むで居りまする、多年生の高き莖(幹)の材は、印材にもなり、薪にもなり、盆にもなり、椀にもなり定木にもなり、横班のある樹皮は、印籠を作り、曲物を綴るに用ゐ、北海道の土人は、船板を綴り弓を飾り、刀の鞘、矢筒等に作り用ゐます。葉は又嫩芽の中に色特に紅く、光澤があつて濕潤、中節に於て折れ兩半相啣合して居ります。而して此嫩葉の光澤あるのは、盛に生活作用を營むが爲めでして、充分發育した葉は、緣邊に鋸歯を有する楕圓形で、これを鹽漬にして櫻餅の包と致します葉身の葉柄に接する處には、小球があつて香ある蜜を分泌するので蟻は此の蜜を舐める爲め其間を往來致します、これ葉に毛虫の付くのを豫防する仕掛でして、此は櫻の一特點です。花は又湯に浮べて飲料と致します。

此優美高尚な櫻の花を愛され、芳名を千載の後にとゞめましたのは、櫻町中納言成範卿のことで御

座います、卿は少納言通憲といふ人の子で、安元二年權中納言民部卿をかねて正二位に進まれましたが、性來櫻花を殊の外觀賞され、吉野山の櫻を移して樋口町の莊に環植されたので、人呼びて櫻町と申しける、成範卿は花の散るのを惜まれ、神に花の壽命を延さんことを禱りました、(泰山府君の祭也)花爲めに萎まざること三七日の長きに及びましたので、帝其風流を愛し、書を賜ひて櫻町中納言と仰せられたと申します、猶古事をたずぬると、左近櫻は紫宸殿の巽角にあり、初め桓武天皇遷都の時植えられ後枯死したので、仁明帝改植された吉野山の櫻です。奈良ノ都の八重櫻は南圓堂の前にありましたもの。櫻田は稻の一本生せぬものにちなみ深山櫻の多くある處の稱なり。櫻戸、杉戸、松戸などの如く櫻にて作りし戸、櫻狩、花をたづぬると、茸狩、紅葉狩などに同じ。

湘烟日記を讀む

青眼

春宵寂寞人の訪ふなし。獨り机上の櫻花に對して、湘烟日記を讀む。忽ち見る朦朧たる形影の烟の如く來りて、吾が傍に坐するが如くなるを。アヽ是れ花か、人なるか、見來れば此人と此花の、何ぞ相似たることの酷だしきや。

吾れ湘烟女史と些の因緣あるなし。若しこれありとすれば、嘗て浪華に書生たりし時、女史の名を聞きて、思慕の情禁ずる能はざりしと、某知人の紹介に由りて、一たび女史をその旅寓に訪ひて遇ふを得ざりしことゝ、又た京都に遊べる時、女史の友人なる加古某の妻君より、女史の詩歌筆跡を示されて感嘆せしととあるのみ。而も女史が高ふして且つ潔かりし心靈の、言となり、行となり詩となり、歌となり、文となりて、世に表はれしものゝ、長く吾が心頭に印せられて、忘るべからざるものありしなり。

湘烟女史とは誰ぞ、姓は中島、名は俊子、故中島男爵信行氏の夫人にて、嘗てその前半生に於て、楚々たる可憐の容姿を以て、關西の演説壇上に立ち、自由主義の皷吹者として、民權論の熱心家として、侃々の舌、謇々の言、意氣遙に男子を凌ぎたる一個の女丈夫岸田とし子は則ち是れなり。

品性高く優れて、適れ當世婦女の模範たるべき好令夫人として見るも、女史や確に感賞の價値ありしと雖も、吾れをして尚一層の感嘆を催ふさしむるは女史が嫁して人の妻とならざる前の凜乎たる言動と、その夫に後れ、大磯の海邊に寡居して病を養ひたる後確たる氣骨の凡俗に超脫せるにあるなり。而も不幸にして前半は唯だ世の噂によりて聞くに止まりて、今や之を詳知する能はずと雖も、その晩年は女史手筆の日記によりて覗ひ知るを得るは甚だ喜ぶべし。育成會發行するところの湘烟日記は則ち是れにして、女史が病中手筆の日記を刊行したるものなり。

女史の臨終は、一昨三十四年五月二十五日の午後一時過る頃なりき。此日「醫師は時々注射を施し又數滴の「ブランデー」を進めしに頭を打振りて「ブランデー」は醉ふゆゑに用ゐず、注射も早ややめ給はれ、最早十二時になりしなど語りて少しも亂るゝ事なく、やがて侍女に命じ墨を磨らしめ、式紙と短册とを把りて

ぼたん見て芍藥を見てわれ逝矣

立かけに賜はる母のむすびかな

蔵入に鳥渡そこまでひとりたび

と認めて、「サーもうよからう」とて、母堂たか子の手を握りて「ながく有難う、おまへを遺して逝くのは、濟まないが、左様なら」といひ、又信行男の嫡子久爲吉氏の手を握りて別を告げ、其他の醫師侍女に至るまで、一々別れの辭を述べ了りて微笑を洩らしつ、其日の午後一時十五分に永き眠に就きたり」といふ。その死生の間に逍遙して惑はざるの概、見るが如くなるにあらずや。蓋し平生深く養ふところの信念ありて、死生存亡の際と雖も、其心を動かすに足らざりしに由るか。古人云ふ死生は人の大節なりと女史の如きは洵に大節に臨みて、從容自得、毫も亂れざるものといふべし。

病中日誌は、女史が臨終の年なる三十四年三月十九日に始まりて臨終の五日前なる五月二十日を以て終る。その間の日子僅々六十餘日に過ぎずと雖も、品性の高くして、且つ素養の深かりしことは、優に此の日誌の中に含蓄されて、自ら文字の上に躍如たるを見るなり。今試みに其の一二を摘錄せんに。女史の母なる人より桃花の消息を聞きし日に、

玄關前の桃花朱唇を開けりとの消息母君の口より傳はる。一日幾回家人皆門を出で、門に入るも、誰ありてか花信を報ぜん。桃花一朶母君の眼に映ずる時は其同時に吾姿も母君の胸底に附着して昔しの如く散步し得らるゝわが子ならばと思ひ給ふなるべし。(三月二十日)

知人木村某の養子來りて、父の命なりとて、著書、詩集等の出版を促がされ、且つ何にても望みあらば遂し參らせんと言ひしとき、朝に於て夕のをすらおもはれぬわれ、爭で死後に念ひ至らんや唯如此事きゝしときは、其事の尤なると、其情のこまやかなるに、深く感ずるのみ。華山の日記同家にあるとて、見んとならば吾に一見を許すとの事、是非にと吾乞ふ。何にか外に注文は

といひ給ふか。否々もはや何もほしき品なしと斷言す。抹茶もですかと美唇開く、それはほしいな。其序に江戸幸などいへば、うなぎの御茶うけとは妙ですなと咲ふ。動もすれば、あからまんとする眼をそと拭ひて、又參りますと輕く辭儀して去る。黒ちり紋付のうしろすがた、吾れにも拭はせたり眼露一滴。(三月二十二日)

東風、上野墨田の花を吹くころ

松田といふ品(女中の名)の親族、遙に東京より佛前にとてもたらしくれし櫻花を支那瓶に挿みて、吾が枕を隔つ二三間の床の間に置きたる風情得もいはれず。櫻とても一樣にはいへず。この花殊に品位高く、黒き表裝寵したる居士の遺墨と相待て更に人をして顧ならしむるの趣あり。此一瓶に江戸の春を見るかと思へば、坐ろに昔し戀しく、舟を泛べて、墨堤の晴を賞せし事など獨り想ひ出したり。(三月三十一日)

けふはよき朔日にてありしと母君もよろこび給ふ。夜頻りに東京櫻花談あり。吾は默して只默吟せり。(四月一日)

あの時が別れなりけり江戸の春

枕をさゝへて前路を望めば、つみ草の人にやあらん、三々五々



と或は止り或は歩せり。蝶も同じくこの人々等と息ひ且つ舞ふ事ならん。春風によき衣吹かせて軟草の野邊を徜徉するは人生の快事、又これをながむる眼にもこれ程ゆつたりとうつくしきものはあらぬやうに感ぜらる。(同日)

この日和ありきて見たし春の野邊

東京の某新聞記者が、音づれし時

小話の後、寫眞を新聞にはのせませぬかといふ。さすれば此看板で十分じやと吾笑ふ。御近作をと又云ふ。近作ならまだ腹の中に出來たてといふのもある。御身の手帳にかきて進ぜん、これで、御容赦をと目を閉ぢぬ。無愛嬌な立腹まぐれに、なにかくかしれぬとおもひしが其翌日同新聞來る。眞の五六行、形体瘠瘦などの流調ならぬ文句をならべてありし。この筆にてはよくもあしくもかき能はぬならんと獨笑す。(四月十日)

女史初め寢衣に筒袖を用ひしが、今はひろ着にも用ゆるに至りしが、自ら其の風采を記して、

先づ髮は頭の頂上に黒き櫛にて卷き、白き襦袢に白縮ふらねるの下着、上に一樂織の筒袖に紫繻子、牡丹形の細き帯を前に

結び、鼠紋縮緬の袖なしを羽織るなり。健康ならば獨自の運動に門外を徜徉するも妨げなき風采と自ら信ずるも、侍女等は殆ど狂人の如く見ゆるなりといふに、吾れ姿見の鏡前に座して見るに少しもおかしからぬのみか、むしろ吾には適する如く映せり。（同十七日）

京都の親族より河鹿をもらいしに、その河鹿夜深うして啼き出せるときの情趣を記して、

夜深く人定て後、七八跨弄牛眠牛醒の耳にいる甚だあしからじこのかじかに伴ふて來りし三四個の石、鴨川砂濟く瀬淺きの邊より得しものなりと聞く。是尊帝一般のものなれど、吾にはこの尊常一般のものより涼夜虫を賞る柳陰の畧より東山三十六峰霞をこむ春の曙、綠竹聲絕へて寒に凝る冬の月、阿翁と悲び、阿兄と遊びし紅梅紫亭のおもかげ等生じ來りて坐ろに今昔の感に堪へぬもおかし。（五月十八日）

美人の身投げせしものありと聞きて、

美人の投身は殆ど熟字の如く、未曾て醜婦の身なげなる語を聞かぬもおかし。されど多くは其美といふものが、死の因を爲すに似たれば、矢張美人にやあらん。醜婦なれば兎角天下太平なり。（同二十日）

氣品の超凡なる、識見の脫俗なる、態度の洒落なるは、一字一句の間にもあらはれて、その玲瓏たる容姿と、凜烈なる態度とを恰も眼前に見るが如き思あるなり。

漢詩は女史が尤も嗜みしところにして、其作往々見るべきものあり。而て女流詩人の僻なる纖巧綺麗のもの少なくして、却て勁拔眞摯なるものゝ多きは甚だ多とすべし、その客中偶成に

逢二此春天一未レ得レ歸。花香柳影漠依々。世間偶二飲才人殖一、交博嘆二眞知己稀一、事去レ易レ成身骨痩。唯堪レ對レ忍想思肥。寒宵立盡一輪月。無レ限鄕愁雪滿レ衣。

の如き、感愴筆端に迸りて、殆んど女人の詩とは思はれず。又た

月明人倚水昌樓。夜氣精靈寂似レ秋。杜宇啼初夢醒後。一聲々是一愁々。

愁緒百般亂若レ麻。意中人在水之涯。柴門永畫何曾闢。蝶宿風前雨後花。

前者は恬澹、後者は靜婉ともいひつべく、句々塞に吟誦するに堪へたり。又たその夫中島男寄する所の詩に和して

夢歸二江戶一夜多レ情。欲レ寄二相思一句不レ成。讀至二君孤衾冷句一。眼波愁滿不レ堪レ聲。

その即興に

朝上山河路八千。歸期屈指果何年。羈愁寥寂旅窓燭。短夢蕭條夜雨船。名遂功成應レ有レ日。離愁會見豈非レ天。妾心一片隨レ郎去。爲レ月爲レ花伴二獨眠一。

の如き情懷纏綿として誦すべきにあらずや。

讀み來り、叙し去りて、卷頭の寫影を覗れば、面貌髣髴生けるが如し。瞑目一番して、更に机に對へば、何事ぞ、櫻花一片飄りて

塵埃に落つ。アヽ此人此花何ぞ相似たるの酷だしきや。思ふ女史の前身は櫻花にして、其の後身も亦櫻花なるなからんや。今や櫻花正に開きて、滿城の士女みな狂せんとす。知らず、大磯大運寺境内苔滑なる墓石の下、女史夫れ如何の感をかなす。

雨の笠置山（一）

西京　松原隱士

笠置山に登る者誰か元弘の蒙塵に切齒して「さして往く」の御製に流涕せざる者あらむ、此山小なれど國民の忠義心を喚ひ起すに就ては實に大功あるなり、今茲三月某日予雨を侵して登山なし、行在の遺址を拜し、古戰塲を弔ひ、佛像石を禮し、元弘の往事を追懷して低徊顧望衣裳の雨に濕ふを忘るゝもの多時、笠置に抵りて雨に逢ふ、其地名よりするも興味殊に淺からず、歷史上の關係より觀れば感慨別に深きを覺えたり。

後醍醐天皇笠置潜幸前後の事太平記に據れば、元弘元年八月廿四日天皇には逆臣北條高時の難を避て藤原藤房同季房等數人を召具し、先づ南都へ入らせ給ひしかども與力する者なかりければ、同廿七日笠置の石室へ臨幸あり、本堂を皇居に充てらる。扨南木の御夢想あり、楠多門兵衞正成をぞ召されける。主上萬里小路藤房を以て、仰天下草創の事如何なる謀を廻してか勝事を一時に決して太平を四海に致さるべき、所存を殘さず申すべしと、勅定ありければ、正成畏りて奏する様

東夷近日の大逆只天の譴を招き候上は、衰亂の弊に乘りて天誅を致されんに、何の仔細か候ふべき。但天下草創の功は武略と知謀との二にて候。若勢を合せて戰はゞ、六十餘州の兵を集めて武藏相模の兩國に對すとも勝つことを得がたし。若し謀を以て爭はゞ、東夷の武力只利を摧き堅を破る內を出でず。是欺くに安くして怖るゝに足らざる所なり。合戰の習にて候へば一旦の勝負をば必ずしも御覽ぜらるべからず、正成一人未だ生きてありと聞召され候はゞ、聖運遂に開かるべしと思召され

雜錄

候へ、と、たのもしげに申して正成は河内へ歸りにけり

世人は概して正成を忠實謹厚の君子人と迷了すれど、此の勅答に依て察すれば、權略に富み詭道に達せる大英雄にて、殊に其抱負の大なるには一驚を喫せさるを得す、正成が當時の身代は凡そ二萬石程の者なりと云ふに、一旦天子の勅問を受くれば身を以て天下の重きに任し、正成一人生てあれば聖運遂に開かるべしと奉答す其抱負の大なる、其自信の厚き古今東西に比類少なかるべく、彼の天下を三分して其一を保つの策を立てたる諸葛孔明の如きは足元にも及ぶ所にあらす、而も其抱負を事實の上に顯はし、遂に中興の大業を成就せし其實力は、當今好んで大言壯語する政治屋連の夢想し得る所にあらす、惟ふに此の笠置勅答は正成一生中第一得意の處にて、最も趣味ある畫題なるに世の畫工彼の悲慘極まる櫻井の決別のみを寫して、此を採らざるは何事ぞ。笠置山の大堂金碧燦爛たる處、藤房正成の兩忠臣、衣冠武裝して相對座し、一人笏を正ふして問へば、一人髯を撚けて答ふる樣を寫出したらんに。一幅の畫或は數十卷の史傳に勝るべきなり。

去程に主上笠置に御座ありて近國の官軍附き奉るよし京都へ聞えければ、九月一日六波羅の兩檢斷糟谷三郎宗秋隅田次郎左衛門五百餘騎にて宇治の平等院へ打ち出て、軍勢の到着をつくるに、十萬餘騎に及へり。是より連日合戰ありて官軍常に勝利を得、足助次郎重範が賊將荒尾九郎同彌九郎の兄弟を遠矢に懸けて射殺したる如き愉快の事ありて、賊軍責あぐみたり。

此山太平記には十八町とあれど、其實八町にして、山上を一週するも七町に過ぎす、かゝる分内狹き場處に大勢楯籠ん樣もなく、兵糧其他も不充分な

りしに、能く大軍を數十日間防ぎ得たるは、山上の大石防禦の利器となりたるもの丶如し、太平記九月二日の合戰を記したる條に云

晩景になりければ寄手彌重りて持ち楯をつきよせて木戸口の邊まで攻めたりける。爰に南都の般若寺より卷數を持ちて參りたりける使、本性房といふ大力の律僧のありけるが褊衫の袖な結びて引違へ尋常の人の百人しても動し難き大盤石な輕々と脇に挾み鞠の勢に引き掛け〳〵二三十つゞけうちにぞ投げたりける。數萬の寄手楯の板を微塵に打ち碎かる丶のみならず、少しも此石に當る者尻居にうち居ゑられければ、東西の坂に人頽を築きて、人馬いやが上に落り重り、さしも深き谷二つ死人にてこそ埋たりけれ。されば軍散して後までも木津河の流血になりて紅葉の陰な行く水の紅深きに異ならず。是より後は寄手雲霞の如しといへども城を攻めんと云ふ者一人もなし云々

屛風を立てたる如き嶮なる坂路を重き鎧着て喘ぎ〳〵上る處へ頭上より大石を投げ落されては堪るべきにあらず、人皆押鮓の如くなりて死ぬるは眼前なり、人情に古今の異りなく戰爭に出づる結局の目的は論功行賞にあり、死では詰らぬから城を攻めんといふ者一人もなくありしは當然の事なり、今以て赤血谷地獄谷といへるあり、其遺跡なりと云ふ。されば此合戰には本性房さしつめ功五級のものなるべきに其傳の聞えざるは惜むべし、山上の名物なるゆるぎ石は此僧の投石にせし內の一個殘れるなりと石の周圍凡そ三十尺もあるべく、雙手にて之を撼せば兀々として動搖す、斯る大石を鞠の如く投落せし和尙の大力驚くべし。

笠置の守固き由鎌倉へ注進ありければ高時入道一門他家宗徒の人々六十三人、武藏相摸伊豆駿河上野五箇國の軍勢都合二十萬七千六百餘騎を差向けらる。爰に備中國の住人陶山藤三小見山次郎の二人笠置の寄手に加はりて山の北手木津川の邊りに

雜錄

居りしが、東國の大勢近江に着きぬと聞えへしかば、奇功を立て名を後代に殘さんと、飛鳥路村の農民を刧して嚮導となし、山の東北面より匍ひ登り、風上なる寶藏坊に火を放ち鬨の聲を擧ぐ、四方の寄手七萬餘騎鬨を合せて攻上りしかば皇居は遂に沒落せり。此時に討死する錦織判官が振舞こそ目覺しかりけれ。

陣々堅めたる官軍ども、城の内に敵の大勢攻め入りたりと心得て、物具を脫き捨て、弓矢をかなぐり棄て、崖岨ともいはず倒れ轉ひとて落行ける。錦織判官代之を見て、汚き人々の振舞かな、十善の君に憑まれ參らせて、武家の敵に受くる程の者どもが敵大勢なればとて爭はで逃ぐるやうやある。いつのために惜むべき命ぞとて、向ふ敵に走りかゝり走りかゝり大童になりて戰ひけるが、矢種を射つくし、太刀を打ち折りければ父子二人郎等十三人、各腹かき切りて、同じ枕に伏して死にけり。

錦織の傳も洋かならざれど何樣勇氣凜然たる大剛の武士たるとは此の討死の狀にて知らるべし。其子は初若と云ひし由、父子郎從一處に討死せる平生の行狀もさこそありけんと偲ばるゝなり。此人勇戰の狀を小堀鞆音氏の如き歷史畫家に畫かせ、之を彼の空海自刻と稱する虛空藏菩薩の像の如く山上の大石に彫附け以て不朽に傳へたらんに、其世道人心を裨補すると、單調無味の紀念碑の類にあらざるべし。

錦織等が忠死の間に主上を始め三公九卿皆步跣なる體にていづくを指すともなく足に任せて落行き給ふ。雨風烈しく道闇くして敵の鬨の聲此處彼處に聞えければ、次第に別々になりて後には只藤房季房二人より外は主上の御手を引進する人もなし。とかうして夜晝三日に山城國多賀郡なる有王山の麓まで落させ給ひしが、君臣共に三日迄食を斷ちければ、足たゆみ身疲れてうつゝの夢に伏し

給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞召して木陰に立ち寄せ給ひたれば、下露のはら〳〵と御袖にかゝりけるを主上御覽ぜられて、

さしてゆく笠置の山を出でしより
天が下にはかくれがもなし

藤房卿泪をおさへて、

いかにせんたのむ陰とて立ちよれば
猶袖ぬらす松のしたつゆ

遂に山城國の住人深須入道松井藏人の二人に尋ね出されさせ給ひ、一旦京都へ還幸ありしが明年三月遂に隱岐國へ遷され玉ふ。此の兵燹に罹りて諸堂伽藍悉く灰燼に歸せしが、元弘三年天皇重祚まし〳〵、七月より恩賞を行はれ八月十四日當寺再興の議ありしも朝廷多事により果さずして止みぬ、實に本山の不幸と謂ふべけれ。

扨此時天子孤島に播遷一山回祿に罹り、萬人干戈に斃れたる濫觴を尋ぬれば、土岐左近藏人頼員と云へる日本一の不覺人が武家誅伐の一大事を其女房に漏し、女房亦頗る生賢しく、之を其父六波羅の奉行齋藤太郎左衛門尉利行に告げしかば忽ち大事露顯に及び、土岐頼貞多治見國長等は非命に死し、遂には笠置蒙塵、隱岐播遷にも至りしなり、此女房若忠義の志厚き者にて夫に勸めて皇室無二の御味方とならしめたらんには假令事破れ身死するも、夫妻共に美名を千載に傳ふべかりしに、入らざる猿智惠の告口せしため、夫には不義の名を負せ、而も鎌倉の滅亡には何の益する所なかりし、古人婦の言聽く莫れの戒めあるも是等の失策を思へばなるべし。

（未完）

露の干ぬ間（つゞき）

後藤紫浪抄譯

されど猪之助は獨り心を決め、神に其身を任せ、精き神をはげま

して、あらき浮世の浪風と戰へり、人の裏をうけて生命をつながんとの心要くて大工となり水夫となり、漁夫が網をすき、船荷の積卸の手助をなして、其日〳〵の糧をぞもうけ居たり、さはれ希望なき所業は其中に活氣なしとかや。

かくて其日を暮す間に一年となりぬ、恰も歸國せし其日なりき、身にいたく疲勞を覺ゆたると思ふに心地すぐれず身はいよ〳〵衰へ行く、外に出んも心苦しければ遂に閉ぢこもる、それも叶はずて果ては臥戸に入りぬ、かくても猪之助は心樂しく身の苦痛を忍びたり、難破したる船の、嵐の絶間より救助船の來るを認めたる悅びのそれよりも、猪之助が今死の近くを見たる心の裡、いくそ優りぬべし、我死にたる後にこそ、最終の際までも愛しう思へりと知らさめと心定めてかのお丸を聲高らかに呼び言へるやう、「媼、我に秘密あり、御身に告げむと思へど、此口を開かぬ前に、一言誓ひ給へ、此身の死にたるさま見るまでは、人には告げぬと、」「死ぬ、かりそめにも死ぬなど宣ふな、此老媼が確かに御身を元の身体になし參らすべきに。」

猪之助が言葉のあまりに嚴なるに牛は恐れて誓ひければ、艶消ぬたる眼をみひらきて「御身は、此町の猪之助を知り給はずや」と「あゝ、町を歩み來るさまは今にもあり〳〵と見ゆるを、頭を高く揚げて人を拂ふさまは實に目の前の如、」聞きたる猪之助悲しげに「その高かりし頭今は低く、人にはうとまれぬ、死ぬるはやがて三日の内なるべし、其猪之助こそ、かく申す此身なれ」、「なにとや御身が猪之助殿とや、」と牛は不信、牛は物狂はしき叫音を發しぬ猪之助詞を續けて大御神はかくなし給へり、「我悲憐はかく我身を害へり、」さては船出、破船、孤島の獨棲、歸國、お淺をのぞき見たると、決心ーを語り出づるに、老媼堪ねかれて、脆き涙、瀬の如くながす、此間走り出で〻此經歷、港の人々に告げ知らせんとの念胸に充つれど、誓ひの言また終らざる程なるに逡巡てせめても、子等の顏を見られよと云ふ、流石は親子の情、しばらく首傾けて考へ居たりしが、斷乎として答へたり、「媼よ、臨終の此際に我を妨げなせそ、死ぬるまでは我決心を翻さじ、坐られよ、我が言ふ詞をよく聽き給へ、物言はむも力よはりしぞ、御身に願ふは御身のお淺に逢はれなば、此猪之助が死ぬるまでも、幸福あれと神に祈りたりと、又娘にも子にも最終の呼吸は彼等の爲めの祈言なりきと告げ終へ、またかの房吉殿にも、其身の爲めにのみ思ひ居りしと、又若しや子等の我死顏を見んと云はゞ見せられよ、我は彼等の父なれば、されどお淺には許し給ふな、我を見て余生の心の内苦しからむに、彼の世に行きて我を抱かんはかりの末子なり、此髮はげにや彼れがなり、船出の時、お淺の切りて我に與へたるなり、長の月年、肌身離さず持ち居て、墓の内へもと思ひけるが、此心今は變りぬ、やがては彼子に遇ふべければなり、されば我なき後に此髮をばお淺に渡されよ、慰めとならむのみならず、此身の猪之助なりとの證明ともならむ、」

高俠き魂は飛び去りぬ、此淡に、曾つて例なき野邊の送りは幾百の人の袂を濕して施行れぬ。（完）

清國見聞談（承前）

阿 名 廣 介

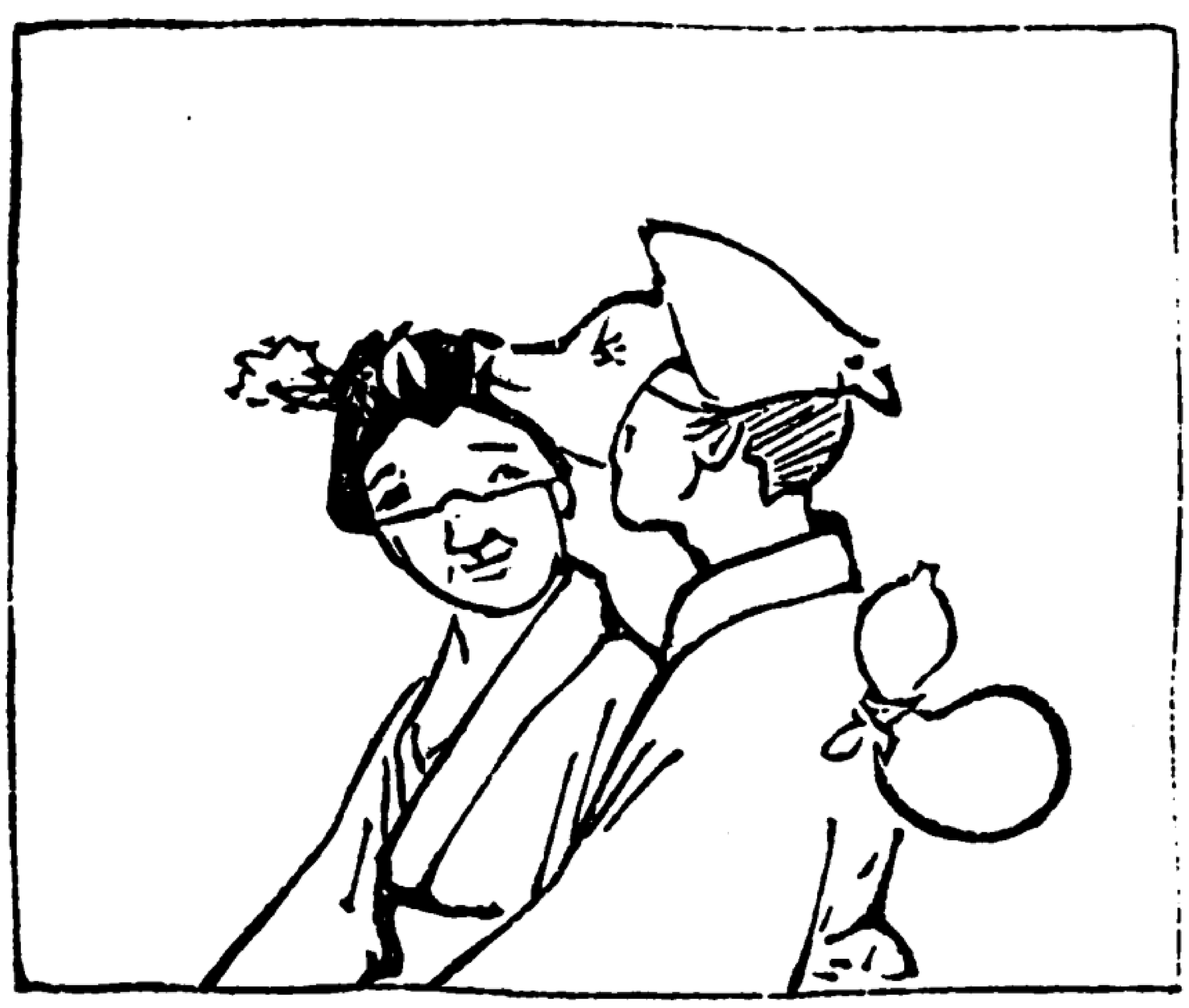
十一月三日は天長節について、天氣もうらゝかで異國の空も何となく祝意を表して、朝まだきから居留民諸君は拜賀の事やら、祝賀會の事やらに奔走し、歡喜の有様が內地に於けるよりは、一層發揚されて居るやうに思はれました、私は例の輿に乘りまして、午前は領事館に參り御聖影を拜し祝盃を戴き、それより領事併びに居留民諸君の招待によりまして、錢塘門を出で西湖の岸に參りまして兼て用意の遊船に乘り、コーチヤンと申す豪家の別莊にまゐりました、此の別莊は西湖の濱に沿ひなか／＼宏大で庭園や建築等絶景風雅な、所であります、晝食をしてから居留民諸君の運動會が初まりました、運動の種類は我國の學校等に於けるが如きもので、婦人諸君も一緒に成つて、共に與に遊戲を致したのは、外國に於て意想外のことでありました、畢竟するに杭州の居留民諸君が年々增加して協同一致して職務を執らるゝのは、當局者諸君の誘導宜しきを得たでもありませうがつまり多くの婦人諸君が故鄕に戀々とせず、異域に航りて夫と共に苦樂を與にし、又婦德を修めて調和懇親を結ばるゝに歸することゝ信じて、益々我國の女子敎育は單に從來の消極的敎育に安んせず、對外的敎育を積極的になさなければならぬといふことを確信する次第であります、夫からボートレースもありました、隅田川のレースの事を思ひ出し、昔取つた杵で私も出陣しましたが、ボートの形や櫂の漕ぎやうが異ひまするので方向

が定まらず、くる〳〵廻りをして、水勢に押し流されて大失敗をとりました。

かくて酒宴が初まり、領事は天長節の挨拶並に今日の運動會の趣旨を述べられて、皇室の萬歲を唱へ、一同和氣、靄々として快を盡し、燈を點ずる頃歸路につきました。

四日、午前は所々に暇乞をして午後より杭州を出發し、拱宸橋に至り、居留地の邊を見物しまして午後四時に大東汽船會社の小蒸汽船に搭乘しました、途中は別段御話する程のこともありませんが彼の湖筆、徽墨と稱へる即ち唐筆の有名なる湖州を經過して、五日の午後二時に蘇州に着し、大東汽船會社の支店に宿泊しました、蘇州府は江蘇省の主府で上海から船で十二時間を要し、吳淞江に望み大湖を控えて居て、馬關條約の結果によつて開港した處で、水運は大に便利に船舶寄集し、商賣繁盛して居ります、此の地は昔春秋の世、吳の都府で有つて明代に蘇州府と稱へ、清も亦これに依つたのであります、市街の周圍は我國の三里位で、城壁を以て圍み、六つの門が設けて其の城壁の外圍は運河であります、市街は比較的清麗で商店は櫛比し、居民三十萬と號して居ります、かの有名なる楓橋及び寒山寺は揷畵の通りでありますが、閶門.外から少し隔たる、郊外にありまして、百般の景色が大に風雅であります、故に外國人は許して支那の巴里と稱へてゐるそうです、橋梁の多きことは恰も我國の大阪の如く、氣候は大に人身に適して居りまして人民は一般に華美を好み珍奇をよろこび、舶來の貨物を尊ぶ風があります、古來學者も輩出して、現今に至るも所謂讀書生は頗る多く、又官吏の退隱した人達は多く此の地に卜居する樣子で、恰かも我國の西京みた

様な有様であります、從て剛氣の風に乏しく、風雅を尊ぶ様であります、我國の居留地は呉門橋外にありまして、道路は既に開かれつゝありますけれども、家屋はまだ一部分建築せられてゐるばかりで、廣漠たる有望の土地は草茫々として居る有様で口惜しき次第であります。而しながら此の居留地の地域は運河に臨み、呉門橋外に在つて有望の地と信じます、我國の領事館は城内の聖廟の傍にありますが、六日早朝驢馬を驅て領事館を訪問し、二口領事幷に村山通譯生に面會して種々なる便利を與えられ、晝食を共にし、午後村山氏の案内にて北寺の塔に登り、本府の大觀を察しましたが、此塔は宋代の建設にて八面九層の木製高塔で、有ます、



また城煌廟關帝廟滄浪亭寒山寺等を見物しました、之等の景色は挿畫の通りであります。

七日は猶村山氏の案内にて二三の學校を視察しました、此の地にては大官碩儒を訪問するの餘日もなく且つ此の地は官吏は頑冥にして、流石の嘉納治五郎氏さへ匙を投げられたといふことを聞きましたから、强て會談を求めず、用向丈けを濟して午後一時に出發しましたが、聞くところによると、民間の士は大に開明であつて、男女の外國留學生は最も多く此の地より出て居るさうです、又製造塲の如きも繻子紋縮緬紗等の製造塲は中々宏大なものであります、後來有望な地となることを信じて疑ひません。

（つゞく）



小説

片袖

田村松魚

根岸でもずつと奥の、護院殿下と云つては名からして閑靜な場所、青葉若葉の谷中の森を、自から有る庭園と見晴らして新建の二階屋造り、冠木門に建仁寺垣と氣取つた所は、所柄意氣な姿の若いのが、爪彈の三味線の音などをさせもしやうといふ構であるが、小形の木札に栗屋としてある主人はと聞くと、これは若手の文學士で、九州地方のさるべき豪家の次男、好きがさする業くれは、讀書貧裏の樂、搜句靜中の忙と自ら高く身を置いて、詩人といふ清い天職の下に遊んで居るので、故郷から伴れて來た源藏といふ老僕と、セッター種のライといふ洋犬とを友として、何不自由はないながらまだ妻もない獨り住

二階の窓を洩れる讀書の聲の他は、何に驚いてか頻りと吠え立てる犬の聲ばかり。
門の戸を靜に開けて這入たのは十八九の娘、粗い二子の袷に紫綿繻子の帶をきりつと締め、髮は結ふ隙もないのか手束のぐる〳〵卷、色白の細面で、鼻筋の通つた口元の可愛らしい、眼に一寸張を持た小柄な質で、更紗の風呂敷包を横抱にして、敷石傳ひに玄關の方へいそ〳〵歩んだが、一寸と立ち止まつて考へて、すぐと右の方高野槇の植込を拔いて勝手元、水口の前に來たが、奥の方を窺き込んで。
伯父さんと聲を掛けたが、返事がないので、また二聲ばかり呼ぶと、オーイ、と頓狂な聲で、咥煙管で出て來たのは老僕の源藏である。
ヤア、誰かと思つたらお仙さんか、お早う、と金壺眼の尻に皺を寄せてニコ〳〵しながら、今し方朝飯が濟んだ計りだ、マア、此方へお這入り、といふ。ハイ、有難う、伯父さん、お仕立物が出來たから以つて來たの、と風呂敷包を解いて、仕附の掛つた大島絣の袷を出し、あの、旦那樣に一寸とお目に掛けて下さいな、急いだものだから大變拙いの、お氣に召さなかつたら縫ひ直しますからつて……といふを、ホー、滅法綺麗に出來たぢやないか、丁度旦那樣は今お出掛になつたから、お歸りになつたらお目に掛けべえ、お前さんは仕立物が上手だつて平時も旦那樣褒めてるから、お氣に召さねえやうな事はねえ、旦那樣が能くお前さんの事を褒めて居るだからね、と感心をしたやうに仕立物を見て居たが、急に思ひ出したやうに、お仙の顏をしげ〳〵見て、何時も内の旦那樣はお前の事を褒めてるだが、褒められると思つて不丁寧なことをしては不可ねえせ、惡るいこつた、不丁寧な事をするは宜ねえこつた、俺

ア此の年になるが、まだ不丁寧な事ア一度もした事は無えだ、と掌に吸殻を落してまた一服つけながら、氣を附けねえ、お前の爲だでね、と意味ありさうに云ふ。エ、、伯父さん、何ですつて、マア、……わたしは不丁寧な事をした覺はありませんが、何か粗忽でもしましたか、伯父さん、と心配さうに稍々急き込んでいふ。何に、不丁寧といふではねえが、矢張り粗忽だつぺえ。旦那樣好えお人だで、何もお小言は仰しやらねえが……マア好えや、以後氣を附けねえ、針なんぞ取つ散かして仕事するもんでねえ、那樣な過失が無とも限らねえで、と云つて、ヤッコラショと立ち上り、洗濯物が溜つてるで持つて行つてお呉れ、襦袢だのシャツだの澤山有るだから、と奥へ行き一包にしたのを持つて來て、サア、此丈けあるだ、と其所へ置くのをお仙は見もせず、今の源藏の言葉が氣に掛るので、伯父さん、何かわたしは粗忽をしたんですか、わたしは此方の旦那樣のお仕立物は氣を附ける上にも氣を附けて仕てゐるんですが、……、惡るい事があるなら打明けて云つて下さいよ、那樣な粗忽がないものでもありませんから、エ、伯父さん、後世だから惡るいことがあれば云つて下さいな、旦那樣が何が仰しやつてて、と云ふ聲は少し震へて、さも心配さうに眼が濕んだ。

何あに、心配する程の事でも無えだが、お前さんが其樣に氣にするなら云つて聞かすべえ、その風呂敷を解いて見ねえ、といふので、お仙は何事の此の中に包まれてゐるかと、恐る〳〵包を解いた。そして下着や襦袢を打ち返して見ながら、伯父さん、此が如何したの、わたしはまだお裁縫が下手なんですから、……旦那樣のお氣に召さなかつたんですか、と見上げた眼元には、もう口惜しさうな色がありあ

りと見えて、平時は斯樣嫌な事をいはれたことはないのに、今日に限つて如何したのだらう、この伯父さんは頑固な人だけれども、わたしを可愛がつて呉れるのに、不丁寧だの、氣を附けろのと、をかしな事を云ふのは、屹度何か自分の仕た事に手落があつたのであらう、と斯う思ふと、もう小さな胸が引縮まるやうに、自分を贔負にして下される此方の旦那樣へ濟まぬといふ考が起つたので、おろ〳〵しながら下を俯いて默つて居た。

お仙さん、そんなに心配しねえでも好えだ、俺ア惡い事を云ひ出した、何んでも無え事だが、氣にすると惡るいだお前の耳へ入れて置くだ、そ、その、繻袢の袖を見ねえ、右の方の袖だ、といふので、お仙は水色縮緬の袖を手に取つて打返すと、オヤツ、と云つて眼を丸くして、これは何ですか、マア、血が斯樣に附いて居る、と云つて暫時双眸をそれに注いでゐるが、何か胸に思ひ當つたのか見る〳〵お仙の顏の色は靑くなつた。

それだよ、その血だよ、と源藏は云つたが、餘り自分ながら聲が高かつたので、急に調子を低くして、サア、その袖に附いた血だ、此間旦那樣がお前さんの仕立てた何とかいふ立派な衣物を召して向島へ花見にお出になつたと思ひねえ、お伴があつたので八百松とか云ふ處でお夕飯を召し上つたゝ、好えか、內の旦那樣は其樣な所でお夕飯などを召し食るやうな方では無え、大概はお歸りになつて此の源藏が炊いた御飯で、源藏がこしらへたお菜で召し上るだが、今日は花見の事つた、お伴樣もあることつた好しか元と學校に這入つたお出た時のお朋友があるのだで、其所がお交際だな、好しかお交際だで仕方がねえ

料理屋へお上りになつてお酒を召し上つた所が、旦那樣は餘り御酒はたべねえだが、矢張りお交際だから一杯二杯と段々杯の數が積ると、醉つて來たゞ、お伴の衆も皆な好心持に醉つて來ると、其處がそれ若い殿方だ、源藏見たいな老爺のお給仕で平時も召し上るやうな堅いお方だけれど、其所がこれも交際だから、お伴の衆が別嬪を呼んだと思ひねえ、向島といふ處、俺一度旦那樣のお伴をして行つて知つて居るだが、土堤の下に別嬪の居る家があるだ、が其所等からでもお呼になつたろう、大衆の姐さん達が來たと思ひねえ、斯うなると俺等のやうな老爺さんでも惡るい心持はしまいで、ハヽヽヽ、お仙さん、心配しねえでも好えだよ、內の旦那樣は其樣な姐さん達に目を吳れるやうな下卑たお心を持つて居るやうな旦那樣で無えから、……所が皆な醉ふて居るで、歌ふものもあれば躍るものもある、何でも若い時のこつた、花見歸りで威勢が好えで大騷ぎをやると、よくあるとで一人〱の藝盡しになつたのだ、お前さんも知つて居らうが、能く內へ遊びに來る津山といふ旦那は中々の藝人だで、いろ〱な藝をした、梅本といふ旦那も三味線がちつとばかり引けるので、彈いた處が、調子が合はねえで、癇癪を起して、撥のせい尻で胴を破して、藝者に謝罪つたさうだ、此は梅本の旦那が內へ來て、旦那と其時の事を話して笑ふてお出たのを聞いた話だが、マア、何んでも面白れえ事になつたで、內の旦那も何か一藝しやうと、何にも知んねえだが、氣が浮いて居るで起ち上つて躍つたと思ひねえ、平時も溫順しい內の旦那樣が躍り出したで、ソラ、栗屋君が躍出したとお伴の方が手を拍いて笑ふて居ると、旦那樣疲れたので、バタツリ其所へ橫におなりになると、如何だ、不丁寧なことは出來ねえものだ、チクリ〱と

旦那の大事な二の腕を刺したゞ、アツ、と思つて起き上つて、手をやつて見ると驚くぢやアねえか、二の腕に針がすつくり刺つて居るで、コリやならぬと、傍に居つた姐さんに拔いて貰はう、とすると、ちつとばかり深く刺つたで、滅法痛え、姐さんが、そつと手を入れて見ると、お前さん、如何した粗忽か知んねえが、お前さんの縫つた綿入れの衣物に太え木綿針が縫ひ込んであつたのが、横になつた機會に刺つたのだ、拔きは拔いたが、血は出る、痛くはあるで、旦那様もちよつとお困りなさつた、といふ事だ、如何した物の間違へか知んねえが、針を絎け込むといふのは不丁寧な事つた。旦那様は人が好えで何もお小言は仰しやらねえが、お歸りになつて脫いであつた襦袢を俺が見ると、生々しい血が附いて居るで、如何なされました、とお尋ねすると、何アに、と云つたばかりで仰しやらぬが俺ア心配になるので根掘り葉掘り問ふて見ると今話したやうな話しだ、お前は仕立物が上手で、氣立も好えで、旦那様が褒めてお出だ、その褒めてお出での所にさういふ粗忽があつたのだで、俺アお前さんの爲を思ふて氣を附けたの、ア、、疲勞れた、餘り話しがはづんで喉が乾く、と云ひながら一口茶を仰いだ。

この談話を聞いたお仙は、身を切られるやうに思つた、濟ぬ事をした、と自分の粗忽を悔ゐ且つ耻ぢてびつたりと老爺の前へ兩手を衝いて、自分の粗忽の此上もないことを、宜しく旦那様へお詫をして呉れるやうと、幾度も謝したのであつた。

お仙は粟屋の門を出ると、泣いて歸つた。そして血の附た襦袢の片袖を顏にあて丶さめ〲と泣いた。胸の中には誰にも〱打明けて云ふことの出來ぬ心の責が總身を搔き廻した、それは粟屋の旦那様が、

自分を嘸ぞ不丁寧な輕忽しい女と思召してお出であらう、といふ事の他に、更に大なる悲があつたので、自分の胸を太い絎針か何ぞでぐさと貫ぬかれるよりも辛らかつたのである。

（をはり）

次號小説豫告

可愛子

幸田露伴



文林

明治卅六年四月宮中歌御會詠進寫

瓶花

柳原愛子

大前のかめにさしたる花みれは
ときはにさけるものかとぞ思ふ

千種任子

雨風のうきをのかれて玉たれの
をかめにゝほふはなさくらかな

小倉文子

日をふれど散んともせず萬代の
かめにさしたるはなのひともと

姉小路良子

玉たれに風やよきけん瓶にさす
はなのさかりのなかくもある哉

坂正臣

いほの内に春はみち皃花かめに
させるさくらはひとえなれとも

小池道子

玉たれのをかめの花のひと枝に
野やまのはるをおもひこそやれ

藪兼子

玉たれのをかめに生し花をみて
あめのふるひもなくさまれつゝ

北島絲子

文林

めでられし庭のさくらは花瓶に
さゝれてさらにいろまさりけり

津守好子

つほみのみ折てさしたる花瓶の
さくらのこらすさきいてにけり

吉田愛

さくら花愛つるあまりに手折つゝ
かめにもさしてなかめけるかな

小原適

菅の根のなかき春日も忘れつゝ
をかめにさせるはなをみるらん

本居豊頴

花瓶のかをりしたひてよる蝶は
きのふみし野のそれかわらぬか

歸雁

下田春與

あつさゆみはるさりくれは
やまへにははなさきをゝり
野のへにはすみれにほへり
其のはなのかをりむかしみ
其のくさのいろなつかしみ
ふるさとへかへるかりすら
さりかてにかへりみすらむ
やまゆけははなのをふすま
野へゆけはすみれの夜とこ
のにやまにわかれをしけに
ねになきていまそゆくなる
あまつかりかね。



樞密顧問官 正三位子爵 黑田清綱先生撰

歸雁

天

埼玉縣入間郡川越町 横田音羽子

朝またきくもにかすみにまきれつゝ
しつこゝろなくかへるかりかね

地

肥後國玉名郡木葉村 坂本菊子

いまはとて越路にかへるかりかねの
おほろつき夜のそらにきえつゝ

人

美濃國大垣町南寺内 吉村せん子

春かすみたちへたてゝもゆくかりは
こし路のそらやこひしかりけん

甲の部

三河 永井さい子

くれわたる空のかすみをたとりつゝ
ゆくらんかりのこゑわはれなる

東京 椎野秀子

聲のみはおとにのこりておほろ夜の
つきにきえゆくかりのひとつら

栃木 佐藤たか子

ふる里にいかなるひとのまつやらん
かへるさいそくかりのひとつら

東京 横井勝子

なか〳〵に見れはうしとや散る花の
咲くをもまたてかへるかりかね

肥後 志方圓子

月夜よしよしとうたふかりかねの
こえもわやなきおほろよのそら

肥後 吉田長子

かりかねはみつよつ空にとびつれて
なにをとことよになきてゆくらん
東京　篠田圓子

しかすかに花を見すてゝゆくかりも
なくりをしとやなきわたるらむ
横須賀　上田雪子

何處より誰かたまつさやかけにけむ
こし路をさしてかへるかりかね
伊豫　吉良貞子

花はさきつきもかすめるこのゆふへ
わはれやかりのなきかへるらん
埼玉　横田秋子

うちかすむおはうち山をへたてつゝ
近衛大路をかへるかりかね

乙の部

ゆくかりのこゑはきこゐており明の
つきのみのころやまのはのそら
三河　服部萬子

春の夜のおほろのつきにかけみせて
かすみに入りぬかりのひとつら
群馬　星野のぶ子

あくかるゝ人のこゝろにそみもせす
はなをうとみてかへるかりかれ
札幌　澤すゞ子

花かけにふるさとしのふゆふまくれ
かりもこひしとなきてゆくらん
東京　三好珍子

あまつ雁せめていちやはとまれかし
もみぢにまさるはなのしらくも
東京　吾妻ちか子

のとかなる春をみすてゝしらゆきの
ふるさとさしてかへるかりかれ
肥後　德永萬壽子

さよふけてつきになくくうみの上の
かすみをわけてかへるかりかれ
奈良　栗山たか子

このゆふへなきつゝかへるかり金は
ふかきかすみにみちまどふらん
三河　服部正子

わかれゆく雁もなこりやをしむらん
こゑさへかすむゆふくれのそら
上野　佐野おき子

咲くはなにわかれかれけんなく鳴も
おほろづきよにかへるかりかれ
東京　田中千代子

すみなれて歸るわかれやつらからん
鳴くれかなしきはるのかりかれ
東京　田中よし子

たひころもあさたち出てやまみれは
みれとひこゆるかりのひとつら
三河　河合ぬひ子

ほのかなるひと聲のみをあとにして
つれなくかへるかりのひとつら
東京　後藤きよ子

けふもまた海はらとほくなみの上に
きゐてゆくなりかりのひとつら
東京　林環子

はるかすみ雲路をふかくたちこめよ
とまらぬかりのゆきまとふまて
三河　本多きさ子

花のちるうきをみぬまにかりかれは
讃岐　大山盤子

おのかとこよにかへりゆくなり

春さめのそほふるそらをなく〳〵も　おのかとこ世にかへるかりかれ　上總　高石登代子

ふるさとの妹なつかしみさくはなに　つれなくかりはたちかへるらむ　但馬　田尻保代子

壁はしてつはさは見ねすうすゝみの　ゆふへのそらをかへるかりかれ　陸前　螢原つる子

春さめのふるさとかけてあまつそら　はれぬおもひのかりのわかれち　埼玉　前野壽賀子

春されはなく〳〵かへるかりかれの　なみたにそらはかすむなるらん　清國　稻田銀子

さく花のさかりもはてすまたきより　かすみかくれにかへるかりかれ　札幌　山田婦美子

つはくらめ來つゝなれぬる春なるに　かりのみひとりたちかへりゆく　肥後　田代綾子

さくらはな咲のさかりのみやこ路を　みすてゝかへるかりそつれなき　三河　石川ふみ子

春かすみたちへたてたるあとゝほく　くもちにきゆるあまつかりかれ　埼玉　前野ふさ子

來ん秋をはなにちきりてよしのやま　かすみにきゆるあまつかりかれ　肥後　田代艶子

春されはかへるかりかれなつかしみ　ふるさとひとにことやつてまし　東京湖　北島功子

遠やまもかすみくれゆくゆふそらに　はれうちかはしかりかへるなり　栃木　川連秋子

白くものそこともわかすおほそらに　こゑのみたてゝかへるかりかれ　長崎　八尾いへ子

たちこむるかすみの空にかけきねて　こゑのみとほくかへるかりかれ　東京　池田しづ子

はるくれは空もかすみとたちかはる　はなをもまたてかりやゆくらん　秋田　三浦さわ子

かすみたつ空をうみとやおもふらん　はなもしらなみかへるかりかれ　秋田　佐藤かつ子

ふるさとのたよりきゝてやあまつ雁　かすめるそらにおもひたつらん　東京　椎野ぬき子

住なれしみやこのなこりをしみつゝ　くもゐにたかくよはふかりかれ　東京　岡松愛子

花みれはゝろのわかれのなか〳〵に　うしとやかりのいそきたつらん　大阪　桝田登子

かちの音をよはにつられてかへる雁　あけはなにはのはるのをしさに　東京　山本梓子

くろも旅ゆくもたひなるかりかれの　かへるとたれかいひそめにけむ　東京　山本茂子

なかめやるそらに名こりの壁はして　かすみに消ゆるかりのひとつら　東京　高谷いち子

横くものみねにわかるゝあけほのゝ　はなにはとまれかへるかりかれ　三河　宇津野代幸子

おほろ夜の月とはなとをよそにみて　なとかりかれはたちかへるらむ　伊豫　梯たけ子

春ことにかすみをわけてゆくかりの　わかれさひしきあかつきのそら　肥後　岡山登壽子

立こむるかすみのひまにこねもれて　かけもかすかにかへるかりかれ　東京　椎野鋭子

まてしはしこゝろあらはやかへるかり　名古屋　木下鶴子

秋の雁

夕日かけおほろににほふはるかすみ
明日はみやこのはなもさきなむ　丹波　大槻まつ子

ふるさとになにいそくらん咲ににほふ
見すてゝかへるかりのいくつら　肥後　佐々小峯子

さきにほふ花のこゝろもしらつゆの
はなをみすてゝかへるかりかれ　秋田　三浦ふさ子

かりかれをしはしとゝめてこの春の
あきのみ戀ふるかりやゆくらん　肥後　田代喜和子

さきにほふ花をみすてゝゆくかりは
はなのさかりをみせまほしきに　肥後　德永多瑠子

草まくらたひのやとりのはなさかり
とこよのはろやこひしかろらん　橫須賀岩　橋　花　子

來む春はさくらをうゑてとゞめ見む
かひなしとてやかへるかりかれ　松山　上原のぶ子

一つらのなかにおくれてゆくかりは
はなゝきさとゝかりやかへれる　東京　戸塚てつ子

ふるさとの花のたよりやきゝつらん
はなにのこりやをしむなるらん　東京　内田きみ子

きゝすなくかた山かけのさくらはな
ともうちむれてかへるかりかれ　肥後　佐々有鄰子

雁かれの羽根うちかはしふるさとの
よそにみなしてかへるかりかれ　下野　菅沼興志子

たまつさをたか頼みてかいそくらむ
はろやこひしくかへりゆくらん　札幌　山　田　靜　子

ありあけにのこんの月のほの見ねて
あかつきかけてかへるかりかれ　東京　後藤ちか子

さく花を見すてゝかへるかりかれは
なきゆくかりそあはれなるかな

ひと聲をつきにのこしてかりかれの
ちるをうしとやおもふなるらむ　栃木　青木たま子

秋たてはまたくるものとしりなから
かけもおほろにかすむ夜半かな　越前　上村ちと子

さくらはなさくを見捨てゆくかりは
なほをしまるゝあまつかりかれ　東京　田邊　歌　子

さく花をあとにのこしてゆくかりは
ゆきふるさとやこひしかろらん　東京　高橋松江子

おほろにも月たにあらはゆくかりの
ふるさといかにこひしかろらん　筑後　䑓山増代子

かすみ立はるを見すてゝゆくかりも
かけもしはしはみるへきものを　東京　戸賀崎久子

うちむれてこゑもおほろにかりかれの
あきはちくさのはなやめつらん　宮城　大槻初音子

誰もみなはなにひかるゝこのころを
かすみかくれにかへりゆくかな　下野　民屋喜美子

越てゆくみれのさくらをゆきとみて
見すてゝかへるかりもありけり　伊豫　す　み　れ　子

打むれてきのふも今日もはる〳〵と
しはしはとまれはるのかりかれ　東京　戸賀崎治子

見れはまた花にわかれのつらしとや
かすめるそらをかへるかりかれ　下野　花　方　米　子

さくらさく花のみやこをあとにして
かすみかくれにかへるかりかれ　栃木　岩岡きよみ

うす墨のもじかきかへるあまつかり
おのかとこ世にいそくかりかれ　下野　和賀井芳子

伊豫　浦尾やすな子

こゑもかすみのそらにきえゆく

いもかしまかた見の浦の名にも似ず　なみ間にきえてかへるかりがね　下野　海老沼靜子

まてしはし待つらん物をいかゞせん　あきなわすれそはるのかりがね　下野　中村清子

たまつさをたのむの澤へながむれは　こゑのみきこゆかへるかりがね　下野　木宮愛子

よも山のはなのさかりをあとにして　くもにきえ行くはるのかりがね　愛知　後藤のぶ子

丙の部

なくこゑは月にのこしてわかれちを　かすみにかくすはるのかりがね　熊本　田島かず子

わかれなは惜みてかへるかりがねの　なみたやはなのつゆとなるらん　山形　玉生照子

かりがねのかへるみちへは遠くとも　こし路やいかにわすれさらまし　遠州　飯田せい子

かすむよの月に名こりをかりがねの　わかれをつげていまやゆくらん　肥後　德永しづ枝子

秋をのみたのみてかへるかりがねは　こしちのそらをわするへしやは　肥後　德永廣子

咲きにほふ花にわかれてゆくかりは　しづこゝろなくたびれなすらむ　三河　石川美野子

咲きにほふ花をみすてゝふるさとの　はるなつかしくかへるかりがね　肥後　坂本みよ子

うちつれてかへるを見れはかりがねは　はなにこゝろやのこさざるらん　山口　田村多豆子

空にたつかすみのせきもかひなしや　あけぬよ深かにいそぐかりがね　東京　川村櫻子

ゆふくれの空にまとひておなしくは　かりもみやこにとまれとぞおもふ　東京　平尾あさ子

ひとつらは雲のあなたにかへり路を　いそがぬかりぞうれしかりける　東京　信脇ます子

うつりゆく花にこゝろをかわさしと　こし路のはるにかへるかりがね　東京　北島操子

草まくらたびのやつれをみせしとや　はるのよふかにかへるかりがね　筑後　武田龜子

たちかへるゆくゑかすみて大そらに　かくれつみえつかりがねのなく　秋田　古瀨りく子

散る花のなげきは見しと立ちそめし　かすみをよそにかりはゆくらん　下野　芦谷りう子

雨はれてはなにふけゆくおぼろ夜の　つきにみだれてかりがへるかな　新潟　楡八重子

今日はとて眼ひ立つらんかへるかり　かすめるそらにこゑをのこして　下野　民屋美津子

はる／＼とかすみの奥のはなの香を　つはさにしめてかへるかりがね　東京　積山鏡子

待てしはしいさこと問はんはることに　いづかたさしてゆくかゝりがね　三河　石川しづ子

色くれしゆふへのそらをはる／＼と　とこ世にかへるはるのかりがね　陸前　豊原となみ子

はるかすみ空にのこしてゆくかりの　こゑきえ／＼となりにけるかな　下野　葛生定子

磯やまのかげな夜すからかへるかり　名古屋　瀨木せき子

秋の庭

のとけきうらのはるはしりきや
むらからすねくらあらそふ夕まくれ　肥後　徳永雪枝子
いつこをさしてかりはゆくらん
おほろにも月はのこれるあけほのゝ　丹波　大槻ふさ子
そらにきえゆくかりのわかれち
咲く花のみやこのはるをあとにして　下野　川中子てつ子
おのかとこ世にかりかへるなり
ふるさとに花のたよりをつけむとや　東京　松浦みき子
今朝立ちかへるかりのひとつら
雲にいりかすみにきえてしへりやの　秋田　古瀬たゝ子
よこも字なりにかへるかりかね
おもひたつときもあるへき咲いてん　東京　田中ちゑ子
はなをもまたすかへるかりかね
ちりやすき仇しさくらを見ましとや　東京　木下かね子
こし路にいそくかりのひとつら
あなやとてあほけははやも影きえぬ　兵庫　石田さだ子
こゑをかすみにかへるかりかね
常世にはたえてなからんみよし野の　大分　稲光敏子
はな見てかりやいへつとにせよ
さほひめのあたなる色にそましとや　兵庫　泉さい子
つられてかへるあまつかりかね
はる來てはたゞふるさとの忍はれて　東京　高谷華子
はなをもよそにかりかへるらむ
さほひめのにしきおりなす春かすみ　茨城　中里げん子
わけてやかりはかへりゆくらん
はるかせにふきおくられてゆく雁は　宮城　大槻慶子
こゝろならすもいそくなるらん

いつ方にいかなるちきりむすひけん　三河　石川滿壽子
はるをわすれすかへるかりかね
つれなくも歸れるかりのこゝろには　山口　村上操子
かゝらさるらむつきもさくらも
やよやまてかへる雁かねおなしくは　和泉　藤原菫子
みやこのはなをいへつとに見よ
さかりなる花をのこしてやまのはに　下野　菅沼菫花子
かへるとしろきかりのひとつら
來ん秋をたのみとしつゝゆくかりは　下野　菅沼靜子
おほろつきよにかけをのこして
夕そらにこゑをのこして行くかりは　下野　葛生竹子
こよひいつこにやとをしむらん
咲くはなのさかり見すてゝ行かりは　下野　岩岡壽代子
ちるを見しとのこゝろなるらん
こん秋のちきりわするなかへるかり　出雲　岩倉すみれ子
まつほのうらにわれはまたなん
ふるさとにたれやまつとて雁かねは　下野　川島幸子
はるをよそにもかへりゆくらん
おのか住むとこよにたれと契りけん　下野　長千代子
はるをのこしてかへるかりかね
浦の夜はなほもさひしくおもふかな　東京　植村梅子
羽おとをあとにかへるかりかね
さく花のうへをすきゆくかりかねの　下野　和賀井花子
こゑはこし路のそらにかをらん
まてしはしあはれ雁かねいたはしや　石狩　布廣しま子
やかてさくらんはなを見すてゝ
ふるさとの母のおこせしふみを見る　下野　大木菁子

なりもこそあれかへるかりがね

なきつれて雁かへるなりかへりこぬ
ともをおくりてかへるゆふくれ　兵庫　泉　久眞子

ふるさとの母にまゐらすたまつさを
くもにつゝみてかへるかりがね　出雲　藤原精子

まてよとやかすみに空はへたつれと
つれなくかりはたちかへるなり　秋田　古瀬とよめ子

夕しほにこきいつる舟のあしまより
聲をほにあけてかへるかりがね　肥後　坂本たけ子

うす墨の繪よりもましてうらかすむ
そらにきへゆくあまつかりがね　肥後　坂本道子

日の本をかすみとゝもにたつかりは
はなゝきさとにすみやならへる　伊豫　鹿野里子

いへつとにせはやと雁のおもふらむ
にしきかすみのころもきなして　三河　石川代志子

かりかねの翅しなれてかへるかな
かすめるつきにかけそのこれる　下野　壬生沼德子

今はとてなこり見おくるおほそらの
かすみかくれにかりかねのゆく　下野　下島木德子

ふるさとのこひしき友のおとつれを
かりにまかせてかへりことせん　栃木　菅沼止吉子

かりかねのなれしみやこを打すてゝ
いつこのさとにわたるものやは　下野　菅沼千代子

おほそらにたかくゆく雁しはしまて
こひしきともにつてをたのまん　下野　春野すみれ子

花くもるそらにまよふかゝへるかり
しはしやすらへなかやとはせん　出雲　岩倉より子

春衣も着ていま歸るらしなれし野を
きたにわたらふかりのひとむれ　伊勢　中村照子

かへる雁いさことゝはむふるさとは
こゝにもまさるはなやにほふと　越前　安田直子

せめてゆくかけたに遠く見んものを
うたてかすみにきゆるかりがね　東京　戸賀崎梅子

ふるさとの春におくれしとはかりに
はなを見すてゝかりかへるらん　東京　藤田いく子

ありあけの月おほろにてかへるかり
なき行くすゑも見わかさりけり　下野　瀬下喜代子

そらかすみ道まよふらんゆくかりの
こゑいつまでもきこゑこそすれ　下野　民屋信子

いまはとて咲く花のこしかへるかな
こゑをかすみのあまつかりがね　下野　大木知賀子

ふるさとの春をし戀ひてあふき見る
そらになつかしかへるかりがね　下野　佐藤文子

うはの空によまれさりけり雁かねの
かきのこしつゝかへりゆく文字　下野　瀬下知賀子

おなしくはみやこにそなけ常世にも
はるや立つらんかへるかりがね　下野　民屋嘉久子

白帆あけ影もかすみのたね／＼に
かちの音とうしかり歸るらむ　若松　川島謙子

ふるさとの家つとにやとはなの香を
つはさにこめてかりのゆくらん　奈良　澤田よし子

うら／＼と霞へたてゝこゑもるは
はなを見すてゝかへるかりがね　陸前　前田河千年

秋の庭

華族女學校教授 井上頼圀先生撰

亡友の墓に詣づ

天

熊本市東寺原町 田代綾子

花咲きにほふのどけき春は、去年もことしも變らねど、かはるは人の身にぞありける、げに中垣のへだてもおかで、共にむつみし久子の君、ことしはかしこにゆかん、何れにものせん、など、ちぎりしこと葉は、いまだ耳に殘れるに、君はまちにし花の姿も見で、あはれ花より先に散給ひぬ、あたらかぐはしき、御名こそのこれ、なつかしき御姿は、とこしへに、見まゐらすこと、かなはず、せめては、をり〳〵詣でゝさびしき御魂をなぐさめなましと、こひしき君の奥都城をとひぬ、見渡せば、立ならべる數々の墓石は、あはれ、いかなる人にやと、思ひつゝ、ゆき見れば、苔むせる、祖母君の御墓に、並びて、なつかしの御名は記されぬ、絶えず、詣づる人やあるらん、あたりは清く拂はれつる中に、もえ殘りたる線香の、二つ三つ見ゆるも、いと哀れなりや、日頃めで給ひし、くさ〴〵の花など、手向て、しばし、ぬかづくにも、君がありし昔しの忍ばれて、なつかしさも一しほなり、げにたらちねの御心には、千代萬代もと、末かけて、久子とは、名づけ給ひけんを、あしたの露と、きえ給ひ、返らぬ旅に出で給ふは、神も佛もゐまさぬにかと、うらみ奉るも、悲しさの餘りになん、折しも空かきくもり、降そゝぐ春雨に、さらぬだに、ぬれにしたもと、いよ〳〵露けく、ひとり、手向けし花のみ、よろこびがはなるも、なか〳〵にあはれなり、やがて、空もはれぬれば、またふり出でぬ先にと、つきせぬおもひをのこしおきて、いらへなき、奥都城に、又の日をちぎり、すゝまぬ足をはこびぬ。

地

長崎市新町十三番地 高田杉子

稻葉の山の峰におふるまつとしきゝ給ひてかへりきまさは、八重たつ霞はふかくとも、またもろと

もにわけいりて、櫻をかざしておもしろう、春のけしきをながめんものを、あはれ、かぎりなき遠き旅路にいでましゝ、しるしのいしぶみたてまつりたるおくつきに詣で、今をさかりの桃の花を手向て、おろかみまつる。わかれまつりしより、暗路にともしびのけたられ心地なんして、時めきし花の散るにつけても、ありし世のことゝも思ひいでゝ、けふ御前に告ぐる數々さへ、はては涙ぞ先立つになん、まことに學やの西東さへえしらぬうなゐらを懇に教へさとし給ひ、一日もおこたり給はず、大君の御恵の露が一をむくいまゐらせ、父の君、母刀自の御心やすらに仕へまつらんといそしみ給ひ、忠孝の御心あつかりし事など、しのばれて、松風のおとも、呼子とりのよふこゑも、かたり給ふらんおんこゑかときゝなされて、いとかなしく、みまへさりがたければ、かくはつゝけまをすになん。

呼子とり友よふこゑはきゝつれと

やさしきすかた見ぬそかなしき人

熊本市光琳寺町　日高かず子

ありし世には、床に活けて共に愛でにし桃の花あはれ今日は手向にと折りて、野中なる千代子の君のみ墓に詣でぬ、青み渡りし麥生、すゞ菜咲く畑道行くにも、賤の男に叱られて若菜つみしあたり此處かしこと思ひ出られ、春風さへいとゞみにしみてなむ。しるべがほに飛び行く蝶のあとを、夢路たどるとばかり覺えて辿りゆけば、見なれし松の一本二本立てる下に玉垣結びめぐらしたる、君が祖先よりのおくつき處なりけり。むす苔も露けき中に、新しき石碑うち見るより先づは袖ぬれぬ妾も共にいつくしみ給ひし祖母君と常盤の床ならべ給ふれば淋しき夜半の松風もよそにや聞かせ給はん、あなゝつかしと近づけば、我待顔の面影のあり〱と見ゆるものから言の葉のかよはぬぞかなしき、手向の水も花もいと淸く新しきは、たらちねの君のたえず詣で給ふならん、持來し花折添

へてぬかつけば過ぎにし事のみ偲ばるゝよ。かへり見れば三年の前なりき、君と東へ物學せんと出立ち、行末はうき事も嬉しき事も共にと誓ひ、同し窓に學び、同し家に起き臥して、勉め勵みつるは束の間にて、君にはやがて病を負ひ、おこたらんまでと本意なく國に歸らせ給ふを送ることゝなりぬるぞ、げに思へば長き別れなりける。夏休みには歸り來よ、秋風立たば上らなんと、かたみに逢見ん事をのみ、まちしが、ふりつむ雪に病も重りて、負ひ給ひし名の千代も、空しく、去年の春、殘の雪より先に消え給へるこそ悲しき事の限なりけれ。あはれ友の中の友とむつびつれば、小車の片輪とられし心地して便なき身となり、獨殘りて學ばん力もぬけしかど、たゞ君が志をつがばやと思ひかへしいそしみて、やう〳〵此月ばかり業を卒へて歸り來ぬ。忘れては歸る身を待ますとのみ思ひしものを、いたつきはおこたらずとも、猶此の世におはさば如何によろこび迎へたまはん今はしるしの文を誰にか見せまし、あなかなしきかな。歸らぬ事を青柳の糸くりかへし、其後の事どもつはらに聞ゆれば、日も暮なんとするに、今はとて涙をはらひ、墓のほとりに咲ける菫の花を君とも見んと摘みもて、答なき石碑に暇を告げぬれば、心からにや君が聲して呼び給ふ、同し思ひに名殘惜みてかと、ふかへり見れば、あらず、雲雀の落ちてふしどに入るなりけり。

長野　松澤まつ子

すみれの花は、變らぬ色に、咲き出でぬれど、獨り我がなつかしき友は、歸り來まさぬゝ。せめて心やりにもと、小さき花束つくりて、おくつきへとたどりぬ。

あはれ、君と妾は、宿世、いかなる、ゑにしなりけん、振分髮の昔より、一つ、學びの庭に、下りたちて、同じ師の君のめぐみのつゆにうるほひて、幾春秋を經たる、やよひの末つ方、諸共に、卒業のしるしぶみを、得たる嬉しさに、一日、手をたづさへて、野に山にあくがれつ。あはれ、櫻のかぐはしき名は、世にあげずとも、白菫の清き心もて、日を送り、雲井を渡るかりがねは、我等望むべきにあらざれど、ひくゝむつる、胡蝶の、如く、心ものどかに、むつびくらさんと。かたくちかひつ、ねぐらをいそぐ鳥の聲におどろきて、家路につきしが、あゝ、これぞ一世の別れなりける。

今更思へば、山の端に棚引しかすみは、友と世をへだつるを示せしにやあらん、くれ行く空に、なき渡りし鳥は、やがて、君とわかれの日を、悲しみしにやあらん。さるを神ならぬ身の、つゆさる事とは、知らず、妾は、其あくる日、程、へだゝりたる叔母君がり行きし口惜しさ。

つきぬ物語に、ひれもすくらし、夕べに、ひゞく鐘も、此世の無常を、告ぐるにやと、耳かたむくる折しもあれ。君が身に、つゝがありとの知らせは來りぬ。少かとばかりおどろきて、心も空に走りゆきし時は、あゝおそかりき、君はすでに、彼の世の人となりましぬ。あはれ／＼、心のまゝにとく咲きて、諸人をあくがらしめ、心靜にちり行くはなだにも、惜みて、歌ふみやびをあるを、我友は／＼、色も香も盛り待つ間の小夜嵐に吹きさそはれて、あはれ若ながらに散りにしを、誰かは、ねになかで、しのぶる事の能ふべき。

さはれ、君とちかひし言の葉は、春のめぐり來んかぎり、すみれの、さき出んかぎり、わすれざるなり。されど悲しきかな、友にはなれし胡蝶の身を、あはれともみそなはし給へや。

日はいつしか西にかたむきて、吹く風淋しき、松の梢に、わづかに影を殘すのみ。

いざさらば友よ立、ち上らんとする袖の下を、あはたゞしく、胡蝶一ツくゞりて、手向けし花のほとりに飛びゆく。あなゝつかしの亡き友のみたまかも。

大阪　桝田益子

月に村雲、花に嵐の響にもれず、無常の風は何處にもふき通ひて、うつせみの世のはかなさよ。あはれ悲しき我友、地下にねふります、懐かしの花子の君よ、如何におもほしてか、愛くしきかぞ色、

秋の庭

はらからを置て、親しきおのれにさへ、いとも／＼かく悲しき憂きめ、見せんとじたまふや、いはまくもあな悲し、うれたき極になん。天つみ神も憐み給らば、妾が述べんとする一言を、かく世にいます、愛つくしき友に通じさせ給ひかし。そも御身と妾とは、如何なる宿世の緣にかあらん、はらからといふも愚かにて、總角の頃より朝にむつび、夕に戯むれ、學舍にありては、姉とかしづき、妹と呼ばれつゝ、樂しくも秩つられて、春は吉野の花に浮かれ、夏は若葉涼しき下陰に、郭公の忍び音を尋ね、須磨明石の月にあくかれ、紅葉にしらむ小倉の峰の、錦ふみ分けては、棹鹿の聲をかなしみ、雪の曉、峰の松風ふきすさぶ夜は、靜けき窓の内に、春の木の芽の深き色香をもてはやして、嬉しくも年月を過しゝのみか共に笈を負ひて、都に物せし後も、一つ學の庭におり立て、螢雪を集めていそしみはげみて、今や漸く業成らんとするに及びて、如何なるまの神のおそひにか、ふと風の心地とて、打臥し給ひしも、日ならずとこそ思へりしが、爽ぎ給はで故郷にしも、歸り給ふと告げ給ひて、さま／＼に行末の事共語らせ給ひし、言の葉こそ今は、形見と成侍れ、戀しき雁の玉章に、そなたの空のみ打まもられて、うしろめたう如何にかおはしますらんと、氣も心もくづ折れて、侍る物から、神に祈り佛にねぎ申して、やう／＼慰め侍りけるを、思ひきや君不起の訃音、耳を貫きおなやと計り、打驚かれて現つし心も侍らず、絶ね入る計りになん、やがてひとの名殘も、惜しまほしうて天つ鳥の翅羨しう、思はる物から、遙けき道を如何にせん、袖もしとゞに、枕も浮く計り思ひ侍りけり。今日なん師の君に、ありし樣きこゆ侍りて、しばしの暇給り侍るにより、ぬさもとりあへず、やう／＼詣で來つるなりけり。あはれ手向にと捧ぐる、一掬の水、一炷の香華の薫り游くとも、はる／＼とみ前に詣ふで來て、君を偲ぶあつき涙の一點

と、あはれ愛させ給ひれかし、あな悲し我友、懐かしの花子の君よ。

學の園

美はしき心の花は咲きもあへず
とく散りにけりあたらなてし子

但馬　田尻保代

年頃頼みし友の、衣更着末つ方身まかり給ひて後は、何となう心うくて、折々御墓に詣づる外は、たれこめてのみ、春の行末もしらずてなむ。今日も詣でゝ、例の如くあたりうちきよめ、香花水など手向け、唱名などするほどに有りし昔の思ひ出でゝ、不覺に涙ぞこぼれける。

朝の露、夕べの煙、何れのがれぬ道なれば、如何でか百歳の命を期せん。されど幼き頃より、同じ學びの庭に生い立ちて、共に學び共に遊び、或は加茂川の清き流れを共にくみ、或は嵐の山の花、高雄の紅葉を共にかざし、又或時はかたみに手を取りかはし、庭の眞砂を照す月影ふみしだきつゝ、來方を告げ、行末を語らひ、かつはふる里をしのびあひたりしを、思ひきや斯も逢ふ時すらに後れ參らせんとは。

あはれ君は學びの道、裁縫の業は更なり、萬の事人にすぐれ給ひしかば、同じ學びの友どちはほめたゝへ、師の君の御覺いと目出たく、心ばへさへ、優にやさしうおはしければ、妾が拙きを捨て給はず、常に多病にして物事に後れ勝なるをあはれみて、手を取り袖を引き、樣々に勵まし慰め給ひしものから、かつ〴〵人々のしりへに從ひ得たりしも、全く君の厚き情にてぞありける。されば友とする人多かる中に、君と己とは殊にへだてぬ間にて、學びの屋をまかりてよりは一しほに、師の君とも姉君とも、頼み參らせしを、老少不定は世の習ひとかや、さしも目出たかりし花の蕾の、生ひ先こもれる身にして、早くも身まかり給ひぬ。あはれうれたくも悲しき哉、嵐山の花は來む春每に咲き匂へど、共にめでむ君はゐまさず、月は長へに庭の眞砂を照らせども、共にながめむ友はゐまさず、あはれ悲しくもうれたき哉、おのれ親なくはらからなく、今又力と頼みし友をうしなひぬ。歎かざらむとすれど、慕はざらんとすれど、せんすべしらに、涙を拂ひ胸を押へて、君が奥津城所とぶらへば、答ふるものは松ふく風の音のみにて、呼べとさけべとも、何の甲斐かあらむ。

東京　後藤ちか

月、輝りそふも、雲きたり、花、咲きそむるも、風きたり、木、靜まらむとすれども、風やまず、人まゝにならむとすれども、まゝならず、時に榮へ、時に衰ふ、まことに、これなん世の常なる、道長の榮華を極めたる、望月の缺ける事をも、なしといはむ。あ
あたのみ少なきは、世のさまなり、思ひめぐらせば、去年の春、野邊の庵に、花あつめ、鳥なかせ、霞の中に、ふたりして、忍びやかに夢路をめぐりし樂さも、今は一とせの昔なり、この年とても二人、朧月に、遊びしが、衣更月かゝりて、君ひとり、重きいたつきに、惱み給ひしが、片時早くもいねばやと、神佛かけて祈りし甲斐もなや、ひごと〳〵に重くなり、遂にかへらぬ旅路にかどでし給ひぬ。

飛鳥川、淵瀬常ならぬ世とはいへ、神の見すて給はぬにや、われは猶ほ學びの窓に文よめど、君は、もはや世の人ならず。その時、思ひの胸に、みち〳〵て涙の流も、せきあへず、それよりいたく世をはかなみ、三度の食事も、思ふ樣ならず、夜半も、やす〳〵ゐられで、時計の音、蛙の聲、いともあはれに聞え、晨の花、夕の月、流るゝ水の音、なか〳〵に、はかなき運命を語るべう、覺えて涙の種ならざるはなかりき。あゝ今となりては、泣くもせんなく、歎くも効なく、呼ぶも、

呼ぶも、いらふ音もなし、この奥津城もとに、君は今、如何になして暮すらむ、我が身は、千々にくだくる心地する、松杉ならでも、木立なく、ひるもをぐらき、このはか地、いづこの花か、二、三片、散りそむるあり、手にとり口にあてしかど苔の煙に、そはぬわれ、あまりつめたく思はるゝ。

札幌　山田婦美子

佐保姫の、衣の袖も、いとしめりがちなる、春雨のそら、打けふる、柳の糸も、軒ふく風に、亂れつゝ、兎角に、心も、むすぼれがちなるきのふけふ、思ひ出るは、去る日にみまかり、たまひし、友人にぞある、つゆけき、草の下かげに、獨りつれ／＼を、かこちても、おはすらむ、いさゝらば、訪ひなぐさめばやと、立出、ゆく、道の邊りに、去年の春、共に、花見せし、城山の櫻、三つ四つ美しう、さきそめしを、見てはいと忍はれしものから、亡き友の、心を、開く、よすがにもと、一枝手折、やがて、覺學寺となん稱る、菩提寺に、到りぬれは、寺の男の、案内して、新しき塔婆の立てる、墓の前に導ぬ、姿より先きに、親族の、人もや、詣でつらん、掃除も行渡り、ちりたに見ゐす、かくばしき、香の煙りは、雲の如く、たちおほひ、水さへ、備へありし、姿もたつさへし、彼の花に、一首の、

去年の春おなしむしろに見し花の
いまは手向となるそかしき

伊豫　浦尾やすを子

和歌を、手向け、暫し、回向の折柄、いづちともなく、ほうほけ經と、鶯は、啼きぬ。

世にいふ春の彼岸の中日なればにや、今日はみ空いとのどかに、晴れわたり、野も、山も、霞のとばりにおほはれつるこそ、をかしけれ。この頃の、あたゝかきに、綻び出でし、庭の櫻に來て、なか常には、いと興ありげに、啼く鶯の聲の、何となう、哀れにきこゆる事の、いぶかしさよ、けふといへば、もしや、亡き友の君の、みたまのそへるにはあらずやと、さうじ、さとおしあくれば、はやいづこにか、とびさりけん、なかずなりぬ、かくて、居間にかへれば又なく、其の聲前にもまさりてあはれにきこゆ、こは、けふかあすかは、なき友の君の、奥都城に、詣でんものと思へば、さ聞こゆなめり、ためらふべきにあらずと、やをら身支度して、香、樒、などとゝのへさせ、しもべひとり打したがへて出でたつ、ゆき／＼て、松生村なる、平塘わたりに、學び兒と見ゆるがみたりよたりづゝ、をちこちに打むれて摘草に、ふけれるさま、よそめにも、其たしさの、あふれ見ゆるなるを、學びこらの、心いかならんと、思ひやるにつけても、思ひ起して、うれたきは、亡き友の君が、このうつしよに、おはしゝころの事なりき、或年の春の頃、あたかも、けふのごとなるうらゝげき日、このわたりに、連れ立ちて、共に好める唱歌をうたひつゝ、よめな草、多くかたみにつみとりしかた、こそ、先きに、とつがめ、などたはれごといひけん事の、今も猶、耳に殘れるを、あはれ君は、昔のまゝにて、「散り失せたまひしことの、うたてさよ」、と胸は、はりさけんばかりとみにかなしくなり、かの草の上ならで、眞袖ぞ露に濡れまさりける、かくてとも知らぬしもべは、とく／＼と、いふもうるさし。かくて、菩提所瑞龍山には着きぬ、友の奥都城は少し小高き右手にありて、と見れば凹字のさまに七つ並べる左の端に立てるなり、そはゐりたる文字を見ざるも、その新らしきによりて知られけり、前にたてられたる花筒には、さき匂ふ、櫻の二枝、三枝さし挿みあるは、さまかはりて、あやしく見ゆ、これなん、君がめでたまひしを忘れたまはで、祖父の君の、まつられたるものならんかし、父君、母君、さては、祖母君よりもいと厚く、

愛の神な、そゝぎてはぐゝみたまひしは、げに、祖父の君なりき。今は、はや三とせの前とはなりぬ、高等女學校より師範學校に入りたまひしなりは、君のみからだ、いとすこやかにおはしき、さろに其師範學校に、入りたまひし後は、一寸の光陰をも、あだにすごしたまはで、たゞ人の、忍び能はぬ迄、學びの道に、いそしまれしによりて、其のしるし、いちじろくあらはれ、學びの業の、いと優れて、進みたまひ師の君、さては、友ばら、ほめたゝへぬものもなかりしこそ、なかなかに、あはれの種子と今はなりけれ、そは君のまたなく、いそしまれしぞ、病を得たまひしもとゐなる、あはれあはれ其の病のおもらせたまふや師の君より、ふるさとへ、やまひおもき旨の電報を發せられたり、こを受けし祖父の君は氣も狂はん計りに、打驚ろき夜を日につぎ、五十里にあまれる道を、ふみて行かれし時には、君はまだこの世の人なりき、されば、祖父君の憂ひいさゝかは、和らぎて、或日、ひそかに、師の君達に向ひて語らるゝやう家を出でんとするときに、羽織の紐、ふつと切れたりければ、最早かなはぬものならんと、思ひやり、これよりは眠ぬけたらむ如くなりて、歩みも、はかどらず、辛くして來りぬと、さもありけん、かくて君は祖父君祖母君たらちねをばあとに、殘し置きて、つひに、永き別れの旅に、立ちたまひぬ、今は、かの奥都城の下に、靜けく眠りませる友の君よ、君は多くの人のかなしみを、この世に殘してあのよにおはせば、又逢ふことの、かなはぬぞかなしき、こゝに、手向くる阿伽、さしそへし樒昔の契り忘れまさずば、快よく、うけたまへと、はふりおつる涙、ぬぐひもあへず、のべ終りて、ぬかづけば、いつのひまにか、みそらひたとかきくもりて、なりからなき出でし、山鳥の聲、いとかなしげにきこゆ、奥都城の上に、七つ八つあとなとゞめて、かぞふばかり、春雨降りそゝぎぬ。

雲州　岩倉より子

夕陽いつしか、彼方の、山に落ちて、殘むの光りいとあはく、汀に寄するさゞ浪は、さながら、黃金をあやおる如く、露蟲て、千鳥城かすかにみね、列をはなれし孤雁かげおぼろに、鳴く音いともあはれなり。

アゝ、君が宅の、高殿より、松江湖上の月を眺めつゝ、君と學の、合奏せしも昨年の今夜、花に、鳥に、月に、雪に、歌詠みかはせしも、

と二人。

此の、湖の水の乾るゝとも、君と、我れ、別れじものをと、契りし事もあだとなりぬ、君が玉章手に取りし時の驚き、病氣にて今は好める書も、禁じられしと聞き、取るものも取り敢ず、走せ音づるれば、遲かりしかりし、鈴の如き瞳は眠り、紅梅の如くなりし唇は、色あせて、鶯の初聲をかしと眞似られし、聲また聞かんよしもなし。

今は、斯る墳墓と成り終りぬ、君よ、我友よ、靈魂此處にあるならば、我捧ぐる此の香の烟に、幻しなりとも、彼の美しかりし顏ばせにて、昔の夢を談りてよ。

夕照次第に色褪せて、山黑み、野も黑み、墓傍に佇むは只我のみ、待て暫し歸る雁よ、汝は常世に行きたらば我一人、塵のうき世に泣くと彼の君に傳へてよ。

長野　小林よし子

學びの友どち、二三とつれだちて、匂ふばかりの春草、ふみわけて花つみに出掛けたるも、わけて親しきなつかしき、友うしなへる、われ、なんとなう、こひしきは、亡き友の事、さまざま思ひ出されてはなみるも面白からねば、そこそこいとまを告げ、みちを分れて細道たどりつ。

こひしき友の、墓へと入りぬ。まはりにめぐれる、老杉と、生い繁れ

る草見たるさへ、悲しさなおぼゆるな、まして、年はもゆかぬ、友の新しき石碑に土高く、草木そなへられ居るな、一目見て、むれせまりぬ。われ前より、人命ほどたのみがたき、ものは、なしとき〻居たれど、さほどに思はざりしに。

哀、今はじめて、そなさとりぬ。あたら友の、我より体まさりて筋肉ほれぐみも、たくましかりしな、あはれいかなる、無情の風にさそはれけん　去ぬる日、かりそめの病より、歸らぬたび路におもむきぬ。あゝ思もよらざりき、物ごと、すぐれたる君の、今頃草葉のかげにあらんとは。すぐ世いかなるゑんありたるか、われ遊び始めの頃より、學校に通ふ頃、朝な夕な手に手なたづさへ、春は花に遊び、夏は青葉のかげにくるひ、秋は紅葉狩、冬は雪見つゝ埋火に、手なかざし、未來な語りあふ、など、四季、いつもかはらで、むつみあひ、互にさそひ、さそはれ、末たのもしく、學びのまどに、かたらひあひていまが今迄爭言いひあひし事もなく、　去ぬる日も末の事まで話りあひて、共に此後も同じ學び舍に入らん事な期し、　兩人とも、父母の許しな受け、嬉さ限なく野に山に、したしくあそびし友の、あゝ今いづこ。草のかげにさぞや望の遂せられざるな、殘念にや思召し居給ふらんと思へば、心も消ねゆくばかりに思ほへて、思はず石碑にすがりて、泣きふしぬ。しばしゝて、心づきつゝおきあがり、心ばかりの手向花、そなへつゝ、空ながむれば、今しも日はくれて、塒のものすごく、折しも烏の友よびて、たのしげに、ねぐらにかへるさま、いかに、もうらやましう、我身のはかなきにくらべて、かなしくおぼねて、居たゝまらず、われしらず、　石碑の前にうづくまると共に今までせきとめ居し、なみだの今はとむべうもあらず、兩眼よりあふれて、はらはらとひざにかゝりぬ。

長崎　八尾いへ子

去年の春は共に花の下に遊び暮し、己れらもやがて學の業終へて御國の御爲め心の限りいそしみつゝ愛でたく花なも千年に匂はせばやと、かたみに行末の事共樂しうかたらひしに、時鳥のなのる頃たれこめさせ給ひしは、かりそめの御事と思ひしに、重らせ玉ひて醫のすべ盡きてかぐはしき花さへ咲きあへず、はかなくもかへらぬ數に入らせ給ひ、親にさきだつ斗り不孝の子はあらじと日頃のたまはせ玉ひしな、自ら背き給ひしぞわりなく悲しく覺ね來る。あはれ今日はかくれましゝ日に當りぬれば奧城の御前に詣で來る、されどらふたき御身も、やさしき御聲もきこね玉はず、したはしき御名なのみ記しまゐらせたる石ぶみのみぞ、　姿な迎へ顏に立せ給へるこそうたてけれ。學の道は勿論、歌よみ文かく業にも秀で給へれば鬼神なも泣かせつべき言の葉も澤なりしなおもひ出て打誦すればめでましゝ櫻も今日は御前の料となり、　御手習ひの淸水も手向のあかと變りはて、何事もいらへさせ給はねぞくやしき、露と共に打なびきて、かなしう我なあはれからせ玉はゞ、昔ながらの言の葉も匂はせ玉へと繰言しつる程に、　鐘の音は夕な告げて、いとはかなし、いざかへりれとやのたまふらん、雨さへ降りいでゝ淚いやましにければ。

なみださへあめとふりゆく夕ぐれの
かねのひゞきにぬるゝそでかな

肥後　佐々有鄰子

斷金の交友なる、橘香子のきみは、文よむことはさらなり、　畫かくことも、裁縫のことも、謠曲に仕舞に心なよせて、　多能多藝の人なりしが、去年の夏のはじめつかたより、　病ふしたまひしに、橘の花ちるころはいたくおもりたまひ、無情の風にさそはれたまひつれば、誰かれうち集ひ、葬式いとなみしは、夢とすぎて、今年の今日とはなりぬ。淚はかはかねど、紀念の石碑たてゝ、　手向くさに花たてまつるとて、

教の庭

みたまあらはあまかけりきてみそなはせ
いろうるはしきひめ桃の花

和泉 福原菫子

今日は空晴れ渡りて、日の光はあたゝかに、おくつきを照らしぬ。そこばかとなくかなたを見やれば、新らしき墓標の、田中島子之墓と、墨痕あざやかに記るされあるに、今更に胸ふさがりて足おもりしかど、斯くては果てじと自ら勵まして進み行きぬ。落花點々あたりをめぐりて、絶ゆ〳〵なる線香の烟、あはれに心細げなり。やをら手づから花立の稍々萎れたる花を抜きとりて、もてきし山吹のつぼめる花の枝を挿み塵など拂ひやがて前にぬかづきつ、嗚呼同じ里に生れ然かも同じ學びの庭にいそしみ、きのふまで、親しう同胞にもまして睦びかはせたる君とわれ、いかなれば此四月我れのみ業を終へて故郷にかへりこせしや。ひたすら夢にゆめみる心地ぞする、殊に女德備はりて將來望み深き君、われは只師とも姉ともたのみまゐらせしに、今はとをはにあふ由もなくなりぬるこそ、悲しき極みなれ、とくり返しては盡きぬ涙に袖を絞りぬ。邊りはいよよ寂げく漏るゝは只遠方に鳴きつゞく小鳥の幽なる聲ひとり、哀歌を奏するのみ。折から一陣の風頭上をすぎて、櫻の葉は、ばらくと卒塔婆を打つて袖にひるがへるに、驚ろき心づきて時も移ると涙おし拭ひて、家路へこそはつきにしか。

松山 上原のふ子

四山の墓地に、葬れる人なむ、ありし世は、いと〳〵したしくまじらひつるを、さきつとしとみのやまひにかゝりて身まかり給ひぬ。そのをりはおのれをまくらもとによびて、なにくれと家のさまさま、うみの子の行末など、さま〳〵にかきくときて、いひおかれたるか、今は只はかなき春の夜の夢となむなりにける。げに人生の常なき朝露のことしとはよくもいひつるものかな。いまこのみはかに詣てゝ、ありし世のことゝも訴へ聞ゆれは、只しろしの松風のみ、こたへかほに音たつるあはれといふもあはれなるぞ。いかにおほすらむ、土のそこには。あなかなしかし。

遠州 飯田せい子

菅の根の長き春日もはや西に影おちて、静にひゞく鐘の音に、我身の悲しささまりて、思ひ出すや我友よ、しん子の君のねむれるおくづきに花を手向けんとて、美しくかをりも清き白桃の一枝たをりて、みはかをさしていそぎけり、今われ友の墓に詣でんとて、いそぐ道なれどもやがては我か身があの世にたびたつ道とならんと思へば、げにはかなき人の命や、暫くしていつか我身はおくつきのまへにいでぬ、見ればながの年月、雨風にさらされて、はや苔さへ青々としてみるも涙のたねなりき、やがてたづさへ來りし花を、筒にさしそなへぬ、あゝおもへばしん子の君は、わが幼少よりの親友にて、村の小學校に通ふ頃より、互に手をばかいつらね、春は花見、秋は月見と諸共によろこびのこゝろはたえざりき、かつて都に物學びしその折も、ともに父母の御ゆるしを得て、ふるさとをいでしが、そのかひもなく、君には程なくいたつきにかゝらせ給ひ、療養のしるしなく、かへらぬたびにおもむかせたまひぬ、生者必滅會者定離世の常とはいひながら、あはれはかなき人のよや、花は散るともまたさかん、日はくるともまた照らん、されど我友は千年まつともかへり來らず、思ひ出でゝは思ひ入り、いよゝ涙はますかゞみ、惜しくもたちあがりかへり、路につきぬ、折しもふきくる春風に、おちくる花の二つ三つ我袂にふれぬ。

肥後 德永廣子

四方の山さかりににほへる櫻花の、うるはしきに、心ものどけくいとたのしげにながめつるに、いつのまにかは、ふりかゝる春雨のために、そよふく風のまに〳〵に散はてゝ、朝夕のながめさびしき

ふゞいに、すぎし春わが亡き友とあなたの山のはにさきみてる櫻にあそびしなりしも、某のよめる櫻の歌を、ふかくこのみて短册にかきつられ、花の下枝に結びこよなき樂事とおもひてあそびしに、いかにうき世のならひとはいひながら、いまださきもいでぬ、つぼみの友は、嵐のためにちりうせぬ。長閑けき今年の春四方の花うるはしくさきかへりつ、あれど亡き友のいきかへらんよしもなく、只ひとりあなたの花をみるごとに、ふかくおもひにしづみつゝあれば、今日しも空うらゝかにはれぬるを、幸に、さきの盛の花一枝、手をりて亡友の墳墓に詣でぬ。いかなる人の詣でしにや線香のにほひかくはしく、花さへいとうるはしきを手向あれば、ゆかりの人の詣でしならんと、妾も一枝をたむけて、過去のことなど生前にかたるがごとくくりかへしぬ。亡き人のかたみとなりし水莖のあとおもひいでゝ、涙にむせびありけるうち、いづこよりかふき來し春風に、たむけし花かあらぬか、かをりくれば、ゞおのづから亡人のこたへしこゝちして。ひとしほなづかしく。かなしきに堪かね。しばし時をうつしてありけるか、近寺の撃鐘に、おどろかされて家路にこそつきにけれ、

信州　内山　けさを子

暮れ行く春の夕まぐれ、山根にひゞく遠寺の鐘の音きれ〴〵に聞ゑてそゞろ身にしむ、伏屋をめぐるやれがきに、棲むなん虫の音も心ありげにいと悲し、あはれあすはゐれてもさめても、忘られぬ、したしき友が神さり給ひし日にそありなん、雨ふらんとも風吹きすさばんとも、詣でなんと、思ひつゞくるまに夜はほのぼのとあけはなれ、軒の雀も宿立ちぬ、我もいざとく後れじと、去歳植ゑし桃の花、まだつぼみ多かれど、一枝折りて出で行きぬ、道すがら田畑に匂ふ花は、今ぞ盛りなる、黄なる蝶白なる蝶、何れも仲善く面白げに遊びつどひまばゆきまでに日はてらし今日のこの日にまして心あひの友どち、打かたらひ遊びなんには、さぞかしたのしからん面白からましなど、さまざまにありし昔をおもひいだされ、やうやうにつゆうちはらひあゆみを進め、松杉茂る畑路をたどりたどりて、墓石のまへに着きぬ、先立つものは涙のみ、昨日にかはる今日の樣のあさましく、君が床しき面影も消へうせて、今日この魂何處にやどるらん、幾久しく交し友垣の中にも、君のみそはらからともたのみつるに、今さら我を振り捨てゝ神さり給ひしかあなかなし、をりから何處よりか時ならぬ梅花一片我袖に止まりぬ、あゝ亡き友のたまものか悲しがうちにも暫しうれし、千代も八千代も變じとちかひし袖もほころびて、道二すぢに君は歸らぬ旅路へ行き給ひ、我はこの世に歎く身となりぬ、文書知ぬ我身にしあれば、思ふにまかせずあやしき言どもかいつけあたら紙のけがされぬらん、されど心ばかりは鬼神も大男にもつゆ劣じ、あはれあはれ、天地の神我が心を察してたまはれよ。

松山　梯　たけ子

あはれ忍びても、はふり落つる涙の雫、止むるによしなきは、何故ぞ、末の松山すゑかけて、かたみにかはらじと、ちぎりにし友の、さいつ日はかなくも、此世を去り給ひつればなりけり、されど、いかになげくとも、詮なきわざなればとて、強て心を引立てつ、若し慰むるかたもやあらんと、庭の面を打ながむれば、あないつのまに咲き出でけん、垣れの白薔薇の花いと美しう、淸き香を送りて、匂ひ出たるを、見るもなか〳〵に涙の種とぞなりけるよ、さるは亡き友の此上なう愛でたまひて、濃かりし黑髮の佛蘭西髷に品よくかざしたまひしことを思ひ出づればなり、まいて、此の春も咲きなば、一枝たまひてよ、とのやさしき言の葉は、今なほ耳底ふかくのこれる心地するを、あはれ君は早や。

今は戀しさに、堪へやらで、そと枝ぶりよきを手折りて、折戸お

しひらき、裏道づたひに、歩みを運びつゝ、やがて君がおくつきのほとりに、たどりつきぬ、あたりはいとものさびしくて、そゞろ無情の感に堪へざらしむ、忍びて新しき墓標の前に跪き、あつき涙と共に、うや／＼しく手向けぬ、あゝ此の薔薇の花よ、墓前にさゝげよとは、のたまはざりしに、あなうたて、浮世の嵐はなどてかく行末たのもしき蕾の君を、散らせしぞ、夢かと思へども夢ならず、うつゝなるはいと／＼うれたき極みなるを、まいて朝な夕ないつくしみ給ひし、かぞいろの君の御心のうちや、いかばかりならんと、おしはかられて、いとかなしきかな、あはれなつかしの君よ、今一度世に出でたまひてんやと、思はず聲を出して叫びぬ、されど、何のいらへもなくて、淋しく立てる、一夢蕾女之墓、

湧き出づる、千すぢの涙を袖に湛へて、しばし墓前にうつぶしゝまゝ、なほ過こしかたをのみくりかへしつゝ、なげきに沈む折しも、おとなるかたにて、姉さまよ、こゝにおはせしやといふ聲するに、ふと心づきて見かへれば、いつのまに來りつらむ、勇ましき筒袖姿の弟なりき、いざゝらば歸らましとて、涙おし拭ひて名殘惜しくも、立ち去りぬるも、ゆめの心地せられてなん。

兵庫　泉　さい子

春の野草を、ふみわけて、わが友、久子の君の御墓に詣でぬ、思ひいたすさへ、はかなきは、人の身の上なるかな、花は年々同じかれども、人は年々同じからじとは、むべなるかな、去年は、此ほとりを、君とともに、櫻かりして、ちりゆく、花の、命ををしみ、おほろ夜の、月を、したひしも、はや夢の間に、一とせの、たち行て、ちりにし花は、もとの如く、梢に咲いて、月はむかしの姿のまゝ、空高く、花にかすみ、いつれか、むかしに、かへらざるはなし、あゝ、はかなきは、人の、命にこそ、いかに、かはり行世のならひ、とは、いへ、花恥かしき君が姿は、土と變り、幾百の、志はかばれと、ともに此こけの、下露と、消はてるか、淺ましき世のありさまかな、思へば四とせのむかし、君が雄々敷志を立給ひ、遠きみやこに、のぼらせ給ひ、雪に、螢に、つとめたまひ、學び舍にしては、光々數、名の高まりて、行末、たのみある、人とし、いへば、先づ、君をして、たのみしとかや、もれきく姿の、うれしさは、いかばかりかは、あゝ、この、うれしさも、つかの間にして、積年の苦心、思なかばの春の比、やまひてふ、大敵の、君をして泉下の、客とならしめぬ、あゝいかに神佛のあらましかば幾春秋を、友にしたる、無二の友の姿がうつそみの世に殘りて、君が立にし、御志だに、世に、立しめることの、まかせぬ、ことこそおぞましけれ、かく折毎に、墓前に、ぬかづきて、水をさゝげまつる、はふり落るなみだとともに、香花をたむけ、わが心、いかにあはれと、みそなはせよ、けふよりは花鳥雪月何れか、永しへに、君を、忍ぶ、たれ、ならざるはなし、そはわが、生世の、たのしみと、せんなど友が生世のありしことども、くりかへし、人の、世の、はかなきをかこち、ひたすら水を、たむける袖に、いつしか、花くもりて左岸の櫻二ひら、三ひら、ちりかゝり、春雨の雫さへわがゑりもとにふりかゝりぬ。

東京　山本梓子

別れは逢ふのはじめとか、たゞかりそめの道ならばこそあらめ、世を隔てたる別れは又あひ見むこともかなはさりけり。烟のうちに面影見けむ、故ことはしらす、思へば去年の秋の始、露よりもげにはかなく消にし我友のうへよ、忘れかれては、夜半のゆめ路に通ひしも、いくたびぞや、ましてきのふけふ柳櫻をこきまぜし都の錦もあやにに、花や蝶やといそぐ人々見るにつけても、あはれ一とせの昔の春は、諸共に野山にあそび、こむ年も必ずやなど、

らぎりしな、今はいかに、苔の下にも思ひつるやとて、紅の霞もちりもたちまとふ、ちまたをよきて、片山里木立ゆゑある寺の門を入りかのおくつきなことゝひぬ、あたらしうきざみなしたる石、此頃こそはたてられけむ、別れし秋も只今の心地して、しのびもあへず、末の露もとのしづくの、おくれさきたゝむとは、かけても思はさりしな、まなびのまどの月花も、共に見る人なければや、ことしはいと淋しきに、今一度うつゝのよに立かへらせよといへど、答ふへくもあらす、いとかひなし、手向の水と、ともになかるゝなみだのみ、とゝめかたくて、とへどこたへぬ口なしの色によそへて、さゝけし山吹一ゑた露頭けなるも、わか袂にことならで、

山吹のつゆそふこけのふかみどり
かはらぬものはなみたなりけり。

肥後　坂本竹子

哀れ惜きかも、けふは我か友の某が、去年の春身まかりし忌日なりとて、親類家各、我も相伴れて、御墓に詣て、あかの水を汲み懸け、香を捧け、花を手向けて、御靈をも慰めんとて、有し世のことさまを、打口說きて、おろかみなけき打臥しぬ、わきてかなしきは、幼き時より學の窓を同くし、裁縫の道をもひとしく踏み習ひて、春は花、秋は紅葉の折〳〵に、樂しみも、苦しみも、共に心も睦みおりしか、去年けふはかなく空もかき曇り、無情をさそふ春風の、比も彌生の始めなりしかば、山〳〵は花咲き亂れ野邊は榮種に打笑み、胡蝶も狂ふ皆人の心ものとかにうら〳〵と、君もありなは花も咲き、實も結すぼふるころなりしも、不幸にも不運にも、はかなき嵐に誘はれて、惜しき命も行く水の泡と消へつゝひた道の歸らぬ道に旅立の裝もせすに、樒の實の獨りぬけ出て、玉章の音も通はす二度と、逢ふよしもなき常世なる、彌陀の淨土に極樂しぬまさぬ事とは思へとも、わきて悲しきわらはは、千々に心をくたきつゝ、思へはくやしとなきしづみ、胸打さけひくるしくも、うれひなけきて、空蟬のさだめなき世のあはれさよ、人生僅か五十年、其の年月もをへなくて、かゝる草葉の露と消へ、はかなくりし友の跡、吊ふものと夕暮に、いと物淋しく吹風に、散り行く花の哀さよ、我か身もむべにあはれなるかも。

東京　椎野秀子

谷の戸の鶯は春ごとに音づるを、軒端の梅はかはらぬ色に咲きいでぬるを、あなゝつかしの花子の君には、いかで音づれ給はざる、君がやさしきいつくしみ、なさけこもれる言の葉を、思ひ出てはそゞろ昔の忍ばれて、悲しさやらん方もなし、已れせめてもの心やりにと、咲きにし庭の梅か枝二ゑだ三ゑだ手折りて、程遠からぬ谷中のおくつきにとたどりぬ、長閑けき野邊の春けしき、道すがら招く川添ひの柳のかげも、何となう面白しと見んは心がらにこそ、思ひに沈む我が身には、見るものきくものみな涙の種ならぬはなく、露しげき野邊の細道を、千々の思ひにかきくれつゝ、やう〳〵にして、み墓のほとりにとたどりつきぬ、見わたす限りの古墓に交りて、新らしきものゝあるは君が御墓なりや、しるしとたてる椎の木を、知るべにやをら立ちよれば、あたりは靜かにて人もなし、あゝなつかしき花子の君、御身をしたひて來つるものを、呼べども更に答へなし、たゞ音なふは、椎の葉の風もなきに、ひら〳〵とふたひらみひら散り落ちて、墓の上と我が袂にかゝるのみ、あゝ世にはかなきは人の命なるよ、おのれ數多き友はあれど、そが中にいとも親しきは、君をおきては誰れあらし、思へばふり分け髮の、未だ西も東も分たざりし頃よりして、同じ學びのまどにともなひ、おぼつかなくも讀みかきの業をおぼえしより、やう〳〵年たけては、いやまさりにまさりゆく親しさに、互

にはげみはげまされつ、わらはに二つ年たけ給ひし君の、姉上ともたのみまゐらせて教をうけ、君にも妹とおぼして、へだてなくいつくしみ給ひたるうれしさ、學びのひまの折り／＼は、共に手をとり引きつれて、あるは長閑けき春の野に、若菜をつみ、あるはすゞしき小川のほとり、岸の柳の下かげに螢かりし、さては葉月のつきのあかき夜に、共にめでにし敷島の歌のまとひ、何れも二人ならではとちかひつゝ、行く末ながくむつみくらさんと、ちぎりのしもを、あゝ思へば皆これはかなき夢となりしぞかなしき、今もたゞかたみにのこるは君のうつしゑ、みなさけこもる文のかず／＼は、わが手箱の中にのこりたれど、これはた出し見ることに、うたゝ涙のもよふさるゝをいかにせん、あゝいたましきかな、化子の君よ、いかで御身はとく此の世を去りたまひしよ、あゝ恨らめしきは去年の秋、ふと風の心地とてうちふし給ひしがもとにて、日々に重り行きたまひしいたはしさ、名たゝるくすしの湯藥もその甲斐なく、たらちねの君のあつき御みとりも、そのしるしなくて、あはれよみぢの人となり給ひぬる、やさしき君の人となり、才智にたけておはせしかば、よろづのわざにすぐれたまひぬるそが中に、わきて秀でし繪畫のわざのゆかしさ、師の君をもおどろかし給ひつるものを、かゝる巧手も其甲斐なしや、あゝ友にまじはる君の信義、常にわらはに注意し給ひ、父母のため身を大切にせられよとの言の葉、打ちまもりたるわらはの身は、かくて事なくすこやかなるに、君はなどかくはゆき給ひしぞ、思へば／＼つきせぬなげき、彼を思ひ之を思へば、そゞろかなしうてはふりおつる涙は、草葉のつゆよりいとしげし、かくてはならじと氣をとりなをし、いかに君よ、此の花は日頃めで給ひつる我が庭の梅が枝なるよ、わらはが心うけ給へと手向くれば、心ありてや、ひら／＼と、散りかゝりたるも哀れなり、折りから日もいつしか西に傾きて、入相告ぐる上野の鐘の、耳にさしあてたらんやうにひゞき渡るに、おどろかされ、ふと見ればあたりもいとしづまりて、小暗くなりぬる、われながらはかなき思ひに、かきくれたる事のはづかしく、いざさらばと、わかれをつげてかへりないそがんとすれど、いとゞ名惜りのをしまれて、うしろがみひかるゝものを、かくてはゝてじと露けき袂はらひつゝ、おのが家路につきぬ、

肥後　田代艷子

去りぬる、やよひの末つがた、花は笑ひ、鳥はうたひて、世は春なるに、愁ある身は、秋にもまさる、うらかなしさ、日はうらゝかに眞面を、てらせど、心の曇り　、晴れもやらす、のどけき春風も、身にしむ心地して、流れは清き、白川の堤にそひつゝ、なつかしき露子の君の、眠りぬませる上河原墓地へと、たどりゆきぬ、只見るまつ杉の大木、生ひ茂りて、晝尙くらき、木の下かげに、新しき墓標の、見ゆるは、いはでも、しるき、我友の奥津城なりけり、おとなへば、松ふく風の、音のみさびしく、たが手向けたりけん、白桃の清き色香を、はなちつゝ、君が御墓を守りがほなる、いとあはれなり、あゝ昨日までは、もろ共に、文の林に分け入りて、互に助けかはしつゝ、花のあした、月の夕べも、君なくてはと、思ひ居しものを、今は早や問へば答ふるまつの風の苦むす墓石にむせぶのみ。先づ水手向け、花さゝげて、ぬかづくまでも、なつかしの面影、ありし世の、事ども、千々に思ひ出られて、とゞめあへぬは、せきくる涙になん、去年の子の日に引し姬小松を、君と己がよはひになそらへんなど、打かたらひて、共に植ゐにし二本、今尙ほ我庭にことしはいよ／＼色まして、何れおとらず、榮へぬるを、思ひきや、ちぎりし人は、空蟬の、此世の外に、ましまさんとは、なか／＼に、今にかたみになりしぞた

思へば、限りなくこそ口をしけれ、あはれ、むばへは、優にやさしく、葛の葉も、もろ人に、立まさりてありしを、あたらしや、松の葉の、ちりはせずして、ながらの橋のながらへ給はましかば、行末はあはれ女の、かゞみとも、なりたまはんものを、月に村雲、花に風、げにあやにくの、世の習ひや、など、つくづく、はかなき、くり事を、思ひつゞくる折しも、ふとなつかしき聲の聞ゆるに、打驚けば、大空高く、聲のみ、のこして、常世にかへる、雁の一つらなりけり、友にやあるらん、翼ならべて、ゆく雁がねの、いとうらやましうて、見送るかなたの山の端に、はや日もかたふきそめぬ立田山おろし、一しきりして、立のぼる線香の烟、おぼつかなげに、とうとうたる、白川の、水音は、いと物さびしう聞ゆ、あな時移りぬ、何時まで、ありとも名殘はつきじ、家にはたらちねの、さこそまちて居給はめ、いざ歸らんと、立出つれば、墓守の子にやあるらん、十ばかりなる、女の子の、素足にて、幼き兒を負へるが、せんやうの、いぶかしかりけん、あやしげに、つくづくながめ居たる、心つかざりしや。

山形　玉生照子

生者必滅、會者定離と、佛者の誨へ置きしも、思へば宜なる哉。抑も御身と、わらはとは、振分髮の昔より、共に花摘み、蝶を逐ひ、雛遊びの飯事にも、片時離るゝともなく、稍長じては、諸共に學びや通ひの行戻り。手を引き、袂を連ねつゝ、知らぬを尋ね、知るを敎へ、實に眞實の同胞とて、斯迄睦むはあらじとて、師の君友の間にも、噂の種に登る程、親しかりしに更に又、鄙の學びの事終り、都に笈を負しよりは、親姉妹さへ、遠きより、互にたより、頼まれつ、憂もつらきも、なぐさめて、世に棲む限り、離れじと、誓ひしものを、あなうたて、去年の秋より、かりそめの、病の床に臥れしより、我は悲さやるかたなく、寢食も忘るゝ迄にみとりしも、其甲斐もなく、風誘ふ桐の一葉の果敢なくも、散りて歸らぬ旅にしも、立れしよりは更に又、能なき小舟、翼なき鳥にも増る悲しさに、只何事も打捨て垂籠てのみ、ありしより、人皆祝ふ、新玉の、年立返へる壽言も、昔しをのみ、忍びつゝ、明し暮せし、昨日今日、何時しか春も廻り來て、散にし花も又更に、梢にかへる、時なれど、歸らぬ君を、如何にせん、心浮れば花も憂く、鳥もとも音に鳴く心地して、詣來しおくつきに、手向は盡きぬ涙のみ、幽明道は隔つとも、通ふ誠は君こそしらめ、枯では果ぬ秋草の後れ先だつ理も思ひ碁にし入相の、鐘に無常をつげ渡る、時しもあれや、おくつきの、傍にたてる梅が枝に、花に遅れし鶯の、法のしるべと、法華經の、聲もかすかに、殘しつゝ、巳がねぐらに、歸り行く。

大分　稲光敏子

舊暦三月三日上巳の節句とて、紙もて作れるひな、あるは愛らしき家具のるゐなどさまざまの物あまたならべ、今日は昔に立ちかへり、心もいとゞをさなびて、日頃親しき友どち三人四人打集ひ、たのしくひなの前にてをかしき業なとしつゝあれと、何やらん物たらぬ心地のせらるゝこそ、げにげにうべなれ、去年の冬はかくならせ給ひし何某の君のみ一人、けふの此たのしきまとひにもれ給へるにこそと思ひ出れば、とみに此たのしきまとひの物うくなりて、かの君のおくつきに詣でんと友どちをそゝのかし、ひなのそなへ物取りおろし、軒端の桃花も取そへ、あるは線香、あるは手向の水とりどりにそなへ、物たつさへ、我屋より程遠からぬ友のおくつきにと思ひたちぬ。なき友の我等をまち給ひてか、塚の上なる靑柳風もなきに、いみしうこなたを打まねく見ゆ。靑毛氈しきはへたらん長き參生のかなたこなたに咲き亂たる菜の

教の庭

花に、白黄の小蝶いと得意げにまひ遊ぶ、麥畑のうねの小道をたどりゆく程に、やうやくおくつきの前にたとりつきぬ、君が遠つみ祖をはじめ、母君のみ墓はいと年ふりて苔さへむし、石文はゑよむべうもあられど、そが許に立てる新らしき卒都婆こそ我なつかしき友のやすくとこしへにねむりまし、處なれいざと立よりたつさへ來し花は筒にさし、さま〳〵のそなへ物なとしつゝ、とも〳〵にありし昔のことゝもかたりあへば、涙は手向の花のうへに、はら〳〵と落つ。

みぎてにつなぐ海士小舟、やがては浮世の海にこぎ出づへき我身、思へば世の波をうちすてゝ、とうくにねむり給ひし君が身のさてともうらやましき、我はひたすらに、君が御あとしたひ、やがてまたかの世にてたのしく御まちはりせばやとは我が束のまもはすれぬをながら、いかにせん、人のほだしいまだたにさるを。いつまでかくてあるへきも、うらみはいよゝまさるのみにて、名殘のつくる時のあられればいざと思ひたちかへさにつきぬ。いつのまにかあたりは早小くらく、ねくらにかへるむら烏、入相つくる鐘のねにおくつきの森見かへれば、塚の上なる早咲きのひがん櫻の二ひら三ひらちりそめて、家路へいそく里のはらべらのひなうたや、駒の鈴音いとかすかなり。

麻布 植村梅子

庭の枯木の戰ぐ風、ざはざはと、近く流るゝ小川、遠寺の鐘は諸行無常の響、庭の柳や、垣根の草も、時を得顔に芽をふきそめて、梅の小枝に可憐の鶯の囀る、何れ長閑なる春のいとゞもの悲しく覺ゆ。噫、君の世にゐ給ひし折、春の花あるは、摘草に、夏の螢狩に、秋の紅葉に、いつも、秋をつられし其時の面白さはいまだわすれもせず、あゝ、君はかくもしたしき友をとゞめおき、すげなうもはかなく露と消ゑたまひしか、あゝ君よ草葉のかげにてあはれとも妾をおぼしめせ。折しも遠寺の鐘はいかにもあはれにきこゑあたりの柳も物悲しげにうつむくに、倚さら淋しくおぼへ、おぼへず、目には玉のつゆのやどりぬ。

肥前 紀内茂子

未だ咲きかけの山吹、二三枝手折り、友の御墓にたむけんと思ひて家を出づ。日はうらゝかに照しつゝひばりはのどかにさへずり、温き春風はそよ〳〵といと心地よく吹き・少女のすみれたんぽゝをつめる景色に蝶々は浮き立ちて、舞ひ遊ぶ等、この有様を眺めつゝ來るまに、早や我が身は友の石碑の前に立てり。思へばその昔、君と我とは無二の友にて花にたはむれ、月にあくがれ日毎にしたしみます内に、天は何故かく計り仇なすや、友は去年の秋かりそめの病もとゝなり、無情の風にさそはれ、はかなく朝の露ときゑ失せて草葉のかげにねむり給ふ。世に我が身程、不幸なる者いづくへあらん。幼けなき時母に死に別れ、又一人の友と別れし悲しさ、花は咲けども、友は再び來る事なし、如何なる前の世の約束にやとそゞろに涙は落ちけり。やがて日のくるゝに驚きて友に別れを告げ、そこを立ち出でけるに、早日はくれ果てゝ、月影おぼろに我が身をてらしぬ。

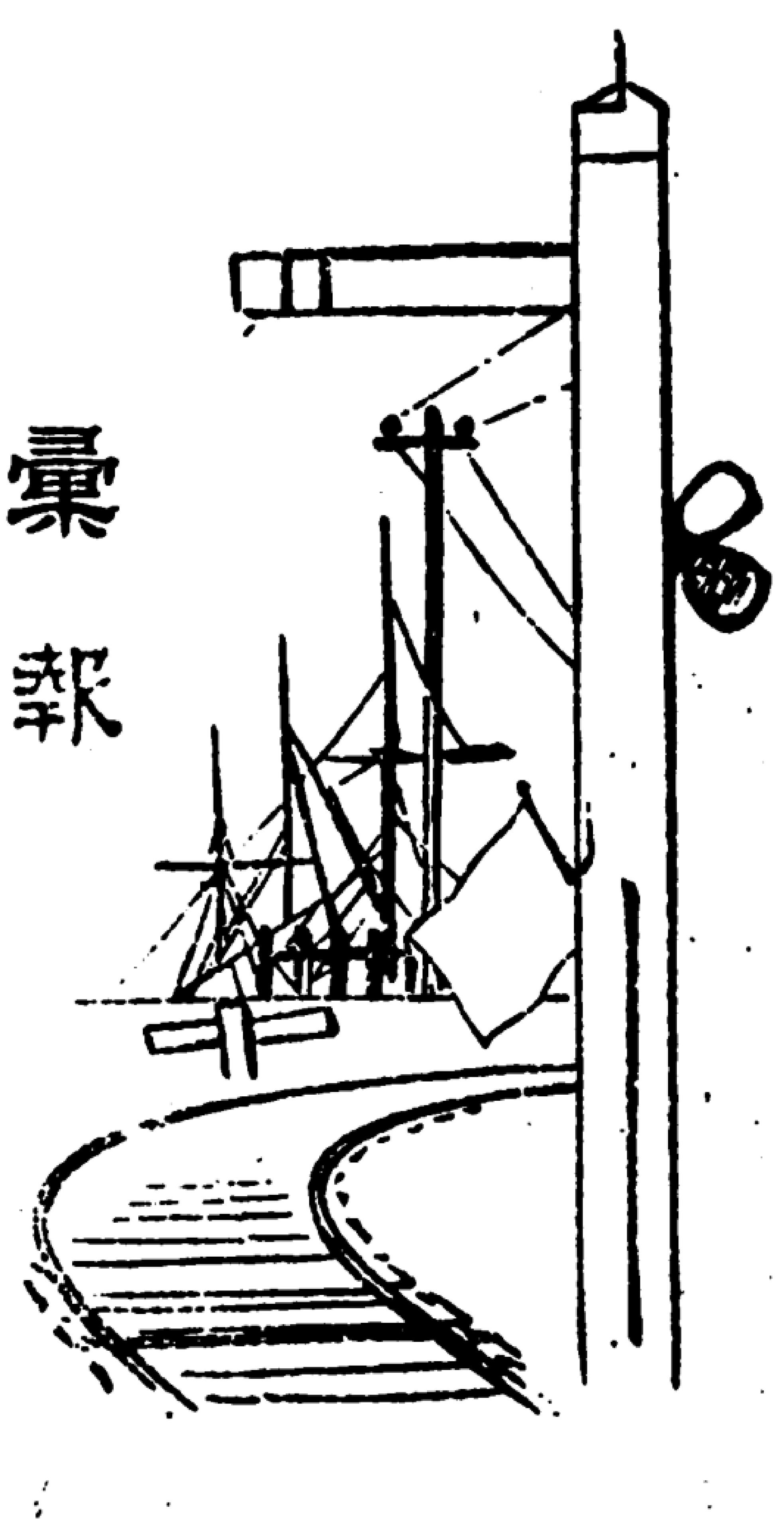
肥前 川崎ふみ子

月にむらくも花に風散りてはかなき世の習ひとはいひながらこれまで同し垣内の友それならで同じ窓の内にて共に有がたき師の教をこうむり遊歩場にては手に手を取りてさま〳〵の遊びをなし朝夕共になれにしたま子の君は數日より病ひの床に打臥せられ途に藥の効なく過ぎし二日を此世の別れとして彼の世の人となり給ひしこそ悲しとも口惜げれあはれはかなきは人の命なるかな嗚呼たまこ嬢よ靈あらは日毎教の庭に來りてたのしく遊ばれよげにはかなくなり給ひしは天の仕業にやあらん又命のかぎりにやあら

んかれて姉君には年若の御身にもにさせ給はずいと物事にまめくしくおはして其正直に心廣く之より進んで高等女學校にまで入學せんとの御ふんぱつ成りしに其望をも遂げずいつしか無情の風に誘はれ給ひてはかなく歸らぬ旅の人と成り給ひしこそいとかなし凡そ何くれのなげきはあれど友に別れつるばかり悲しき事はあらじ別れてより早や十日餘となりつれど日をふるにつけ亡きたま子の遠ざかり行くらん心地するぞ悲しきかぎりなる嗚呼あはれなり。

大阪 **博覽會見物**

記事多くして紙面餘白なきにより次號に讓る御諒恕を乞ふ



○觀艦式　豫て仰せ出されし如く　陛下には本月十日神戸沖にて觀艦式を擧行わらせられたるが此日朝來珍らしき濃霧にて咫尺を辨せざりしも　陛下がメリケン波止場に御着頃より漸く霽れ亘り、午前九時卅分　陛下は御召艦淺間に乘御、同時に碇泊の各艦艇一齊に皇禮砲を放つ、十時半夕霧艦の先導にて淺間は徐々行進を始め供奉艦宮古千早之に次ぎ先づ第一列と外國軍艦の間を過ぎ轉じて第二列第三列の間を通過し豫定の所に投錨すると

同時に觀艦の式終了す、式に列したる艦艇は敷島外六十三隻にて實に未曾有の壯觀なりし由式後陛下は淺間出雲二艦に於て拜謁を賜ひ優渥なる勅語ありたり、此日神戸港內は拜觀の船にて充滿したりといふ

○女子高等師範學校卒業式

去月三十日午前九時半より擧行せられまづ唱歌(皇后陛下御歌みがゝずば)の合唱次に本科選科國語漢文專修科附屬高等女學校各卒業生に卒業證を與へ次に唱歌(おもへばはてなき)高嶺校長の告辭朗讀菊地文部大臣の祝辭朗讀各科生徒の謝辭あり唱歌(はてしなき)を以て終りたるは十時四十五分なりき極めて短時間を以て極めて嚴肅に式を終りぬ來賓には濱尾前文部大臣伊澤修二津田梅子氏等を見受けたり卒業生は文科廿六名、理科十九名、技藝科十九名、撰科(文)四名、(技藝)一名、國漢專修科三十六名、附屬高等女學校卒業生四十五名なり本科卒業生姓名左の如し

◎文科卒業生

千葉　五十嵐しづ　東京　飯山ヲン　靜岡　林玉子
宮城　橋本ひさし　香川　桐榮キヨ　長野　大岩のぶ
山梨　渡邊マセ　大坂　上總とみ　滋賀　高橋きり
東京　高橋みどり　千葉　高木なみ　山口　田上タケコ
福島　中川いと　山形　中山せつ　兵庫　打越ふじ
奈良　國栖ハルヱ　新潟　町田きよ　長野　松澤とく
島根　小泉チヨ　奈良　小林ふじ　富山　赤江よね
千葉　秋葉せい　長野　宮崎もと　神奈川　宮本てる
東京　清水しげ　和歌山　鈴木久

◎理科卒業生

山梨　今澤フミノ　秋田　石橋ツ子ヨ　熊本　富田ヤチヨ
福井　木森國　千葉　和知テル　大分　渡邊千代
大坂　高橋貞　鳥取　高田芳女　富山　田中八重
埼玉　村越じう　石川　山田ハル　千葉　山本けい
山形　小柳ゆき　富山　佐藤セン　岡山　木村茂枝
北海道　平沼美加　岡山　平野ミヨ　新潟　杉村マツ
兵庫　鈴木ため

◎技藝科卒業生

富山　飯田サキ　和歌山　芳賀きぬ　京都　西里要
香川　大西タツ　宮城　太田みつ　山口　河野キヨ
熊本　甲斐なほね　兵庫　横山つや　香川　田中チカ
福島　長尾カズノ　富山　成田ヒサ　東京　日下鐵
佐賀　山口ブシ　和歌山　山本閑　福井　增田ますな

愛知　赤堀　靜　熊本　宮田　まき　宮城　推川　たま
福岡　森山　フサ　（いろは順）

○日本女學校卒業式　同校にては第三回卒業式を去る十二日午後一時より擧行せり勅語捧讀卒業證書並に從業證書の授與等最と嚴肅に執行され了りて來賓根本文學博士及び下田次郎氏の講話あり各教場には生徒の成蹟品ある書畫裁縫等を陳列して來賓の參觀に供せしが裁縫初め繪にも見るべきものありしが特に筆蹟の甚だ麗はしき者多きを認めたり因に記す同校今回の卒業生は本科五十三名専修科二十三名にて總計七十六名なり

○池田侯金婚式園遊會　侯爵池田章政氏は本月二日金婚式を擧げ同四日午後一時より内外の知人を大崎村の本邸に招待し盛んなる園遊會を催ふせり即ち表門裏門には綠門を設け大國旗を掲げ車、馬供待、受附、能樂堂、奏樂所、ピーア店、茶、煙草所、湯呑所、立食堂等おろそかならず定刻に至り來會したるは久邇宮鳩彦王、同稔彦王兩殿下を始め田中宮内大臣、同夫人、德大寺内大臣、德川慶喜公、同家達公、同夫人、香川皇后宮大夫、同令孃、高倉典侍、東久世樞密院副議長、同夫人、木戸侯、同夫人、津輕侯、同夫人、鍋島侯、中山侯、上杉伯、同夫人、戸田伯、同夫人、同令孃、細川侯、同夫人、島津忠濟公、黑田侯、山内侯、同夫人、德川圀順、同昭武、伊達侯、蜂須賀侯、池田仲博侯、池田子、池田男、曾我子、加納子、同夫人、三宮同夫人、中川伯、松浦伯、松方巖、同夫人、松方伯代（澁澤榮一男）同夫人、二條公、三條公、ウエストン孃、ハーレス孃、園田孝吉、同夫人、工藤一記、花房直三郎、有松英義、中岡、黑瀨兩少將等陸海軍將校數十名、有島武、林賢德等無慮二百餘名にて戸田伯夫妻、侯爵令嗣詮政氏、

花房宮内次官等一々來賓を歡待し洋館玄關より導かれて樓上に至れば侯爵夫妻が五十年前に着用したる熨斗目の重ねに麻裃幷に綾縫ある襠に綸子の下衣其他婚禮に用ひたる膳具、銚子、煙草盆、褥等を陳列し更に樓下に降れば田中宮内大臣、第十五銀行其他諸家より贈りたる金銀珠玉の祝品を所狹き迄に駢列し南面の大廣間正面には 兩陛下御下賜の銀製雙鶴の置物三組金盃、御酒肴等幷に廿三年 陛下侯爵邸臨幸の節賜りたる七寶燒花瓶一對、其右側には邦彦王殿下より賜らせられたる花鳥象嵌の花瓶一對等を飾り侯爵夫妻は家從、看護婦等に扶けられ其入口にて一々來賓に挨拶したり餘興には能樂の催あり終つて食堂を開き侯爵の萬歲を祝し黃昏ころ散會したるが尚ほ五日は舊藩出身者學生等を招きて同じく能狂言の催ありたり

○北京の女學校 榮壽固倫公主久しく女學校設立の志を懷き居られたるが曩に西太后に北京に女學校を設立し日本米國より女敎師を招聘したき旨を奏請せられたるが此頃許可せられて同公主に女學校總理を命ぜられたりといふ

○妙齡の女子靴磨を營む 去月紐育のクオール街の一室を借りて立派なる裝飾を施し靴磨店を開業したるフオーレストと呼ぶ姉妹あり姉は二十歲にして妹は十八歲なるが共に珍らしき美貌なるより普通の靴磨代の二倍即ち十仙を徵せらるゝに拘はらず開業の當日正午までに一千人の來客ありたる由なり姉は左を妹は右の靴を同時に磨くなりと云へど如何にして此等多數の客を磨き得るか疑はしされど此姉妹が新趣向の營業に依りて多くの富を造り得ることは疑ひなしと云ふ

○二十年間眠りたる女 佛國のテネルに住する

ーグエリート、ポアイエンヴォーと云ふ女は止動病的の睡眠に陷り既往二十年間曾て一回も筋肉を動かしたることなかりしが此程腕に膿瘍を生じ之を刺さゞるべからざることゝなりシャーリユー博士は手術を爲したるに睡眠者は之を感じて二十年來始て手の微動を爲したりと云ふ

○少女隱遁所　戀愛は神聖なりなどと、騷ぎ立る飜譯文士に聞かしめなば霜夜の驚鐘とも云ふべきか茲に英國のデリー、エキスプレッスの報道に依れば近頃同國に於ては凡ての男子に對し情を有たぬと云ふ婦人の一協會設立せられたりと事務所をガイドフォードに置きて少女遁隱所と名け會長あり書記あり、何れも妙齢の婦人にて嬌名嘖々たる者なるが其規則を閲するに、

第一條　本會々員は年齢十七歲以上にして衣服は長き裳を着け頭髪は淸潔に梳るを要す

第二條　會員は總て男子の誘惑を斥け戀愛を排し如何なる理由ありとも絕對に婚姻を拒絕すべし

第三條　會員は婚姻を冀ふが如き意思薄弱の婦人に對し諄々理解を與へ其心を飜さしむるに努力すべし

第四條　會員は自ら獨立生活の途を求むべし

右の條規に違背する者は五リーブル以上の罰金を課す但し男子に對する交際單に友誼に止まるものと認定する時は之を許容する事あるべし

○日本赤十字社博愛丸救護演習　日本赤十字社病院船博愛丸は豫定の通り本月六日午前十一時四十分大阪築港内に於て救護演習を開始し築港事務所棧橋附近に設置したる患者集合所より重輕症及傳染病等は各假裝患者廿名を艀船にて輸送し重症

者は「ダビツト」を以て傳染病者は「スチームケーン」を用ひて收容し輕症者は看護人介保して各病室に誘ひ次て患者を手術室に送り繃帶交換等の作業を試み午後一時演習を結了したり、此際第四師團軍醫部長谷口軍醫監大阪衛戍病院長中舘二等軍醫正及高崎大阪支部長等來觀あり右終て同一時より四時迄招待員の參觀あり次て七日八日の兩日一般社員の縱覽を許し約六千人來觀せりと

○花見　上野の早櫻は二三日前の雨に哀れや摧殘して見る影もなき姿となれるもあれど向島はまだ〳〵盛りの色を留むれば今日を晴れと着かざりてその一日を一年の春遊びと浮かれゆく人々の多きも又た人情とやいはまじ或る物好きなる記者の花見の傍ら老若男女の服裝を調へて此春の流行を知る參考にせんとて記したるを見るに▲何處かの會社員であらう白木屋新形のモーニングを着て華奢なステツキを振り廻はし乍ら妹とも覺しき十七八の令孃と共に東照宮前の石段に佇んで居たが其の令孃の服裝は小豆色の風通御召に闌の堅桁を染出し帶は紫紺地の唐織扇面散らしへ光琳風の草花を織出したもので往くさ來るさの目を引いて居つて下着は何やら分らなかつたが長襦袢は確か紅色絞の羽二重の樣に見受けられた▲向島で見かけた矢張十七八の令孃は素鼠の紋羽二重に霞のぼかしと有職櫻を裾模樣にしたのを着て居たが帶は茶地の繻珍であつた▲動物園の前に陣を取つて盛に鬼ツ子をして居つた男女の一群の中に一人片股を脱いだ十八九の娘があつたが、其襦袢は櫻色地に疋田絞りの大立浪を染めたので地質は友禪でなく反て紋羽二重であつた▲男の着物は壁御召と京市樂に止めをさした樣である同く上野で見かけた妻君同伴の紳士は壁御召の茶がゝつた鼠色萬

筋に紋織博多の鐵色の帶を締め京市樂の鐵色の羽織を被て居つた▲同所で同日官吏風の人と擦違つたが之も京市樂の茶がゝつた萬筋へ同く京市樂の鐵色無地の羽織を被り帶は博多献上の細いものを締めて居つた▲淺草の馬道で廿五六の銀杏返に結つた年增を見かけたが其帶だけは又格別で片側は黑繻子、片側は濃い葡萄の地色へ友ぬきで吉野を縦に出し横には赤と白と白茶と鼠とで吉野を織り夫に白で大小の古代桐を織出した晝夜帶であつた▲之も矢張淺草で小紋縮緬へ銀泥入の波を染出した裾模樣を着て茶の厚板へ金と白糸で菊の模樣を出した帶を締めたのとも一人は同じ年配で栗梅地の御召へあつさり紋を相樂縫にして幽谷織の茶鼠の帶を締めた廿五六の婦人に行遇つた▲向島のボートレースで見たのは廿三四の女で小豆色の御召光琳鶴と敷松葉の裾模樣を置き繻珍の薄小豆色へ松竹梅を織出し色糸で影日向を取合せた帶を締めて居た▲それから廿四五の婦人で無地御召の裾へ破麻の葉を白で相樂縫にしたのを着て居た人にも逢つたが頭が束髮だつたので何だか着榮がしない樣な心持がした▲三十越した婦人では之ぞと思つた服裝をして居たものは誠に少かつたが一人上野の動物園で見かけたのは何處か垢脱けのした官吏の奥樣風の人で一見縞縮緬と見紛ふ竪縞の山繭縮緬を二枚襲ね裾には態と花色羽二重を用ゐ其上へ同く山繭縮緬の羽織を被り帶は鐵色に細い唐草を織出した繻珍であつた羽織の裏は多分羽二重だつたのであらう何樣も緞子とは受取れなかつた

○風邪に罹らぬ注意

暖き室を出でゝ急に冷たき空氣に觸るゝときは風邪に罹り易きことは世人の屢實驗する所なるが之を防ぐには僅の注意にて足れり即ち此の如き塲合には口を閉ぢて鼻孔よ

り呼吸すれば風邪に罹ることなし多くの人は集會の席より戸外に出で在りし事に就きて喋々するを常とすこれ頗る危險なることにして暖き室を出でたる後は外の溫度に馴るゝまで口を開かざるを最良の方法となすなりと

新刊批評

◎家庭雜誌（毎月一回定價金六錢）　萬朝報社の堺枯川氏の編輯せるものにて本鄕二丁目由分社より發刊す其の特色とするところは健全の思想、改革氣象、運動の趣味、親切の敎訓、平易の文章、通俗の說明にありといふ家庭必須の雜誌なるべし。

◎兒童硏究（毎月一回會費金拾錢）　第六卷第壹號より改良を施して論說記事ともに見るべきもの多し兒童敎育に從事するものは必ず購讀せざるべからざる好雜誌なり發行所富山房

◎家庭の友（毎月一回定價金五錢）　その体裁內容とも殆と家庭雜誌と相似たり如何にして家族的交際を盛んならしむべきかの問題につき嚴本、潮田、久保、山脇、松波等諸家の案あり家庭料理、少女日記等一讀して趣味あるを覺ゆ

◎バリシナ（定價金二十錢）　バイロンのParisinaを譯したるものにて下欄に原文を掲けたれば對照の便ありて英學硏究上利益少からざるべし譯者は木村鷹太郎氏、發行元は日本橋區橋町一丁目松榮堂なり

◎湘烟日記（一册定價金六十錢）故中島俊子の遺稿なり詳細は本誌雜錄に就きて知るべし

新刊書目

愛國婦人	第二十六、七號	東京	大日本女學會
婦人と子供	第三卷第四號	東京	フレーベル會
兒童硏究	第六卷一、二、三號	東京	敎育硏究所
法之母	第十七、八號	東京	夫人正法會
女子の友	第百三十六號	東京	東洋社
商家の友	第十三號	仝	時事新報社
佛敎文藝	第一ノ三號	仝	佛敎社
音樂の友	第三ノ六號	仝	樂友社
婦女新聞	第百五十一、二號	仝	婦女新聞社
偕行社記事	第三百十一號	仝	偕行社
實業時論	等五十一號	仝	實業時論社
女子新聞	第廿二三號	仝	女子新聞社
國學院雜誌	第九ノ一號	仝	國學院
會報	第五號	東京	法令審議會
工談雜誌	第百五十八號	仝	工談會
敬愛彙報	第三號	神戸	敬愛女學校
家庭雜誌	第一號	東京	由分社
家庭の友	第一號	仝	內外出版協會
瑞穗雜誌	第二ノ二	栗崎	東吟會
高知敎育雜誌	第百三十號	高知	高知敎育會
料理講義錄	前期第十號	東京	大日本割烹學會

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

塚原澁柿著　小堀鞆音鏑木清方畫

小牧合戰

新刊

菊版洋裝
口繪入美本
定價金五十五錢
郵稅十錢

豐太閤を龍に譬ふれば東照公は以て虎に比すべし、龍吟ずれば雲起り、虎嘯けば風生ず、小牧山の大合戰は此の獰龍猛虎の拏攫なり、山岳震撼して波濤洶湧せるの壯觀は決して他人の能く萬分が一をも寫し得る所にあらず。塚原澁柿先生學問該博にして最も近古の戰史に精しく豐臣德川兩公の事蹟に深く意を注ぎ闡幽微顯の功一にして足らず、此書の如き前古未發の秘密を探索し以て正史の遺漏を補ふ、特に長久手の大殺を以て其原因嬋娟たる一位の美人にありとせる如き實に奇想天外より來れるものと謂ふべし、且其口繪は目下歷史畫界の泰斗と仰がるゝ小堀鞆音氏揷畫は鏑木清方氏の筆になるもの、文章と相須て英雄美人の眞面目を發揮せり。

發兌元　東京築地二丁目　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

福本日南先生著

筑前志

筑前は九州の要衝に當り上世夙に太宰府の設置せられし處應神帝以來鎭西の治と外交の政とを綜統せり爾後都督府鎭西府探題府奉行府等皆此に於てせざる無し日南先生此地に生れ高遠の見と該博の識とを以て研究多年遂に此著あり志たる七篇曰く氣風曰く國志曰く地名考曰く都邑曰く古歌曰く雜記曰く入筑記而して氣風は九州人の天資に溯りて人種の本源より發擢し其說は實に天荒を破り國志は神武天皇より箱田六輔に至り此間の內政外交治亂興廢偉人傑士碩學名匠包括網羅せざる無し地名考は古來和漢學者の謬妄を一排し前人未發の見を立て都邑は博く福岡の沿革を叙して掌を指すが如く古歌千載の範藻を發し併して史誌の參考とす可く讀みて雜記に至れば百貨の市に遊ぶが如く古今に出入し東西に徴證し制度文學風尚博物兼該して遺さず入筑記は先生歸鄉の作夙に世の傳稱する所なり先生の本志を著す和銅の遺制を再興し益軒の事業を大成するに在り其志の在る所と其書の價値と兩ながら察す可し是れ筑前志たると同時に九州志なり史學文學家は固より論なく政事家事業家教育家殊に九州の人士は必ず一讀せざる可からざる新著也

總クロース金字
入最上美本壹册
定價壹圓貳拾錢
小包料金拾錢

●發行所　東京築地二丁目　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

著者	書名	定價	郵税
品川彌次郎 平田東助 共著	信用組合摘用	定價五錢	郵税二錢
濱口土右衛門著	財政と國力	定價二十三錢	郵税四錢
中村佐平著	銀行簿記學	定價五十錢	郵税六錢
須田毎六著	銀行利用法	定價四十錢	郵税六錢
川崎直衛譯	國際貿易論	定價六十錢	郵税八錢
平野秀吉著	國語聲音學	定價六十錢	郵税六錢
大宮兵馬著	中等日本文典	定價五十五錢	郵税六錢
富士谷御杖述	土佐日記燈	全三冊 定價一圓五十錢	郵税十錢

東京 株式會社 國光社 發行

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

著者	書名	定價
岡部時次郎 森田廣吉 共編	教育適用 舞踏遊戯法	定價二十二錢 郵税四錢
吉丸一昌編纂	名家 修養談叢	定價三十五錢 郵税六錢
西主一 野本衛佐美 合著	新案 海軍遊戯法	定價二十錢 郵税四錢
生田目經德編	標註 雅文消息集	定價二十錢 郵税四錢
三輪田眞佐子著	十三版 女子之本分	定價二十五錢 郵税六錢
堀内新泉著	第三版 家庭の鑑	定價十八錢 郵税四錢
三輪田眞佐子著	第八版 女子處世論	定價廿錢 郵程四錢
諸名家撰述 國光社編纂	新編 ひめかゞみ	定價二十五錢 郵税四錢

東京 株式會社 國光社 發行

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

堀内新泉著

少女讀本

月雪花全部完成

各定價金拾八錢

郵税金各四錢

孃さん方お待ち兼の少女讀本全部完成いたしました、奇麗な本に出來ましたサァ皆さん雲雀高く霞に陰れて鳴く野邊や花かつ散る櫻の木陰、或は緑の柳髮くしけづる窓の下此こを繙ましたならどんなに面白くどんなに可愛らしいかとても御話にはなりませんマァ一寸讀で御覧なさい

發行所　東京築地二丁目　株式會社國光社

明治三十六年四月十五日發行　毎月二回一日十五日發行　第拾參年第八號　明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可

（……地株式會社國光社印刷所印刷）